

18
766



始



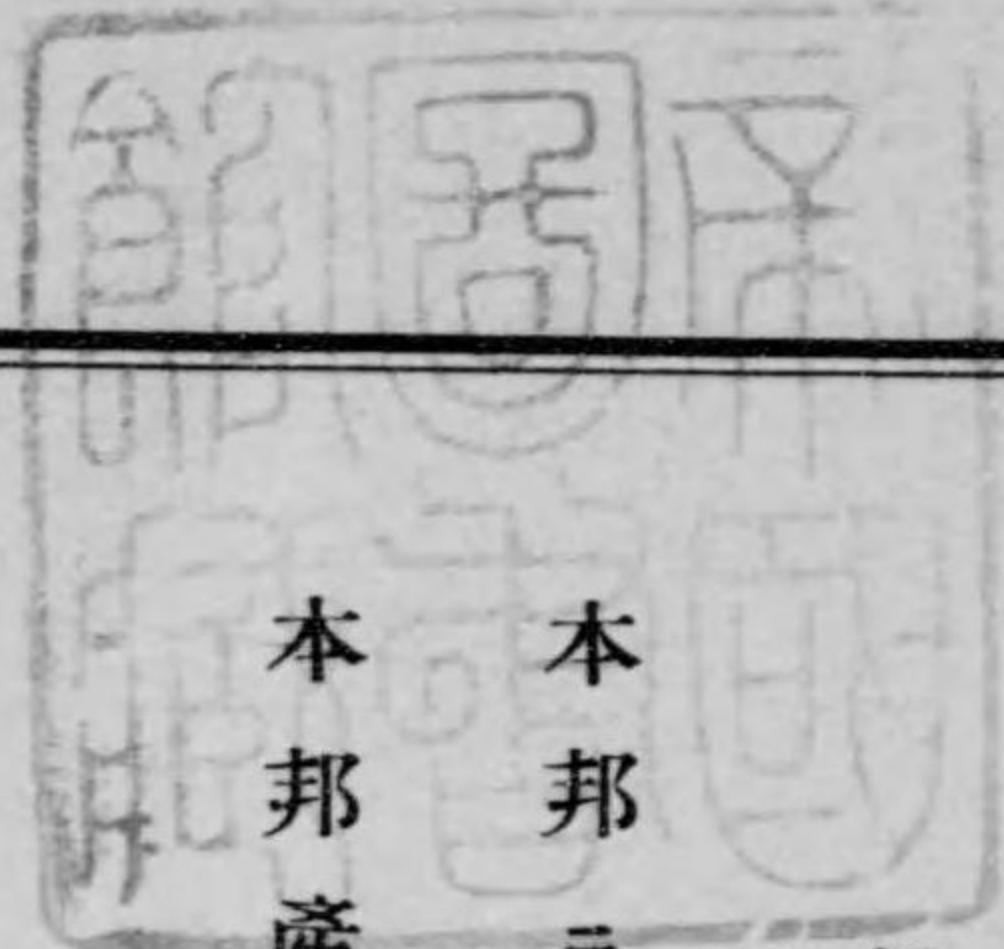
1-3X68

18-766

地質調查所報告

第四十二號

18
766



地質調査所報告第四十二號

大正二年十二月

目次

本邦ニ於ケル石炭
本邦産石炭ノ分類及品質

二八七頁

大正
3. 7. 23
製本

寄贈本

本邦ニ於ケル石炭

本邦ニ於ケル石炭

目次

緒言	一頁
第一章 總說	五頁
一 石炭鑛業ノ發達一斑及石炭ノ產出額	五頁
二 世界ニ於ケル石炭ノ產出額ト本邦ニ於ケル石炭ノ輸出入額	一一頁
三 石炭ノ分布	二四頁
四 石炭ノ品質	三〇頁
五 炭量	三三頁
六 結章	三七頁
第二章 炭田概觀	五九頁

A	
中生代ニ於ケル石炭	五九頁
大嶺炭田	五九頁
天草炭田	六四頁
其他ノ炭田	七三頁
B	
第三紀ニ於ケル石炭	七九頁
一 樺太	
中部炭田即チ内淵炭田	八〇頁
能登呂炭田	八八頁
幌内炭田	九二頁
東海岸ニ於ケル石炭	九三頁
西海岸ニ於ケル石炭	九四頁
二 北海道	
石狩炭田	九六頁

(一)	蘆別炭田	一〇四頁
(二)	歌志内炭田	一〇七頁
(三)	奈井江美唄炭田	一〇九頁
(四)	幾春別炭田	一一一頁
(五)	幌内炭田	一一三頁
(六)	夕張炭田	一一六頁
(七)	穂別炭田	一二一頁
	茅沼炭田	一二二頁
	雨龍留萌炭田	一二四頁
	羽幌炭田	一三二頁
	幌延炭田	一三五頁
	宗谷炭田	一三八頁
	釧路國	一四〇頁

十勝國	一四五頁
日高國	一四七頁
三 本 州	一四八頁
常磐炭田	一四八頁
油 戸 炭 田	一五八頁
濃 尾 炭 田	一六一頁
熊 野 炭 田	一六六頁
小 野 田 炭 田	一七〇頁
本州東北部ニ於ケル石炭	一七四頁
(一) 陸奥國	一七四頁
(二) 陸 中 國	一七六頁
(三) 陸 前 國	一七八頁
(四) 羽 後 國	一八一頁

羽前國	一八四頁
(五) 岩代國	一八五頁
(六) 磐城國	一八五頁
(七) 本州中部ニ於ケル石炭	一八七頁
畿内ニ於ケル石炭	一九七頁
中國及瀬戸内海諸島ニ於ケル石炭	一九八頁
四 九州及琉球	二〇三頁
筑豊炭田	二〇三頁
(一) 小倉區域	二一〇頁
(二) 遠賀川區域	二一一頁
(a) 遠賀區	二一一頁
(b) 鞍手田川區	二一五頁
(c) 鞍手嘉穂區	二二三頁

(d) 嘉穂區	二二八頁
(三) 宗像區域	二三二頁
(四) 福岡區域	二三三頁
三池炭田	二三五頁
唐津炭田	二四一頁
佐世保炭田	二四八頁
崎戸炭田	二五五頁
松島炭田	二五八頁
高島炭田	二六一頁
日向ノ南東部ニ於ケル石炭	二六六頁
八重山炭田	二六七頁
五 臺灣	二六八頁
臺灣炭田	二六九頁

本邦ニ於ケル石炭

農商務技師 井上禧之助

緒言

石炭ハ本邦ニ於ケル最モ重要ナル鑛産物ナルモ其鑛業ノ急激ナル發達ハ近年ノコトニ係レリ、約三十年前ニ於テハ幼稚ナル古法ニ依リ採掘セラレ其産出額隨テ甚タ僅少ナリ、蓋シ本邦ニ於ケル石炭鑛業ノ開發ハ往昔ニ溯ルコトヲ得ヘキモ炭田ノ地質調査ハ他ノ鑛産地ノ地質調査ト共ニ乘テ、之ヲ顧ミルモノナシ、近時一般鑛業ノ發達ハ地質ノ精調査ヲ促進スルニ至レトモ之ヲ完成セルノ地ハ僅ニ一小部分ニ止マリ、隨テ正確ニ炭層賦存ノ状態ト炭量ノ多寡トヲ極ムルニ至ラサルハ遺憾トスル所ナリ

本邦ニ於テ始メテ地質調査ヲ施行シタルハ北海道ニシテ實ニ明治五年ナリトシ、「ライマン」氏其助手ト共ニ之ニ從事シタリ、爾後四年間ニ於



テ北海道主要炭田ノ豫察地質調査ハ概ネ完了シタリ、蓋シ其當時ニ於テハ炭田ノ踏査ハ甚タ困難ナルノミナラス炭屑ノ露頭ヲ發見シ若クハ之ヲ追跡スルコトハ至難ノ業ニ屬シ加フルニ食料運搬ノ不便ト野營ノ困苦アリ、而モ此短日月ニ此事業ヲ結了シタル諸氏ノ功績ヤ沒スヘカラサルモノアリ、明治十二年本邦ニ於ケル地質調査ノ基礎成リ同十五年本所ノ創設セラレテヨリ以來主要ナル炭田ノ地質調査ハ他ノ鑛産地ト共ニ本所技師ニ依リ施行セラレタリ、即チ筑豊及大嶺兩炭田ハ鈴木敏氏、常磐炭田ハ大塚專一氏、天草炭田ハ金原信泰氏、小野田炭田ハ野田勢次郎氏、唐津及佐世保兩炭田ハ大築洋之助氏等之ヲ調査シタリ、然レトモ是等調査施行後既ニ幾多ノ年月ヲ閱シ今ヤ採掘ノ進捗ニ依リ明瞭トナレル地質構造ヲ研究シ及各炭田ノ炭量ヲ計算スヘキ正確ナル材料ヲ得ル爲メ更ニ精調査ヲ施行スルノ必要アルモ未タ之ニ着手スルニ至ラス、而シテ本所ハ現ニ北海道ノ鑛物調査ニ從事シ雨龍、留萌炭田ハ山根新次氏、宗谷炭田ハ岡村要藏氏、幌延炭田ハ小林儀一郎

氏之カ調査ヲ施行セリ
石狩炭田ノ地質調査ハ鑛山監督署技師大井上義近氏之ヲ施行シタリ、而シテ同氏ノ特ニ同炭田ノ炭量計算ニ關シ有益ナル助力ヲ與ヘラレタルハ感謝スル所ナリ、明治三十六年鑛山局技師木戸忠太郎、福岡鑛山監督官松田繁兩氏ハ筑豊炭田ノ精調査ヲ施行シタリ、此外本炭田ニ關シテハ各炭坑ノ技師其必要ニ應シ特ニ調査セル處アリ、臺灣ノ本邦併合後其北部ニアル炭田ハ官民ノ注意スルトコロトナリ其概調査ハ十三年前ニ完結シ、近時福留喜之助氏監督ノ下ニ更ニ再調査ヲ開始シタリ、而シテ同氏ノ同炭田ノ炭量計算ニ關シ有益ナル助力ヲ與ヘラレタルハ感謝スル所ナリ、明治三十九年ヨリ同四十一年ニ至ル三年間樺太炭田ハ樺太廳技師川崎繁太郎氏ニ依リ調査セラレ同廳囑託片山量平氏亦調査ニ從事シ此外鑛山局技師西和田久學氏、本所技師大築洋之助氏一部ノ炭田ノ調査ニ從事シタリ
以上調査ノ結果ハ本所出版ノ要報、報告、説明書等ニ記述セラレ又ハ政

府、學會等ノ種々ノ印刷物ニ公ニセラレタルモ其一部ハ之ヲ得ルニ難キモノアリ

以上調査ノ結果ハ一二ノ場合ヲ除ケハ本邦ニ於ケル炭量ヲ正確ニ計算スルコト能ハサルナリ、然レトモ之ニ依リ炭田ノ地質構造ヲ概察シ炭量ノ概數ヲ計算スルニ足レリ、實ニ多數ノ炭田ハ調査後年月ヲ經タルコト既ニ久シキモノアリ、或ハ僅ニ豫察調査ヲ施行シタルニ止マルモノアリ、蓋シ本州、九州及四國ノ炭田ハ三四十年前ヨリ世人ノ注目スルトコロナリ、隨テ將來ニ向テ此地域ニ於テ大ナル炭田ヲ發見スルコトナカルヘシ、故ニ今後ニ於ケル調査ハ地下ノ深所ニ於ケル炭層賦存ノ有無ヲ考察シ及其賦存ノ狀態ヲ明ニシ地質構造ヲ研究スルト共ニ未調査區域ノ精調査ヲ施行スルニアリ、樺太、北海道ニ於テハ炭田ノ一半僅ニ豫察地質調査ヲ經タルノミニシテ他半ハ未調査區域ナリトス、隨テ將來或ハ新炭田ヲ發見シ或ハ既知炭層ノ連續セル新炭田區域ヲ發見スルコトアルヘシ、茲ニ在來ノ不完全ナル調査材料ニ基ツキ本

邦ニ於ケル石炭ノ供給如何ヲ論スルハ其當ヲ得タルモノニアラサルヘシト雖モ而モ是ニ由テ以テ本邦ニ於ケル石炭賦存ノ狀態ヲ察スルコトヲ得ン

本篇ヲ草スルニ當リ鑛山局長并ニ鑛山監督署員ハ特ニ坑内圖等ヲ閱覽スルノ便ヲ、鑛山會社ニ於テハ有益ナル資料ヲ供セラレ調査上便益ヲ得タルコト尠少ナラス、茲ニ感謝スル所ナリ

第一章 總說

一 石炭鑛業ノ發達一斑及石炭ノ產出額

石炭鑛業ノ發達一斑 石炭鑛業ノ沿革ニ關シテハ記錄ナキヲ以テ之ヲ詳ニスルヲ得サレトモ九州ニ於テハ石炭ハ數百年間其地方ノ需用ニ應スル爲メ探掘セラレタリト云フ、蓋シ明治維新前ニ於テハ石炭ハ家事用ノ薪炭ニ代用セラレ又ハ製鹽用ニ使用セラレ一部僅ニ輸出若クハ外國船ノ燃料ニ供用セラレタリ、其當時ニ於ケル鑛業ハ甚々幼稚ニシテ產出額隨テ甚々僅少ナリ、九州ニ於ケル筑豊、三池、唐津、高島ノ諸

炭田、本州ニ於ケル常磐炭田、北海道ニ於ケル茅沼及白糠炭田ノ如キ其當時ニ開發セラレタリ、明治維新後開發ノ機運到來シ同年高島炭坑ニ於テ本邦最先ノ堅坑外國ノ技術家ニ依リ掘下セラレタリ、六年後外國人ニ依リ種々改良セラレタル高島三池、兩炭坑ハ帝國政府ノ有ニ歸セリ、爾來各炭田ニ於テ石炭鑛業ヲ促進スヘキ企圖アリテ特ニ筑豊炭田ニ於テ著シカリシモ殊ニ大ニ發達セルモノナク唯僅ニ年々產出額増加セルノミ、明治十九年ヨリ同二十三年ニ至ル五年間ハ本邦ニ於ケル石炭鑛業ノ一新紀元ヲ劃シ大規模ノ鑛業計畫企圖セラレ運搬鐵道布設セラレ築港ノ計畫徐々ニ成ラントセリ、日清戰爭後鑛業ハ甚シク活氣ヲ呈シ產出額ハ其翌年ニ於テ著シク増大シタリ、日露戰爭モ亦石炭鑛業ニ於ケル一新紀元ヲ劃シ明治三十九年即チ戰爭ノ翌年ニ於テハ石炭鑛業ハ未曾有ノ活況ヲ呈シ鑛業上設備ノ改良及大規模ノ鑛業ノ企畫ハ大炭田ニ於ケル炭坑ニ依リ施行セラレ產出額著シク増加シタリ、斯ク近年ニ於ケル石炭鑛業ノ勃興ハ工業ノ急激ナル進歩、交通ノ

發達并ニ石炭ノ外國輸出ノ増加ニ歸スヘク其發達ニ關シテハ他日ヲ期シテ更ニ詳細ニ記述スル所アラントス
 石炭ノ產出額 往昔ニ於ケル石炭ノ產出額ハ之ヲ知ルヲ得ス、明治維新前ニ於ケル產出額ノ甚タ少ナカリシハ疑ヲ入レス、明治維新後ノ七年間ハ統計ノ以テ據ルヘキナク同七年政府ニ於テ始メテ統計ヲ發表シタリ、同年以後ノ產出額次ノ如シ

年 別	產 出 額	年 別	產 出 額	年 別	產 出 額
明治七年	二〇九、五一五 <small>期</small>	明治十四年	九三二、四一五 <small>期</small>	明治二十一年	二〇三八、七四七 <small>期</small>
明治八年	五七一、六四五	明治十五年	九三六、四六一	明治二十二年	二四〇七、二四五
明治九年	五四九、二一〇	明治十六年	一、〇一一、二四七	明治二十三年	二六二八、六二九
明治十年	五〇二、九九九	明治十七年	一、一四八、八二九	明治二十四年	三、二〇〇、六一六
明治十一年	六八五、〇〇九	明治十八年	一、三〇三、七六八	明治二十五年	三、二〇〇、四四〇
明治十二年	八六四、二一八	明治十九年	一、三八四、九二八	明治二十六年	三、三四五、四九四
明治十三年	八八八、九三五	明治二十年	一、七五九、九一七	明治二十七年	四、三〇五、四二六

明治二十八年	四八〇九、八八一	明治三十四年	九〇九〇、三五五	明治四十年	一四、〇一〇、〇七四
明治二十九年	五〇五八、八四三	明治三十五年	九八四〇、〇五五	明治四十一年	一五、〇六二、六一三
明治三十年	五二四八、〇五〇	明治三十六年	一〇、二一九、八八八	明治四十二年	一五、三三〇、六五〇
明治三十一年	六七九七、五四九	明治三十七年	一〇、八五四、七二四	明治四十三年	一六、〇一二、九九八
明治三十二年	六八〇四、二七九	明治三十八年	一一、六八八、二四三	明治四十四年	一七、八八七、五八〇
明治三十三年	七五二九、七七八	明治三十九年	一三、一五四、六五九		

本表ニヨリ明治十五年ヨリ同四十四年ニ至ル間毎十年ノ産出額及毎十年間ノ總産出額并ニ其増加率ヲ見ルニ次ノ如シ

年 別	産出額	増加率
明治十五年	九三六五 <small>千噸</small>	三四
同二十四年	三、二〇〇、六	二、八強
同三十四年	九〇九〇、四	二、〇弱
同四十四年	一七七八八、九	

年 別	各十年間ニ於ケル産出額	増加率
自明治十四年 至同三十五年	一七、八二〇、四 <small>千噸</small>	三、二弱
自同三十五年 至同四十四年	五六一九〇、一	二、四
自同四十四年 至同四十五年	一三三、九六三、〇	

以上増加ノ趨勢ノ今後永續スヘキモノナルヤ否ヤヲ攻究スルハ甚々緊要ノ事項ニシテ本邦ニ於ケル石炭鑛業ノ將來ヲトスヘキモノナレトモ之ヲ解決スルニハ本邦ニ於ケル炭田地質ノ精調査ヲ遂ケテ炭層賦存ノ状態ヲ詳ニシ正確ナル炭量ヲ計算シ太平洋沿岸諸國殊ニ支那ノ炭田地質ノ精査ヲ遂ケ東洋ニ於ケル石炭市場ト工鑛業發達ノ趨勢ヲ研究セサルヘカラサルナリ

此ノ如ク石炭ノ産出額ハ急激ナル増加ノ趨勢ニアリト雖モ年ニヨリ増加率ニ差異アルハ固ヨリ時ニ産出額ノ減少スルコトアリ、其主要ナル原因ハ工業并ニ運輸業ノ不況、炭價ノ下落、炭坑ノ變災、輸出ノ減退等ニアルヘク此等事項ニ關スル調査ハ他日ヲ期セン

明治二十八年以來筑豊炭田ハ本邦石炭總産出額ノ過半ヲ産出シ三池、常磐、石狩及唐津ノ諸炭田ハ百分ノ十乃至十五ヲ産出セリ、即チ以上ノ諸炭田ハ本邦石炭總産出額ノ百分ノ九十以上ヲ産出シ、其他ノ小炭田ハ僅ニ小額ヲ産スルニ過キス、而シテ以上諸炭田ヨリ産出セル石炭ハ

殆ント全ク有煙炭ニ屬シ無煙炭并ニ褐炭ノ產出額ハ僅ニ總產出額ノ百分ノ一乃至一、五ナリトス

石炭鑛業ノ中心 現時ニ於ケル石炭鑛業ノ中心ハ北部九州ニシテ主要ナル炭田ハ多ク此地方ニ集マリ良質ノ石炭ヲ埋藏シ本邦石炭總產出額ノ三分ノ二以上ヲ產出ス、近時北海道ノ炭田ハ世人ノ注意スル所トナリ新炭田ヲ開發スヘキ大規模ノ鑛業ハ現時各所ニ於テ企畫セラレ加フルニ水陸ノ交通ヲ促進セントスルノ機運ニ際セリ、最モ豐富ニシテ最モ重要ナル炭田ハ即チ筑豊炭田ニシテ現時其盛ヲ極ム、三池炭田ハ築港完成ノ結果其產出額急ニ増加シ產出額筑豊炭田ニ亞クニ至レルモ兩者ノ間尙甚シク逕庭アリ、然レトモ一炭坑トシテ其產出額ニ於テハ遙ニ他ノ炭坑ヲ凌ケリ、將來ニ於ケル開發ハ北海道ナリト稱セラル、現時ハ僅ニ百五十萬噸内外ヲ產出スルニ過キサルモ數多ノ有望ナル炭田ハ鐵道運搬ノ不便ト并ニ港灣ノ設備不完全ナル爲メ未タ開發セララル、ニ至ラス、常磐炭田、唐津、佐世保等肥前ノ諸炭田ノ地下深所

ニ於ケル石炭賦存ノ狀態ヲ知ルノ必要上試錐ノ必要アリテ此等諸炭田將來ノ鑛業ハ全ク其結果如何ニ關ス、樺太ハ氣候寒冷ニシテ一年間僅ニ四ヶ月乃至六ヶ月ノ航海ニ止マリ交通、運搬尙甚タ不完全ナルヲ以テ近キ將來ニ於テ北海道并ニ九州ニ於ケル石炭ト競争スルコト蓋シ困難ナルモノアラン、其他ノ炭田ニ於テハ本邦ニ於ケル石炭鑛業ニ影響ヲ及ホスヘキモノ一モアルコトナク其稼行炭層ヲ埋藏セル面積小ニシテ品質劣等ナリ

筑豊炭田ノ石炭ヲ搬出スル若松、門司附近ノ地ハ人口及富力ニ於テ近時著シク増加シタリ、九州ニ於ケル其他ノ石炭輸出港ハ唐津、長崎及三池ナリトス、北海道ノ石炭ハ小樽、室蘭ニ搬出セラレ是ヨリ汽船ニ積載ス、常磐炭田ハ東京ニ近ク鐵道ノ便アリテ石炭ハ東京ニ輸送セラル、モノ多シ

二 世界ニ於ケル石炭ノ產出額ト本邦ニ於ケル石炭ノ輸出入額

世界ニ於ケル石炭ノ産出額 世界礦物年鑑ニヨリ世界ニ於ケル石炭ノ産出額ヲ擧クレハ次ノ如シ

年次	國名	北米	英吉利	獨逸	奧國	佛蘭西	露西亞	白耳義	日本	支那	加太	澳大利	印度	亞非利加	西班牙	墨西哥	其他諸國	總計
千八百八十二年	北米	八九,一	一五九,一	六五,四	一五,六	二〇,六	三,八	一七,六	九	一〇	一七	二六,一	一	一	一	一	四六	三六,一
千八百八十三年	北米	九八,一	一六六,四	七〇,四	一七,〇	二二,三	四,〇	一八,二	一〇	一七	一七	三,一	一	一	一	一	五〇	四八,五
千八百八十四年	北米	一〇〇,二	一六三,三	七二,一	一八,〇	二〇,〇	四,〇	一八,一	一〇	一七	一八	三,四	一	一	一	一	四六	四〇,九
千八百八十五年	北米	一〇二,三	一六〇,〇	七三,七	一九,〇	二〇,四	四,〇	一七,三	一〇	一七	一九	三,七	一	一	一	一	四一	四二,八
千八百八十六年	北米	一〇四,〇	一五七,一	七五,七	二〇,八	一九,九	四,五	一七,三	一〇	一七	一九	三,七	一	一	一	一	四一	四二,八
千八百八十七年	北米	一〇六,一	一五四,八	七七,二	二二,九	一九,三	四,五	一八,四	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千八百八十八年	北米	一〇八,二	一五二,七	七八,〇	二三,九	一九,二	四,五	一八,四	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千八百八十九年	北米	一〇九,三	一五〇,六	七九,〇	二四,八	一九,一	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千八百九十年	北米	一一〇,四	一四八,五	八〇,〇	二五,七	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千八百九十一年	北米	一一一,五	一四六,四	八〇,〇	二六,六	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千八百九十二年	北米	一一二,六	一四四,三	八〇,〇	二七,五	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千八百九十三年	北米	一一三,七	一四二,二	八〇,〇	二八,四	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千八百九十四年	北米	一一四,八	一四〇,一	八〇,〇	二九,三	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千八百九十五年	北米	一一五,九	一三八,〇	八〇,〇	三〇,二	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一

千八百九十六年	北米	一一七,〇	一三六,九	八〇,〇	三一,一	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千八百九十七年	北米	一一八,一	一三四,八	八〇,〇	三二,〇	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千八百九十八年	北米	一一九,二	一三二,七	八〇,〇	三二,九	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千八百九十九年	北米	一二〇,三	一三〇,六	八〇,〇	三三,八	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千九百年	北米	一二一,四	一二八,五	八〇,〇	三四,七	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千九百一年	北米	一二二,五	一二六,四	八〇,〇	三五,六	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千九百二年	北米	一二三,六	一二四,三	八〇,〇	三六,五	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千九百三年	北米	一二四,七	一二二,二	八〇,〇	三七,四	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千九百四年	北米	一二五,八	一二〇,一	八〇,〇	三八,三	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千九百五年	北米	一二六,九	一一八,〇	八〇,〇	三九,二	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千九百六年	北米	一二七,〇	一一五,九	八〇,〇	四〇,一	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千九百七年	北米	一二八,一	一一三,八	八〇,〇	四一,〇	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千九百八年	北米	一二九,二	一一一,七	八〇,〇	四一,九	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千九百九年	北米	一二〇,三	一一〇,六	八〇,〇	四二,八	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千九百十年	北米	一二一,四	一〇八,五	八〇,〇	四三,七	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一
千九百十一年	北米	一二二,五	一〇六,四	八〇,〇	四四,六	一九,〇	四,五	一九,九	一〇	一七	二〇	三,八	一	一	一	一	四一	四三,一

本表ニヨリ明治十五年ヨリ同四十四年ニ至ル毎十年ノ産出額及毎十年間ノ總産出額并ニ其増加率ヲ見ルニ次ノ如シ

年別	產出額	增加率
千八百八十二年	三八二・五 <small>百方噸</small>	一・四強
千八百九十一年	五五一・二	一・四強
千九百一一年	七八九・五	一・四強
千九百一十一年	一、一四三・七	一・四強

年別	各十年間ニ於ケル產出額	增加率
自千八百八十二年 至千八百九十二年	四、四九一・八 <small>百方噸</small>	一・四強
自千八百九十二年 至千九百一十一年	六、三五九・六	一・六弱
自千九百一十一年 至千九百一十二年	九、九九三・三	一・六弱

年別	日本產出增加率	世界產出增加率
明治十五年 (千八百八十二年)	三・四	一・四強
同二十四年 (千八百九十一年)	二・八強	一・四強
同三十四年 (千九百一一年)	二・〇弱	一・四強

年別	日本各十年間ニ於ケル產出增加率	世界各十年間ニ於ケル產出增加率
自明治十五年 至同二十四年	三・二弱	一・四強
自同二十四年 至同三十四年	二・四	一・六弱
自同三十四年 至同四十四年	二・四	一・六弱

之ヲ本邦ニ於ケル增加率ト對照スルニ次ノ如シ

本邦ノ產出額ノ増加ハ世界ノ趨勢ニ對シ遙ニ大ナリ、而シテ增加率ハ

稍減少ノ傾向ヲ呈シ世界ノ增加率ハ殆ト一定ス
 明治四十三年ニ於ケル本邦ノ產出額ハ之ヲ世界ノ產出額ニ比スルニ
 僅ニ千分ノ十三ニシテ最多ナル北米合衆國ニ比スルモ僅ニ千分ノ三
 十四ニシテ英國ノ產出額ノ千分ノ五十六、獨國ノ產出額ノ千分ノ六十
 七ニ當リ加奈太及支那ト伯仲ノ間ニアリ、而シテ石炭ハ本邦ニ於ケル
 最モ重要ナル鑛產物ニシテ明治四十四年ニ於テ總產出價額一億八百
 餘圓ニ對シ其百分ノ五十三ヲ占ム、而シテ増加ノ趨勢ハ前述ノ如シ、本
 邦ニ於ケル鑛業ハ更ニ大ニ發達ヲ期セサルヘカラサルナリ
 石炭ノ輸入ハ一二特殊ノ場合ヲ除ケハ僅少ニシテ將來モ亦僅少ナ
 ルヘシ、蓋シ支那ヨリノ輸入ハ稍増加スルノ傾向アリ、而シテ石炭輸入
 ノ次第ニ増加スルハ太平洋沿岸殊ニ支那ニ於ケル石炭鑛業ノ發達ニ
 歸スヘキモノニシテ大ニ注意スヘキモノナリ、明治元年以來ノ石炭輸
 入額ハ次ノ如シ

一定シテ大ナル變化ナク而モ東洋市場ニ於ケル石炭ノ需要益盛ナリ、是レ蓋シ隣邦ニ於ケル石炭鑛業ノ發達セル爲メ本邦炭ノ需要増進セサルニ反シ本邦ニ於テハ工業ノ發達ニ伴ヒ其需要ノ増加シタル結果ナルヘシ、明治元年以來ノ輸出額ハ次ノ如シ

明治元年	一六、七七七	同十一年	二〇五、八四三	同二十一年	九九二、〇二四
同二年	三三、七五〇	同十二年	一九七、三二八	同二十二年	一、〇七一、八八七
同三年	五六、八四八	同十三年	二八八、四八三	同二十三年	一、二三四、三八六
同四年	六四、七五二	同十四年	二九九、五三五	同二十四年	一、二六二、〇二七
同五年	五九、一四六	同十五年	三二九、八八二	同二十五年	一、三二〇、九二二
同六年	一四八、五六一	同十六年	三九五、七九九	同二十六年	一、五二九、七一八
同七年	一一八、五一六	同十七年	五二七、六三〇	同二十七年	一、七二九、六二八
同八年	一三三、二六四	同十八年	五九一、〇二七	同二十八年	一、八七八、八〇七
同九年	一六六、八九一	同十九年	六八一、七九二	同二十九年	二、二四一、一二三
同十年	一六二、六〇六	同二十年	七一六、五四三	同三十年	二、一四八、九五二

同三十一年	二二四、二九七	同三十六年	三、五〇二、〇八一	同四十一年	二、九六〇、四〇〇
同三十二年	二五五、三三三	同三十七年	二、九四四、四六〇	同四十二年	二、九二七、九四六
同三十三年	三、二三九、八九一	同三十八年	二、五七四、〇六一	同四十三年	二、八七四、三〇九
同三十四年	三、〇〇九、八〇〇	同三十九年	二、五〇一、九六一	同四十四年	三、一一四、九六五
同三十五年	三、〇一五、三六二	同四十年	三、〇一八、八八二		

輸出石炭ハ良質ノ有煙炭ニ屬ス、以上舉クルトコロニ依リ本邦ニ於ケル石炭ノ消費高ヲ推測スルニ大要左ノ如クナルヘシ

明治七年	九九九、九五	同十二年	六九二、七七九
同八年	四五二、二二二	同十三年	六二二、八一三
同九年	三八四、三一八	同十四年	六六六、三三七
同十年	三五九、五六〇	同十五年	六二八、八〇八
同十一年	五一五、八六三	同十六年	六三九、八〇九

同十七年	六二五四三七	同三十一年	四、五九七、二四九
同十八年	七二五八六七	同三十二年	四、三〇三、〇三九
同十九年	七三三八二〇	同三十三年	四、三九〇、〇四一
同二十年	一、〇五七、七七七	同三十四年	六、一九四、九〇七
同二十一年	一、〇五一、〇九七	同三十五年	六、八九九、〇三九
同二十二年	一、三二九、八七二	同三十六年	六、八三九、九六五
同二十三年	一、四〇五、八三六	同三十七年	八、五三七、四二〇
同二十四年	一、九三九、五八九	同三十八年	九、四一四、六七四
同二十五年	一、八九二、九四五	同三十九年	一〇、六七四、七〇五
同二十六年	一、八二三、三三一	同四十年	一一、〇〇九、九三〇
同二十七年	二、六一三、六〇三	同四十一年	一二、一三三、二八五
同二十八年	三、〇〇一、〇三八	同四十二年	一二、五二九、四五八
同二十九年	二、八六八、一三九	同四十三年	一三、三三四、五一二
同三十年	三、一六九、六四七	同四十四年	一四、九九九、一三一

本表ニヨリ明治十五年ヨリ同四十四年ニ至ル毎十年ノ輸出額及毎十年間ノ總輸出額并ニ其増加率ヲ見ルニ次ノ如シ

年別	輸出額	増加率
明治十五年	三、二九九 <small>千噸</small>	三・八強
同二十四年	一、二六一・〇	二・四弱
同三十四年	三、〇〇九・八	一・〇弱
同四十四年	三、一五〇	

年別	各十年間ニ於ケル總輸出額	増加率
自明治十四年至同二十五年	七、八〇二・〇 <small>千噸</small>	二・八
自同二十四年至同三十五年	二一、八九五・〇	一・三強
自同三十四年至同四十五年	二九、四三四・〇	

年別	産出増加率	輸出増加率
明治十五年	三・四	三・八強
同二十四年	二・八強	二・四弱
同三十四年	二・〇弱	一・〇強
同四十四年		

年別	各十年間ニ於ケル産出増加率	各十年間ニ於ケル輸出増加率
自明治十四年至同二十五年	三・二弱	二・八
自同二十四年至同三十五年	二・四	一・三強
自同三十四年至同四十五年		

輸出額ト産出額トノ増加率ヲ見ルニ次ノ如シ

即チ輸出増加率ハ比較的減退ス、換言スレハ産出増加率ハ小ナレトモ輸出増加率ハ輸入額ノ増加ニ對シ減退ス、是レ本邦ニ於ケル石炭消費額ノ増加ヲ示スモノナリ、故ニ本邦ニ於ケル石炭ノ用途ト消費量トヲ調査シ輸出地ニ於ケル狀況并ニ炭價ノ如何トヲ攻究シテ石炭鑛業ニ遺憾ナキヲ期セサルヘカラス

三 石炭ノ分布(第一版參照)

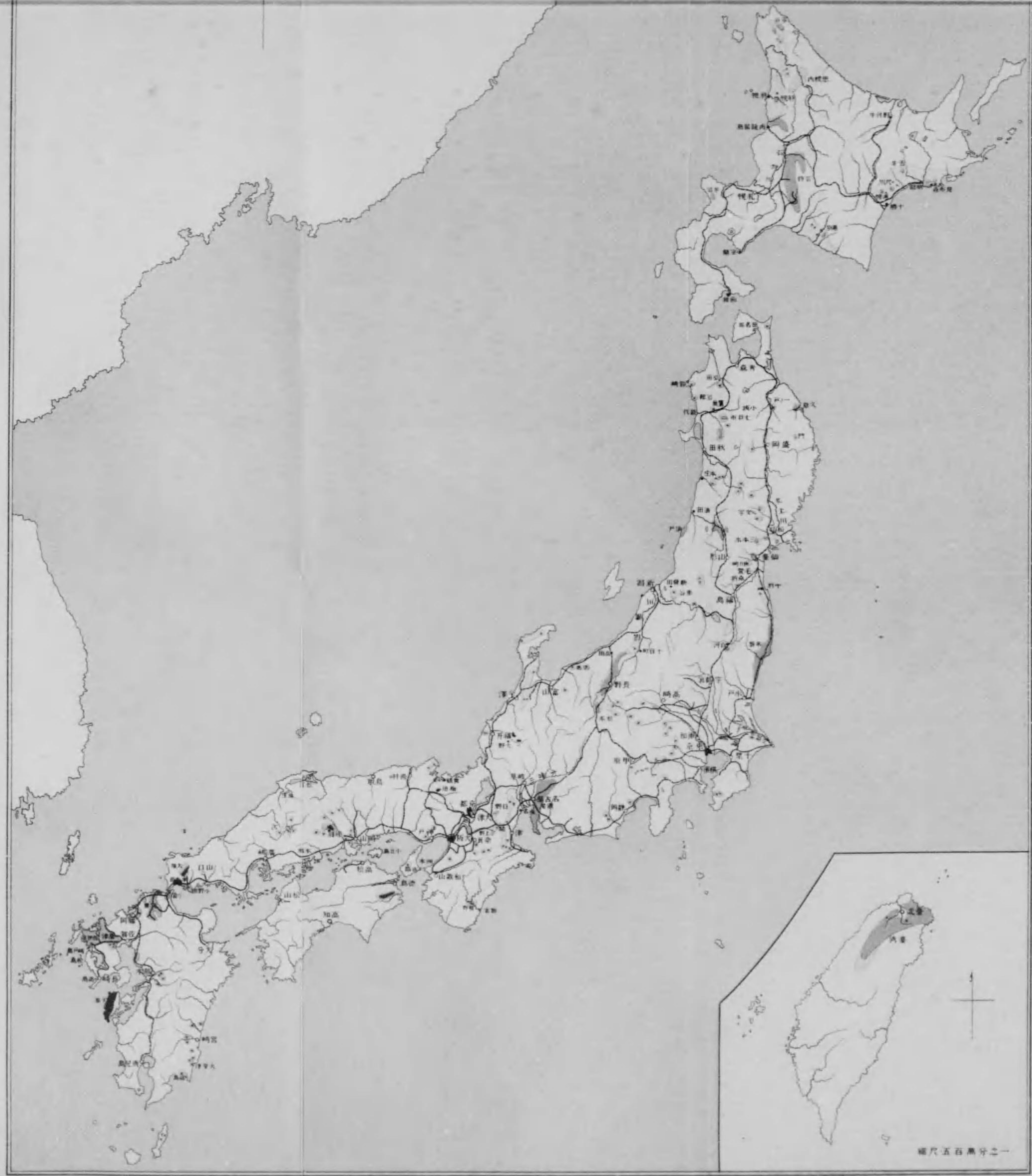
地理上ノ分布 石炭ハ本邦ノ北端樺太ヨリ南ハ臺灣ニ至ルマテ各所ニ産出ス、石炭鑛業ノ中心ナル北部九州ハ廣大ニシテ最モ豊富ナル炭田ヲ包括ス、即チ筑豊、三池、唐津、高島等ニシテ海岸ニ近ク甚々便利ノ位置ニアリ、若クハ海岸ヨリ甚々遠カラスシテ鐵道ニ依リ連絡シ工業ノ發達ヲ促進セリ、中部北海道亦廣大ナル炭田ヲ有シ現時交通機關即チ鐵道ノ敷設并ニ築港ニ依リ漸次發達セントス、其他ノ重要ナル大炭田ハ北海道ノ西海岸ニ近ク賦存シ其他未調査炭田數多アリ、實ニ北部九州ノ炭田ハ數十年間大資本家并ニ有名ナル鑛山技師ニ依リ稼行セラ

レタルモ北海道ノ炭坑ハ久シク之ヲ顧ミルモノナク唯僅ニ一大會社ノ稼行ニ委シ其他ハ小鑛業家ノ經營セルモノニシテ投下セシ資本ニ於テモ之ヲ九州ニ比ス可ラス、是レ蓋シ交通機關ノ不完全ナルト市場ト相距ル遠キヲ以テナリ、加之此等炭田區域ニハ未タ開墾セラレスシテ住民ナキ森林地多ク地質調査未タ施行セラレサルナリ、近時漸ク經驗アル鑛山技師并ニ資本家之ニ注意スルニ至レリ、其炭田ノ面積、炭層ノ厚サ、炭質等ニ依リ北海道ノ石炭鑛業ハ將來最モ有望ニシテ或ハ九州ニ於ケル石炭ト競争ノ位置ニ立ツニ至ルヤ未タ知ル可ラサルナリ、本州ハ炭田ノ面積ニ於テ最モ大ニシテ石炭ハ東北部ノ北端ヨリ中國ノ西端ニ至ルマテ各所ニ散在スルモ炭質并ニ炭量ニ於テハ遙ニ九州及北海道ニ劣レリ、太平洋沿岸ノ常磐炭田ハ本州中最大ナルモノニシテ中國ノ西端ニアル小野田炭田之ニ亞ク、此兩炭田ハ市場ニ近キト海陸ノ運輸便ナルトニヨリ往昔ヨリ稼行セラレタリ

四國ニハ有名ナル炭山ナク唯品位劣等ナル薄層ノ石炭處々ニ散在ス

ルノミニシテ現時稼行セラル、モノナシ
樺太ハ其中部ニ廣大ナル炭田ヲ有スルモ北海道ニ於ケルト同シク不
利ノ地ニアリ、加フルニ氣候亦甚タ不利ナリ、隨テ稼行ニ甚タ困難ナル
モノアラン、二年間樺太廳ハ西海岸ニ於テ石炭ヲ試掘シタリ
臺灣ニハ北部ニ一炭田アリ、其埋藏スル炭層ハ厚サ比較的薄ク炭質亦
劣等ナルモ運搬便ナルト其附近ニ石炭ナキヲ以テ往昔ヨリ小規模ニ
稼行セラレタリ

石炭ノ分布ハ第一版ニ示スカ如シ
地質上ノ分布 石炭ハ本邦ニ廣ク分布シ寧ロ新期ノ地層中ニ埋藏セ
ラル、最古期ニ屬スル石炭ハ中生層ニアリテ重要ナラス、備中ノ三疊紀
層、長門ノレイチツク層ハ石炭ヲ埋藏シ其長門ニ産スルモノハ海岸ニ
近キヲ以テ往昔ヨリ小規模ニ稼行セラル、中生層殊ニ中部本州、中國即
チ越前、丹波、丹後、長門ノ珠羅紀ト思惟スヘキ地層中ニアル石炭ハ處々
ニ小規模ニ稼行セラル、長門大嶺炭田ハ其最モ大ナルモノニシテ産出



ルノミニシテ現時稼行セラル、モノナシ
 樺太ハ其中部ニ廣大ナル炭田ヲ有スルモ北海道ニ於ケルト同シク不
 利ノ地ニアリ、加フルニ氣候亦其タ不利ナリ、隨テ稼行ニ甚タ困難ナル
 モノアラシ、二年間樺太廳ハ西海岸ニ於テ石炭ヲ試掘シタリ
 臺灣ニハ北部ニ一炭田アリ、其埋藏スル炭層ハ厚サ比較的薄ク炭質亦
 劣等ナルモ運搬便ナルト其附近ニ石炭ナキヲ以テ往昔ヨリ小規模ニ
 稼行セラレタリ

石炭ノ分布ハ第一版ニ示スカ如シ
 地質上ノ分布 石炭ハ本邦ニ廣ク分布シ寧ロ新期ノ地層中ニ埋藏セ
 ラル、最古期ニ屬スル石炭ハ中生層ニアリテ重要ナラス、備中ノ三疊紀
 層、長門ノレーチツク層ハ石炭ヲ埋藏シ其長門ニ産スルモノハ海岸ニ
 近キヲ以テ往昔ヨリ小規模ニ稼行セラル、中生層殊ニ中部本州、中國即
 チ越前、丹波、丹後、長門ノ珠羅紀ト思惟スヘキ地層中ニアル石炭ハ處々
 ニ小規模ニ稼行セラル、長門大嶺炭田ハ其最モ大ナルモノニシテ産出

額亦稍大ナルモ僅ニ七萬二千三百五十四噸ニ滿タス、中部四國ニ於ケル白堊紀層ノ石炭ハ品位劣等ニシテ重要ナラス、肥後、天草、炭田ノ地質年代ハ調査未タ完カラスシテ或ハ第三紀ニ屬スヘシト云ヒ或ハ白堊紀ニ屬スヘシト稱セラル、モ茲ニハ在來ノ鑑定ニヨリ白堊紀層トナセリ、本炭田ハ沿岸便利ノ地ニアリテ產出額大嶺、炭田ニ亞ク、紀伊、熊野、炭田ハ永ク白堊紀層ニ屬スト思惟セラレタルモ廣瀬、大築、兩氏ノ化石ノ調査ニ依リ其第三紀層ナルヲ知レリ、概言スレハ中生代ノ炭田ハ中部、本州、中國、四國及九州ニ於テ古岩層上ニ小區域ニ散在シ一ニヲ除ケハ其分布ノ區域狭小ナリ

含炭中生層ハ頁岩、砂岩ヨリ成リ、變岩ヲ挾メリ、地層ニハ褶曲斷層甚タ多ク激甚ナル變動ヲ受ケタルヲ示セリ、本層ハ亦處々ニ火成岩ノ爲ニ貫通セラレ其附近ノ岩石并ニ炭層ハ接觸變質作用ヲ受ケ變質セルコト多シトス

第三紀層ハ最モ豐富ニシテ最モ重要ナル炭層ヲ埋藏ス、而シテ其下部

層ニアルモノハ上部層ニ於ケルモノヨリ甚シク重要ナリトス
 下部層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ成リ時ニ凝灰石ヲ挾ミ多量ノ石炭ヲ埋
 藏ス、本層ハ變動ヲ受ケ褶曲及斷層甚タ多キモ中生層ニ於ケルカ如ク
 甚シカラス、處ニヨリ火山岩ノ噴出亦甚タ多ク石炭ハ爲ニ變質作用ヲ
 受ク、前述ノ如ク九州及北海道ノ炭田ハ最モ廣大ニシテ且ツ價値アル
 モノナリ、常磐炭田之ニ亞キ臺灣炭田及長門小野田炭田第三位ニアリ、
 樺太ノ炭田ハ廣大ナリト稱セラル、モ未タ全ク開發セラル、ニ至ラ
 ス

以上各所ニ於ケル含炭層相互ノ關係ハ未タ充分明ナラサレトモ中新
 期ニ屬スルモノナルヘシト云フ、近時横山博士ハ三池炭田ニ産スル化
 石ニ依リ同炭田ハ始新时期ニ屬スルモノナルコトヲ證セリ、北海道及樺
 太ニ於ケル最下部ノ炭層ハ甚シク白堊紀層ニ接近シ兩者ノ間ニハ蠻
 岩層アリテ不整合ヲ見ス、是等ノ事實ヨリ推測スルニ本層ハ第三紀ノ
 最下部若クハ白堊紀ノ最上部ニアラサルナキヤノ疑アリ、本州、九州及

四國ニ於テハ含炭第三紀層ハ直ニ古期岩層ヲ不整合ニ被覆シ北海道
 ニ於ケルカ如キ關係ヲ見ルコト能ハスシテ層位上ノ關係ヲ知ルコト
 能ハス、含炭第三紀下部層ハ植物并ニ動物化石ヲ埋藏スルモ未タ以テ
 其地質年代ヲ確定スルニ足ラス、實ニ今日ニ於テ各炭田ニ於ケル各炭
 層ノ層位ヲ比較スルコト能ハス、將來精密ナル地質調査施行セラレ本
 層ノ層位確定セラル、ニ至ルニアラサルヨリハ本層ハ在來ノ所說ニ
 從ヒ寧ロ中新期ニ屬スト思惟スルノ至當ナルヲ想フ
 上部層ハ柔軟ナル砂岩及頁岩ヨリ成リ蠻岩及凝灰岩ヲ挾ミ、若クハ粘
 土、砂礫層ヨリ成リ火山灰ヲ挾メリ、本層ハ變動ヲ受クルコト少ナク隨
 テ緩慢ナル波狀ヲナシ斷層亦小ナリ、重要ナル炭田ハ本州東北部及中
 部ニアリテ羽前最上川ノ沿岸炭田、陸前仙臺附近ノ炭田、尾張美濃ニ於
 ケル濃美炭田等ヲ著シトスルモ之ヲ下部層ニ於ケルモノト比スヘカ
 ラス、其地質年代ハ未タ明ナラサレトモ層位上并ニ岩石上ノ關係及化
 石ニ依リ之ヲ見ルニ本層ハ蓋シ最新期ニ屬スルモノ、如シ

主要ナラサル炭田ニシテ第三紀上下部層ノ何レニ屬スルヤ明ナラサルモノアリ、是等第三紀層ノ多クハ其附近ノ岩層トノ關係明ナラス、又ハ其層位ヲ確定スヘキ化石ヲ埋藏セサルカ如シ
 斯ノ如ク本邦ノ重要ナル石炭ハ中新紀ニ屬シ本邦ノ石炭鑛業ハ即チ之ニ據レリ、中生代并ニ最新期ノ石炭ハ品質并ニ炭量ニ於テ遙ニ前者ニ劣リ小規模ニ各所ニ稼行セラル、ノミ

四 石炭ノ品質

石炭ノ種類 ハ無煙炭、半無煙炭、半瀝青炭、瀝青炭(高度及低度)黒褐炭及褐炭ニ分ツ、其分類法ハ清水技師ノ報告ニ詳ナリ、半無煙炭ハ主ニ中生層ニアリテ甚タ稀ニ第三紀層ニ於テ之ヲ見ル、煽石及無煙炭ハ接觸變質ノ結果石炭ノ一部ノ變化ナリトス、中新紀ニ屬スル石炭ハ主ニ瀝青炭ニシテ最新統ニ埋藏セラル、モノハ全ク褐炭ニ屬ス
 石炭ノ用途 無煙炭及半無煙炭ハ普通石灰、セメント製造用燃料又ハ煉炭原料ニ供セラレ若クハ家事用等ニ使用セラル、瀝青炭ハ蒸氣發生

用燃料并ニ瓦斯及骸炭原料ニ使用セラレ普通日本炭ト稱セラル、モノ即チ是レナリ、褐炭ハ蒸氣發生用ニ使用セラレ其劣等ナルモノハ主ニ製絲、製鹽等ノ小工場ニ燃料トシテ其地方ニ使用セラレ又ハ薪炭ニ代用セラル、是等各種ノ用途ニ應スル消費高ハ次ノ如シ

年 別	船 舶 用	鐵 道 用	工 場 用	製 鹽 用
明治十九年	二三七、一三〇	一五三、〇五	一四六、五六九	四五五、七九四
同二十年	二五一、九八二	一九七、六七七	一六三、八〇四	三九四、九三八
同二十一年	三八八、九九八	二六、九一七	二八六、〇〇二	三八三、七七八
同二十二年	三九二、九四三	四四、〇二三	三六七、四五〇	三五八、八七一
同二十三年	四六〇、六四一	六八、八二五	四二四、〇九〇	四七六、六九五
同二十四年	四四三、九三四	九八、五九四	五二一、二四八	四五四、八五三
同二十五年	四三一、五八七	一一八、二八六	七二二、六五〇	四三九、三一七
同二十六年	四三八、〇一七	一二六、〇六三	七二八、九五六	四五七、八六四

同二十七年	五三三、六〇三	一六七、八八六	一、一〇一、三九七	五三七、四一八
同二十八年	七四六、六七六	二二二、九九一	一、一九八、〇七二	五二一、五五四
同二十九年	六九二、五八四	二六〇、〇二一	一、五六五、四二九	五五一、〇一二
同三十年	八九三、一三六	八五〇、一六七	一、八四六、八九一	五〇〇、五〇四
同三十一年	七九一、一五八	三九〇、五六六	二、五四八、〇六七	六六三、一二二
同三十二年	一、二四四、七九一	四九九、九四四	二、六一五、四二六	六七四、六八〇
同三十三年	一、四六三、八一二	五〇六、九五九	二、六五二、八〇〇	六三八、六〇一
同三十四年	一、三九六、七四五	六二五、六九四	三、八四四、四三四	八一七、七二一
同三十五年	一、五三四、二七二	七〇四、〇五五	三、四七四、四六一	七八八、九九八
同三十六年	一、七四四、三四二	七三二、九九二	三、六七四、五六七	八二二、二四四
同三十七年	二、二二八、一一七	七五八、七五五	三、七〇五、二八〇	七三三、二八七
同三十八年	一、九九七、〇六九	八四一、五九一	三、七七六、三七八	四九八、八六二
同三十九年	一、八〇四、七八七	一、〇四一、八三五	三、七七四、一〇〇	六五九、九二七
同四十年	二、三三三、〇四五	一、〇四三、八七四	四、四二〇、五四五	七七四、一九八

同四十一年	二、三三三、五一〇	一、二四七、一六〇	四、三一五、〇六一	八二二、一六四
同四十二年	二、四〇八、四一二	一、二三七、九〇一	四、三一九、〇七五	九〇五、五七九
同四十三年	二、〇六九、六一四	一、三三四、五七九	四、七七五、八〇六	七四二、四一五

石炭ノ品質ト其分布トノ關係 ハ本邦ニ於テハ最モ趣味アル問題ニシテ火山岩ノ噴出ノ爲メ其甚シク變質セルコトハ明ニ之ヲ目撃スルコトヲ得ヘク而シテ地質年代ノ相違ニ依リ其炭質ニ差異アルコト亦之ヲ知ルヲ得ヘシ、而シテ同一ノ地層ト思惟スヘキ地層ニアリテモ炭質ニ稍大ナル相違アリ、其原因ヲ攻究スルコトハ最モ緊要ナルモ未タ悉ク之ヲ明ニスルコトヲ得ス、蓋シ地層ノ變動ト成層後噴出セル火山岩ノ爲ニ炭質良好トナルモノアリ、是等ノ事項ニ關シテハ更ニ攻究スルトコロアルヘシ

五 炭 量

炭量調査ノ意義 地下ニ埋藏スル礦物ハ正確ニ其量ヲ計算スルコト不可能ノ事項ニ屬スト雖モ其概數ヲ知ルニアラサレハ或ハ一國ノ礦

業政策ヲ確立シ若クハ事業經營ノ方針ヲ定ムルコト能ハサルナリ、茲ニ於テ鑛量調査ノ必要アリ、即チ鑛量ノ調査ハ二様ニ之ヲ解釋スルヲ得ヘシ、(一)一國ニ於ケル各種鑛物ノ量ヲ概算スルコト、(二)一區域ニ於ケル各種鑛物ノ量ヲ概算スルコト是ナリ、而シテ鑛物中稍正確ニ其埋藏量ヲ計算スルコトヲ得ルモノハ鐵鑛及石炭トス

一國ニ於ケル炭量ノ概數ヲ計算スルコトハ其國ニ存在スル石炭ノ多寡ヲ查察シテ將來ニ於ケル石炭鑛業ノ如何ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ其炭量ハ固ヨリ正確ナルヲ期スヘント雖モ而モ二三割ノ差異ハ將來ノ政策ヲ定ムル所以ニ於テ大ナル影響ヲ及ホスコトナカルヘシ、一區域ノ炭量ヲ計算スルハ其區域ニ存在セル石炭ノ多寡ヲ查察シテ探掘ノ適否ヲ判定シ探掘ノ基礎ヲ定ムルモノナルヲ以テ二三割ノ差ト雖モ之ヲ忽ニスヘカラサルノミナラス、實ニ其差異ニ依リ石炭ヲ探掘シテ收益アルモノナルヤ否ヤヲ決スルコトアリ、蓋シ一國ノ炭量ヨリ之ヲ見レハ甚タ小額ナリト雖モ之ヲ忽ニスヘカラサルナリ

本篇記載セル炭量ハ第十二回萬國地質學會議ノ發議ニ基ツキ其指定セル方法ニ準シ算出シタルモノニシテ唯概數ヲ知ルニ止メ二三割ノ差異ノ如キハ固ヨリ之ナキヲ保スル能ハサルナリ、想フニ本邦ニ於ケル石炭鑛業ノ状態ヲ察スルニ筑豊炭田ノ如キハ既ニ開發ノ極ニ達シ其炭量ノ如キハ各炭坑ニ依リテ詳細ニ之ヲ計算シ之ニ依テ其事業ヲ經營スルヲ以テ特ニ炭量ヲ計算スルノ必要ヲ認メサルナリ、其最モ急務トスルトコロハ精細ナル地質調査ヲ施行スルニアリ、即チ斷層ノ有無及其落差、各炭層相互ノ關係等ヲ明ニスルニ於テハ事業經營上多大ノ效果アルハ疑ヲ容レサルノミナラス其結果ハ自ラ正確ナル炭量ヲ算出スルニ至ルヘシ、之ニ反シ北海道炭田ノ如キハ今ヤ漸ク開發ノ端緒ニアリ、隨テ炭量ヲ計算シテ事業經營ノ方針ヲ定メサルヘカラス、肥前ノ各炭田、常磐炭田ノ如キ地下深所ニ於ケル炭層賦存ノ状態ヲ究ムルヲ以テ急務ナリトシ、其如何ハ直接ニ鑛業ノ盛衰ニ關係スルモノナリ、筑豊炭田ノ石炭ハ或ハ二十年ニシテ探掘シ盡サルヘシト云ヒ或ハ

三十年ニシテ盡クルト稱スト雖モ現ニ採掘セラレサル炭層ハ其數甚
タ多ク而モ之ヲ他ノ炭田ニ於ケル石炭ニ比シ敢テ劣等ナルニアラサ
ルヲ以テ近キ將來ニ於テ或ハ開發セラレ、ノ時アルヘク是等ノ石炭
ヲ計算スルニ於テハ炭量蓋シ莫大ナルヘシ、而シテ之ヲ採掘スルハ本
石炭ヲ利用スルノ途ヲ講スルヲ以テ最モ急務ナリトス、現ニ此等ノ石
炭ノ一部ハ石炭採掘ノ際採掘セラレテ既ニ坑外ニ山積セルトコロア
リテ其處置ニ困難ヲ感スルコトアルニ至レリ、採掘法ノ如キモ甚々進
歩セリト雖モ尙之ヲ改良スルノ方法ヲ講スルコト急務ナルヘク採掘
率ノ一般ニ百分ノ七十二ニ過キサカ如キハ大ニ注意スヘキ事項タル
ヘシ

炭田ノ調査ハ未タ甚々不完全ナルヲ以テ炭量計算ノ基礎甚々薄弱ナ
リ、故ニ本篇ヲ草スルニ當リ各炭田ニ於ケル炭層賦存ノ状態ヲ記述ス
ルヲ以テ主眼トシ炭量計算ノ如キハ敢テ之ニ重キヲ置カスシテ其大
要ヲ知ルニ止メ各炭田ニ依リ各其正確ノ度ヲ推測スルニ便ナラシメ

ンコトヲ力メタリ、而シテ第一種炭量ノ如キハ本邦ニ於テハ之ヲ計算
スルコト殆ント不可能ナル場合多シト雖モ而モ其計算ハ過少ニ失シ
炭量ノ是ヨリ小ナルコトナカルヘシ、第二種炭量ハ其計算ノ或ハ過大
ニ失スルモノナキヲ保セサレトモ相殺セハ本邦ノ炭量ハ或ハ之ヨリ
小ナルコトナカルヘシ

炭量計算ノ方法 炭量ノ計算ハ管テ鐵鑛ヲ計算セルトキト同様ノ方
法ヲ用キタリ

第一種炭量ハ實測ニ基ツケル炭量ニシテ最モ正確ナルモノナレトモ
本邦ニ於テ之ニ算入スヘキモノ甚々少ナシ、蓋シ本邦ニ於テハ一二ノ
場合ヲ除ケハ地下深所ニ於ケル石炭賦存ノ状態ハ試錐又ハ其他ノ方
法ニ依リ之ヲ證明シタルモノ少ナク隨テ正確ニ石炭ノ埋藏量ヲ示ス
コト能ハス、而シテ試錐シタルコトナク若クハ二三ノ試錐ヲ施行シタ
ル場合ト雖モ炭層ノ露頭ノ厚サ二尺五寸アリテ稍遠距離ニ之ヲ追跡
スルコトヲ得ルトキハ其地質構造ノ如何ニ依リ地下三百尺乃至五百

尺ニ至ル迄ノ炭層ヲ計算シテ之ヲ第一種炭量ニ加ヘタリ、而シテ第一種炭量ハ安全ヲ計リ之ヲ過小ニ計算シタリ

第二種炭量ハ未タ全ク實測セラレサル炭層ニシテ地形及地質ノ關係并ニ其連續セル炭層ヨリ其分布ヲ測定シテ計算セルモノナリ、本邦ニ於テハ炭田ノ精査未タ施行セラレサル所多キヲ以テ炭量ノ計算ハ多ク概測ニ基ツケリ、即チ其材料甚タ不完全ニシテ地質上ノ關係并ニ連續セル炭層ノ關係ヨリ其分布ヲ推測シ計算シタリ、深サハ地下四千尺ヲ限レルモ地質上ノ見地ヨリ遙ニ此制限ニ達セスシテ千尺若クハ二千尺ノ地下マテ計算シタルモノ少ナカラス

石炭ノ價值 石炭ハ其賦存ノ狀態多寡等ニ關シ若クハ運搬等ノ關係上現今直ニ採掘シ得ヘキモノト否ラサルモノトアリ、即チ第一ハ現今ノ狀態ニ於テ經濟上稼行シ得ヘキ厚サト稼行シ得ヘキ深サニ賦存スルモノ、第二ハ現時ノ狀態ニ於テ稼行シ得ヘキ厚サヲ有スレトモ地下深キニアリテ現今採掘シ能ハサルモノナリ、此外種々經濟上ノ事情アリ

リ、而シテ第十二回萬國地質學會議ノ規定ニ據レハ第一ニ屬スルモノハ厚サ一尺以上ニシテ地下四千尺以上ニアル炭層ヲ云ヒ海底下ニ於ケルモノヲモ包括ス、第二ニ屬スルモノハ厚サ二尺以上ニシテ地下四千尺ヨリ六千尺ノ間ニアル炭層ヲ包括ス、然レトモ本邦ニ於テ之ヲ見ルニ地下四千尺迄ノ炭層アリテ經濟上採掘シ得ヘキ炭層ハ甚タ少ナク殊ニ一二尺ノ炭層ニシテ四千尺ノ深サニ稼行シ得ヘキモノナシ、蓋シ現今ノ狀態ニ於テ筑豊炭田、三池炭田等ヲ除ケハ地下二千尺以上ノ深處ニアル炭層ニシテ採掘シテ果シテ經濟上有利ナル炭田アリヤ否ヤ、現ニ常磐炭田ノ如キハ現今ノ狀態ニ於テハ果シテ深サ千尺以上ニ採掘シ得ヘキヤ否ヤ疑ナキ能ハサルナリ、此ノ如キ狀態ニアルヲ以テ第二ニ屬スル炭量ノ如キハ之ヲ計算セサルナリ

石炭ノ埋藏量 上記記載セル方法ニ基ツキ計算シタル炭量ハ次ノ如シ

第一種炭量

炭	田	厚	面積	種類	數量
中生層		二尺 一三	平方 一四		三三〇〇〇〇〇〇
大嶺		三—一二	〇、四	半無煙炭	一、〇〇〇〇〇〇〇
天草		四—六	一、〇	半無煙炭	二、三〇〇〇〇〇〇
第三紀層		一—七〇	一六二、二		九四四、八〇〇〇〇〇
一、樺太		三—七〇	三、〇		一八、〇〇〇〇〇〇〇
中部		三—二七	三、〇	低度瀝青炭	一八、〇〇〇〇〇〇〇
「トリマオロ」		三—六	一、五		三、五〇〇〇〇〇〇〇
内淵		二二—二七	一、五		一四、五〇〇〇〇〇〇〇
二、北海道		二—七〇	三三、四		三二九、三〇〇〇〇〇〇〇
石狩		六—七〇	二五、二	低度瀝青炭	三〇一、六〇〇〇〇〇〇〇
蘆別		三〇—一五	五、〇		八六、五〇〇〇〇〇〇〇
		一〇〇—一五	〇、五		二一、〇〇〇〇〇〇〇〇〇
		三〇—六五	四五		六五、五〇〇〇〇〇〇〇〇

歌志内		三七—七〇	一、三		五四〇〇〇〇〇〇〇〇〇
		一七〇	〇、四		二八、〇〇〇〇〇〇〇〇〇
		一〇〇—一〇五	〇、六		二二、〇〇〇〇〇〇〇〇〇
		三七—四七	〇、三		四、〇〇〇〇〇〇〇〇〇
奈井江、美唄		一〇—一五	一、二		二四、三〇〇〇〇〇〇〇〇
		一一〇—一二五	〇、四		一八、五〇〇〇〇〇〇〇〇
		二〇—二五	〇、五		四五〇〇〇〇〇〇〇〇〇
		一〇—一二	〇、三		一三、〇〇〇〇〇〇〇〇〇
幾春別		一〇—三五	三、九		二〇、一〇〇〇〇〇〇〇〇〇
		三〇—三五	〇、三		三、八〇〇〇〇〇〇〇〇〇
		一〇—一三	三、六		一六、三〇〇〇〇〇〇〇〇
幌内		九—二四	五、三		三〇、二〇〇〇〇〇〇〇〇〇
		一八—二四	二、三		一八、二〇〇〇〇〇〇〇〇〇
		九—一三	三、〇		一二、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

夕張	一六—三五	八、五		八六、五〇〇〇〇〇
一	二八—三五	五、五		六六、〇〇〇〇〇〇
二	一六—一八	三、〇		二〇、五〇〇〇〇〇
茅沼	二〇—二二	〇、八	低度瀝青炭	七、〇〇〇〇〇〇
雨龍、留萌	五—五八	一九	同	一三、二〇〇〇〇〇
「ボロニタチ ペツ」上流	三〇—五八	〇、四		七、〇〇〇〇〇〇
一	五〇—五八	〇、二		四、二〇〇〇〇〇
二	三〇—三六	〇、二		二、八〇〇〇〇〇
「ボロニタチ ペツ」下流	七—二五	〇、五		二、五〇〇〇〇〇
一	七—一〇	〇、四		一、五〇〇〇〇〇
二	二〇—二五	〇、一		一、〇〇〇〇〇〇
「ルルモツペ」 「オピラシ」 「ベツ」	一五—一七	〇、二		一、三〇〇〇〇〇
四—一五	〇、三			一、四〇〇〇〇〇
大和田	五	〇、五		一、〇〇〇〇〇〇

釧路	二—一五	五、五	低度瀝青炭	七五、〇〇〇〇〇
別方、大阪	二—三	三、三		三、〇〇〇〇〇〇
春鳥	五	二、二		四、五〇〇〇〇〇
三、本州	一、五—一四	三、一六		六八、〇〇〇〇〇〇
常磐	二—一四	一、四、〇	黒褐炭	四三、〇〇〇〇〇〇
北部	二—二、五	一、〇		一、〇〇〇〇〇〇
中部	一〇—一四	七、〇		三三、五〇〇〇〇〇
南部	三—五	六、〇		八、五〇〇〇〇〇
油戸	四—六	〇、五	低度瀝青炭	一、〇〇〇〇〇〇
濃尾	二、五—四	一、〇	褐炭	一三、〇〇〇〇〇〇
熊野	二—三	一、〇	無煙炭	一、〇〇〇〇〇〇
小野田	三—二	四、一	黒褐炭	九、〇〇〇〇〇〇
船木	三—五	一、四		二、三〇〇〇〇〇
小野田	三—五	〇、五		九、〇〇〇〇〇〇

字部	一	二	三	松江	四、九州	筑豊	(一) 小倉	(二) 遠賀川	遠賀	川鞍手、田	一	二	三
	四—一二	四—一五	七—一九	一〇—一二	三—五〇	四—三三	四—一六	四—三三	一〇—一八	四—二五	五—一三	一六—二五	一一—二〇
	二二	一四	〇三	〇五	九四二	七一、二	〇七	六六、〇	六、五	三三、七	一〇、〇	七、五	一一、〇
				黒		低度瀝青炭							
	五八〇〇〇〇〇〇	二七〇〇〇〇〇〇	九〇〇〇〇〇〇	二二〇〇〇〇〇〇	一〇〇〇〇〇〇〇	五二九五〇〇〇〇	四〇五五〇〇〇〇	一、五〇〇〇〇〇〇	三、八七五〇〇〇〇〇	三、三〇〇〇〇〇〇〇	一、四一〇〇〇〇〇〇〇	二、五〇〇〇〇〇〇〇	四、六〇〇〇〇〇〇〇

三池	(四) 福岡	(三) 宗像	五	四	三	二	一	嘉穂	三	二	一	穂鞍手、嘉	四
一〇—一八	八—一〇	七—一八	一三—一五	一五—一八	一二—一九	一六—二六	二七—三二	一二—三二	二二—三三	一〇—一五	八—一〇	八—三三	四—一二
八、〇	四、〇	〇、五	一、五	一、三	一、八	二、八	二、〇	九、四	一〇、〇	五、四	二、〇	一七、四	四、二
低度瀝青炭													
四八〇〇〇〇〇〇〇	一五〇〇〇〇〇〇〇	一五〇〇〇〇〇〇〇	七五〇〇〇〇〇〇〇	八〇〇〇〇〇〇〇〇	九〇〇〇〇〇〇〇〇	二一〇〇〇〇〇〇〇	二四〇〇〇〇〇〇〇	六九五〇〇〇〇〇〇	一〇六〇〇〇〇〇〇〇	二九〇〇〇〇〇〇〇	九〇〇〇〇〇〇〇〇	一四四〇〇〇〇〇〇〇	一〇〇〇〇〇〇〇〇〇

能登呂	(四)	二五—四〇	三五、〇	三九四、〇〇〇、〇〇〇	大
一		一〇—一七〇	四二、五	四六五、〇〇〇、〇〇〇	
二		一〇—一五	三〇、〇	一六九、〇〇〇、〇〇〇	
三		三五—四〇	二、五	三五、〇〇〇、〇〇〇	
其他ノ炭田		六五—七〇	一〇、〇	二六一、〇〇〇、〇〇〇	大
二、北海道		二—一七〇	二六四、一	二、三五—一六〇〇、〇〇〇	多大
石狩		六一—七〇	一四三、七	一、七九六、九〇〇、〇〇〇	大
蘆別		三〇—一五	五〇、八	九六七、〇〇〇、〇〇〇	
一		一〇〇—一五	五、八	二五八、〇〇〇、〇〇〇	
二		三〇—六五	四五、〇	七〇九、〇〇〇、〇〇〇	
歌志内		三七—一七〇	三、二	一〇九五〇〇、〇〇〇	
一		一七〇	〇、四	二七、〇〇〇、〇〇〇	
二		一〇〇—一〇五	一、七	六四、〇〇〇、〇〇〇	

三	奈井江美唄	三七一—四七	一、一	一八、五〇〇、〇〇〇	
一		一〇—一五	九九	一五一、五〇〇、〇〇〇	
二		二〇—二五	一八	八二、五〇〇、〇〇〇	
三		一〇—一二	六、五	六二、〇〇〇、〇〇〇	
幾春別		一〇—三五	一六	七、〇〇〇、〇〇〇	
一		三〇—三五	六、八	四九二、〇〇〇、〇〇〇	
二		一〇—一三	二、三	二九、二〇〇、〇〇〇	
幌内		九—二四	四、五	二〇、〇〇〇、〇〇〇	
一		一八—二四	二八、〇	一五一七〇〇、〇〇〇	
二		九—一三	一一、〇	八六、七〇〇、〇〇〇	
夕張		一六—三五	一七、〇	六五、〇〇〇、〇〇〇	
一		二八—三五	三七、〇	三四六、〇〇〇、〇〇〇	
二		一六—一九	二〇、〇	二三一、〇〇〇、〇〇〇	
二		一七—一九	一七、〇	一一五、〇〇〇、〇〇〇	

穂別	六—八	八、〇	二二、〇〇〇、〇〇〇	
茅沼	二〇—二二	二、五	二五、〇〇〇、〇〇〇	中
雨龍留萌	五—五八	三六、〇	二五、〇〇〇、〇〇〇	大
「ホロニタチ ベツ」上流	三〇—五八	六、〇	一〇五、〇〇〇、〇〇〇	
「ホロニタチ ベツ」下流	五〇—五八	二、五	五五、〇〇〇、〇〇〇	
一	三〇—三六	三、五	五〇、〇〇〇、〇〇〇	
二	七—二五	九、五	四六、〇〇〇、〇〇〇	
一	七—一〇	七、五	二八、〇〇〇、〇〇〇	
二	二〇—二五	二、〇	一八、〇〇〇、〇〇〇	
「ルルモツベ」	一五—一七	八、〇	五〇、〇〇〇、〇〇〇	
「オピラシ ベツ」	四—一五	一〇、五	四五、〇〇〇、〇〇〇	
一	四—一六	四、二	一〇、〇〇〇、〇〇〇	
二	一三—一五	六、三	三五、〇〇〇、〇〇〇	
大和田	五	二、〇	四、〇〇〇、〇〇〇	

羽幌	五—六、五	一五、〇	三五、〇〇〇、〇〇〇	大
幌延	六—三六	二四、〇	一七五、〇〇〇、〇〇〇	大
一	三〇—三六	五、〇	七二、〇〇〇、〇〇〇	
二	一三—一八	一五、〇	九三、〇〇〇、〇〇〇	
三	六—七	四、〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	
宗谷	一一—二五	二〇、〇	一一二、〇〇〇、〇〇〇	大
釧路	二—五	一一、一	一四二、〇〇〇、〇〇〇	中
昆布森	三	〇、六	七〇〇、〇〇〇	
別方、大阪	二—三	六、五	五〇〇〇、〇〇〇	
春鳥	五	四、〇	八、五〇〇、〇〇〇	
舌辛	五	一、七	三五〇〇、〇〇〇	
尺別	六	二、〇	五〇〇〇、〇〇〇	
浦幌	一八	二、六	二〇、〇〇〇、〇〇〇	
日高	六—七	五、五	一五、〇〇〇、〇〇〇	

鈴鹿	高崎	西條	白河	最上川	大阿仁川	七日市	仙臺	三本木	文字	門	久慈	三	二
二—四	一、五	二—二五	二—二五	二、五—三	六—七	八—九	二—二五	二—四	二—二五	四	三—三、五	一〇—一二	七—九
三、〇	七、〇	四、〇	七、五	一七、〇	二、〇	二、五	五、〇	二、〇	三、〇	〇、三	二、五	一、四	九、〇
褐炭	褐炭	低度瀝青炭	黒炭	褐炭	半無煙炭 高度瀝青炭	無煙炭	同	同	褐炭	黒炭	褐炭		
四五〇〇〇〇〇	四五〇〇〇〇〇	三五〇〇〇〇〇	六〇〇〇〇〇〇	二〇〇〇〇〇〇〇	六〇〇〇〇〇〇	九五〇〇〇〇〇	四〇〇〇〇〇〇	二、五〇〇〇〇〇	三、〇〇〇〇〇〇	六〇〇〇〇〇〇	三、五〇〇〇〇〇	六、三〇〇〇〇〇	三、二〇〇〇〇〇〇
中	中	中	中	中	小	小	小	小	小	小	小		

一	宇部	小野田	船木	小野田	熊野	濃尾	油戸	南部	中部	北部	常磐	三、本州	其他ノ炭田
四—五	四—二	三—五	三—五	三—二	二—三	二、五—四	四—六	三—五	一〇—一四	二—二、五	二—一四	一、五—四	—
一、八	一、二	九、〇	一、三	三、四	五、〇	二、六	五、〇	五、二	四、〇	一、六	一〇、八	二、四	—
				黒炭	無煙炭	褐炭	低度瀝青炭				黒炭		
三、二〇〇〇〇〇〇	四、一五〇〇〇〇〇	一、三七〇〇〇〇〇	二、二八〇〇〇〇〇	七、八〇〇〇〇〇	五、〇〇〇〇〇〇	二、九五〇〇〇〇〇	一〇、〇〇〇〇〇〇	七、九〇〇〇〇〇〇	一、七六〇〇〇〇〇	一、五〇〇〇〇〇〇	二、七〇〇〇〇〇〇	四、六五〇〇〇〇〇	—
				中	中	中	中				大	大	大

一	六、一、一、二	二〇、〇		六、七、〇、〇、〇、〇	
二	三、一、四	三三、〇		四、五、〇、〇、〇、〇	
佐世保	一、五、一、三	一一〇、〇	低度瀝青炭	九〇、〇、〇、〇、〇	中
崎戸	一、五、一、六	六、五、〇	同	四〇、〇、〇、〇、〇	中
松島	一、二、一、四	五、〇	同	二、八、〇、〇、〇、〇	中
高島	一、五、一、五〇	一一〇、〇	同	一、四、六、〇、〇、〇、〇	中
高島	三、七、一、五〇	七、五		一、二、一、〇、〇、〇、〇	
香燒	一、五、一、二〇	三、五		二、五、〇、〇、〇、〇	
八重山	二、一、四	三、五		三、〇、〇、〇、〇、〇	小
其他ノ炭田	—	—		—	小
臺灣	一、一、四	三七〇、〇	低度瀝青炭	三、八、五、〇、〇、〇、〇	大
臺灣	一、一、四	三七〇、〇		三、八、五、〇、〇、〇、〇	大
一	一、一、一、五	一、三三、〇		六、八、〇、〇、〇、〇、〇	
二	二、一、四	二、三、七、〇		三、一、七、〇、〇、〇、〇、〇	

計	—	一、五、七、三、七	—	六、六、八、四、九、〇、〇、〇、〇	多大
---	---	-----------	---	-------------------	----

以上舉クル炭層ノ外二尺以上ノ炭層ノ露頭數多アレトモ其連續明ナラサルモノハ以上炭量ノ計算ニ編入セサルナリ、是レ蓋シ炭量ノ計算ニ安全ヲ計リ概算セルヲ以テナリ、而シテ各炭田ニ於テ各炭層ノ延長ハ炭田ヲ通シ同一ナラスシテ處ニヨリ厚サニ甚タ大ナル相違アルコトアリ、隨テ炭田ヲ通シテ炭層ノ總厚ヲ知ルコト能ハサルナリ、故ニ計算ノ基礎ヲ明ナラシメンニハ各炭層賦存ノ面積ト其平均厚サヲ擧ケサルヘカラス、然レトモ此ノ如キハ甚タ複雑ニシテ一見了解ニ困シムモノアルヘキヲ以テ茲ニハ各炭層ヲ計算シテ得タル數炭層ノ總炭量並ニ各炭層ノ賦存セル平均面積及厚サヲ記述スルニ止メタリ

六 結 章

本邦ニ於ケル石炭鑛業ハ全ク有煙炭ノ支配スル所ナリ、其最モ盛ナルハ北部九州ニシテ將來ニ於テモ亦最モ重要ナル地域ナルヘシ、本邦ニ

於ケル石炭ノ總產出額ハ一年千五百萬噸乃至二千萬噸ノ間ニアリテ支那、加奈太、印度ト伯仲ノ間ニアリ、近時東洋ニ於ケル工業并ニ交通ノ發達ハ石炭ノ需要ヲ促進シ其結果石炭鑛業ハ長足ノ進歩ヲナセリ、本邦ハ現ニ石炭ヲ輸出シ將來ニ於テモ之ヲ輸出スルナルヘシ、而シテ東洋市場ニ於ケル石炭競争ノ問題ハ將來最モ趣味アル事項ノ一タルヘシ

本邦ハ多量ノ石炭ヲ埋藏ス、上述ノ數字ハ本邦ニ於ケル炭量ノ全數ヲ示スモノニアラスシテ既知區域ノ炭量ニ過キサレモ本邦ニ於テ將來増進セル需要ヲ充タスニ足ルノミナラス東洋市場ニ之ヲ供給シテ餘アリ、然レトモ日本ヲ除キ太平洋沿岸諸國ノ石炭鑛業ハ將ニ長足ノ進歩ヲナシ東洋ノ市場ニ於テ激甚ナル競争ニ遭遇スヘシ、蓋シ石炭鑛業ノ繁榮ヲ決スヘキ重モナル事項ハ豐富ナル炭田ノ稼行面積、炭層ノ數及厚サ、燃料トシテノ石炭ノ適否、採掘ノ難易并ニ市場ノ遠近ニアルヤ明ナリ、實ニ支那ノ炭量ハ數世紀間世界ノ全消費額ヲ供給シ得ルカ如

ク日本ノ炭量ハ數百年間太平洋沿岸諸國ニ於ケル石炭ノ消費額ヲ充タスヲ得ヘシ、然レトモ前述ノ如ク鑛業ノ將來ニ關シテハ數多ノ重要ナル疑問ノ研究スヘキアリテ未タ樂觀ヲ許サ、ルナリ、實ニ太平洋沿岸諸國ニ於ケル石炭需給ノ問題ハ甚タ趣味アル事項ニシテ學術上并ニ經濟上最モ必要ナルモノタルヘシ

第二章 炭田概觀

A 中生代ニ於ケル石炭

大嶺炭田

大嶺炭田(第一圖參照)ハ本州ノ西端長門ノ南部ニアリテ山陽鐵道ノ一驛厚狹驛ノ北約二十基米ニ位シ支線ニヨリ連絡シ南北ノ延長約十二基米、東西約五基米ニ互レル區域ヲ包括ス、石炭ハ明治十年ニ採掘セラレタリト云ヒ明治三十七年鐵道ノ布設ト共ニ稍大規模ノ鑛業企圖セラレ從來主ニ石灰爐ノ燃料トシテ使用セラレタル本石炭ハ徳山ニ輸送シ煉炭ノ製造ニ供用セラレ、ニ至レリ、產出額ハ大ナラスシテ明治

四十二年ニハ十萬九百五十一噸、同四十三年ニハ十萬二百六十二噸、同四十四年ニハ七萬二千三百五十餘噸ヲ產出セリ、最大ナル大嶺炭坑ハ

二河流ノ分水嶺ヲナス、炭田中ニハ廣キ谷野ナク隨テ坑口ハ多ク山側

第一圖
大嶺炭田
縮尺五十萬分之一



海軍省ノ稼行ニ係リ
明治四十二年ニハ九
萬五千二百九十二噸、
同四十三年ニハ六萬
六千四百八十八噸、同
四十四年ニハ六萬三
千七百八十八噸ヲ產
出セリ
高サ約三四百米ノ山
脈ハ本炭田ヲ南北ニ
走り南方ヲ流下スル

ノ露頭若クハ露頭ニ近ク開掘セラレタリ、含炭層ハ頁岩、砂岩及礫岩ヨ
リ成リ中生層中珠羅紀ニ屬スルモノナルヘシ、下部ハ石灰岩ニシテ時
ニ鱗狀ヲ呈シ又ハ石蓮蟲ノ化石ヲ含有シ炭田ノ東部ニアリ、其地質年
代ハ未タ明ナラス、花崗岩ハ炭田ノ南部ニアリ、礫岩ハ岩脈又ハ岩床ヲ
ナシテ含炭層ヲ貫通シ石炭ハ其接觸ノ爲メ屢煖石ニ變化ス、分析ノ結
果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃種	類
三、二九	九、二八	六六、九四	二〇、四九	〇、五八	半無煙炭	

炭層四群アリ、内三群ハ山脈ノ東部ニ、一群ハ西部ニアリテ約南北ニ并
走ス、第一群ハ最下部ニアリテ炭田ノ南東部ニ露出シ其北端ハ礫岩ニ
依リ切斷セラレ南端ハ石灰岩ニ接シテ其跡ヲ失シ總延長一、二基米ナ
リ、層向ハ約南北ニシテ西方三十度乃至三十五度ニ傾斜ス、稼行スヘキ
炭層ニアリ、厚サ區々ナルモ稼行スヘキ部分ハ概シテ上層ハ二尺、下層

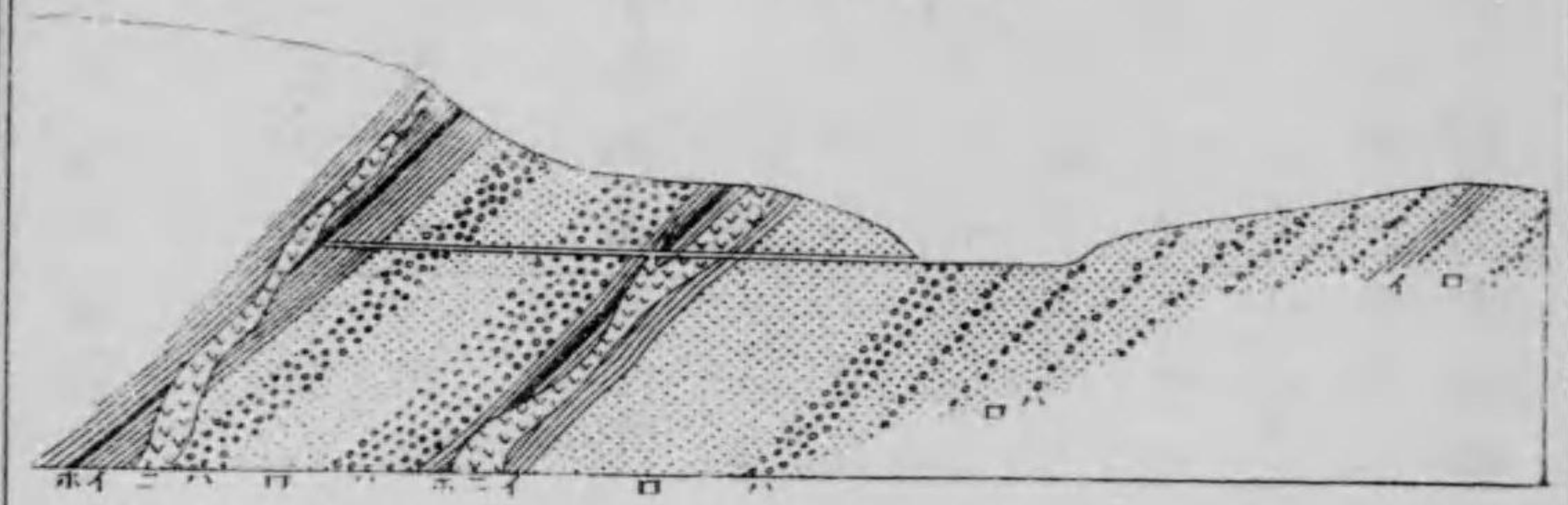
ハ五尺ナリ、兩炭層ハ南方石灰岩ニ近ク一條ニ併合シ厚サ時ニ九尺ニ達シ甚シク變動ヲ受ケ容易ニ破碎ス

第二群ハ第一群ノ西ニアリテ北方ハ玢岩ノ岩脈ニ依リ切斷セラレ南方ハ花崗岩ニ接シ總延長約十基米ナリ、斷層數多アリテ炭層爲ニ轉位セラレ玢岩ノ岩脈又ハ岩床アリテ炭層中ニ侵入スルコトアリ、而シテ一炭層ハ北方ヨリ南方ニ至ルマテ一炭層ハ中部ヨリ南部ニ至ルマテ之ヲ追跡スルヲ得、層向ハ北方ニハ約南北、南方ニハ北十度乃至二十五度東ニシテ西方三四十度ニ傾斜ス、重要ナル炭層ハ二層ニシテ厚サ區々ナルモ概シテ三尺乃至五尺時ニ九尺ニ達ス

第三群ハ最モ重要ナルモノニシテ第二群ノ西ニ位シ北方ニハ山脈ヲ横キレリ、本炭層群ハ北部ニ縮迫スルカ如ク南方ニハ花崗岩ニ接シ總延長十基米ヲ超ユ、層向ハ北方ニハ約南北又ハ北々西ナルモ南方ニハ北東ニ彎曲ス、傾斜ハ西方又ハ北西三十度ナリ、三炭層アリテ殆ント相并走シ其相互ノ距離ハ二百五十尺乃至三百五十尺ナリトス、玢岩ノ岩

第二圖

縮六尺千分之一



イ頁岩
ロ砂岩
ハ壁岩
ニ玢岩脈
ホ石灰岩

脈并ニ岩床甚々多ク加フルニ數多ノ層アリテ探掘困難ニ殊ニ中部ニ於テ然リトナス、(第二圖參照)炭層ノ厚サハ區々ナリ、中部ニ於テハ上層ハ一般ニ二尺五寸、中層ハ七尺五寸、下層ハ四尺五寸ニシテ稼行スヘキ炭層ノ總厚八尺乃至十尺ナリ、南方ニハ厚サ稍厚キモ北方ニハ夾ミ次第ニ膨大シ遂ニ稼行スヘカラサルニ至ル

第四群ハ山脈ノ西部ニアリテ延長四基米ヲ超ユ、一炭層アリテ約南北ニ走り西方ニ傾斜ス、炭層ハ夾ミヲ有シ其厚サ甚々區々ニシテ一尺三寸乃至八尺ノ間ニアリ、概シテ厚層ヲナストキ

ハ品位劣等ニ、薄層ナルトキハ品位良好ナリ、隨テ稼行ニ堪ユル區域ハ狭小ナリ

此外炭田ノ北西部ニ一炭層アリテ北東ニ走リ南東二十五度ニ傾斜ス、炭層ノ厚サハ一尺五寸乃至二尺ニシテ嘗テ露頭附近ニ稼行セラレタリ

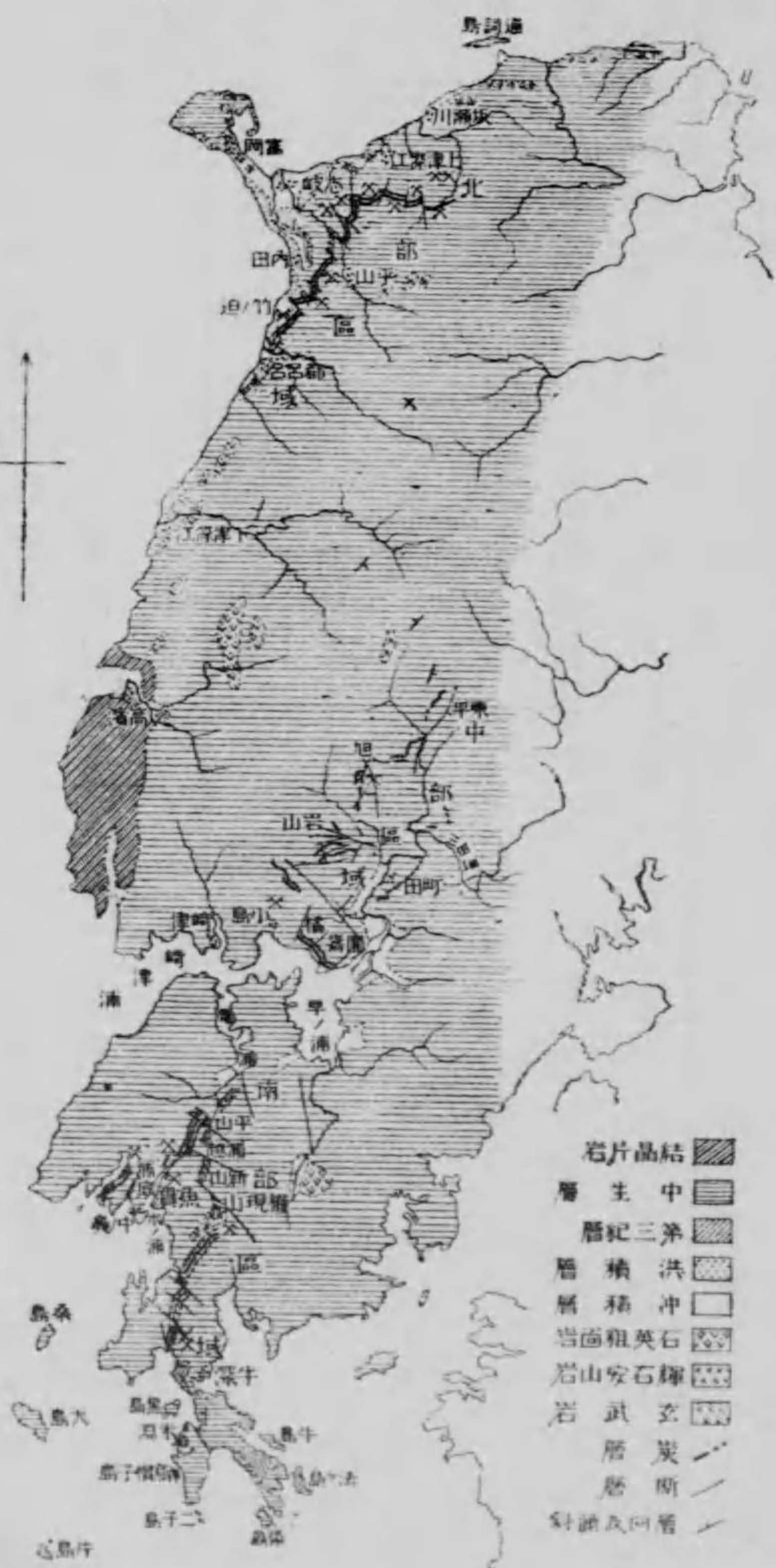
炭田ノ區域稍大ナルモ矽岩ノ岩脈及岩床甚タ多ク、加フルニ數多ノ斷層アリテ採掘上甚タ不利ナリ、隨テ炭田ノ區域ニ比シ炭量大ナラサルヘシ、石炭ハ地下千尺迄ヲ計算シタルニ其量大ナラスシテ第一種炭量百萬噸、第二種炭量千八百萬噸ナリ

石炭ハ亦嘗テ炭田ノ南部及炭田ノ東部ニアル伊佐ノ東方及南方ニ於テ採掘セラレタルコトアリ

天草炭田 (第三圖參照)

位置及沿革 肥後天草下島ノ西半ニ南北ニ互レル大ナル炭田アリ、天草炭田ト稱ス、本炭田ハ天保年間ニ開發セラレ爾來小規模ニ稼行セラ

第三圖 天草炭田 縮尺三十萬分之一



レタリ、明治十七年唧筒器械輸入セラレテヨリ鑛業ハ長足ノ進歩ヲナ

シ日清戰役後活潑ニ稼行セラレタリ、然レトモ坑内水ノ多キト掘進困難ナルト加フルニ石炭ノ價格低下セル爲メ鑛業ハ次第ニ衰退シ爾來閉山セシモノ少ナカラス、近時漸ク再興セラル、モノアルニ至レルモ產額尙小ナリ、明治十二年後ノ產出額ハ次ノ如シ

年 別	產 出 額	年 別	產 出 額	年 別	產 出 額
明治十二年	一四〇八〇	明治二十三年	六九三〇四	明治三十四年	四八一二八
同 十三年	—	同 二十四年	七〇八二八	同 三十五年	五五八一七
同 十四年	一一二一七	同 二十五年	五六〇五二	同 三十六年	四九一五三
同 十五年	九七五九	同 二十六年	四二七五九	同 三十七年	四一三〇八
同 十六年	一六五三二	同 二十七年	四〇六五三	同 三十八年	三九〇八三
同 十七年	二四六二七	同 二十八年	三五三〇八	同 三十九年	五七九四六
同 十八年	三一三三七	同 二十九年	二二七六八	同 四十年	七二五七七
同 十九年	三三三〇八	同 三十年	三八四九〇	同 四十一年	九四八〇四

同 二十年	二六七〇八	同 三十一年	三八九一二	同 四十二年	五四七七二
同 二十一年	—	同 三十二年	四四四四四	同 四十三年	四二四六一
同 二十二年	五八九三二	同 三十三年	四七三四二	同 四十四年	四三九七二

地形及地質 概言スレハ天草下島ハ高サ約百米乃至二百米ノ波狀ノ臺地ヲナシ所々ニ三百米乃至四百米ノ稍高キ山嶽屹立ス、一般ニ中部最モ高クシテ海岸ニ向ヒ低下ス、山脈ノ一般ノ方向ハ北々東ニシテ地層ノ走向ニ一致スルモノ、如シ、地質ハ頁岩、砂岩及蠻岩ニシテ頁岩ハ上部ニ發達シ、中部ハ砂岩、頁岩ノ互層ニシテ炭層ヲ挟ミ下部ハ砂岩及蠻岩ヨリ成レリ、玢岩及玄武岩ノ岩脈及岩床之ヲ貫通シ又ハ玄武岩ノ爲ニ被覆セララル、コトアリ、層向ハ一般ニ北々東ナリトス、下部ニ數多ノ介殼化石ヲ含有スル層位四アリ、其研究ニ依リ本層ノセノニアンニ屬スルヲ知レリ、上層ハ雙子葉植物ノ化石ヲ含有シ恰モ第三紀ニ屬スルカ如シ、含炭層ニハ植物化石ヲ埋藏シ、隨テ其果シテセノニアン期ニ屬スルヤ否ヤ明ナラスト雖モ植物化石ノ一部ハ歐米ニ於テ上部白堊

紀層ニ産スルモノアリ、且ツ下部ノ化石層ト不整合ヲ見サルノミナラ
 ス岩質亦著シク異ナラサルヲ以テ茲ニハ含炭層ヲ假ニ白堊紀層ニ屬
 スルモノトナセリ

含炭層ハ主ニ下部砂岩、中部頁岩及砂岩ノ互層、上部頁岩ヨリ成リ島ノ
 西部ヲ占ム、變動ノ結果地層ハ背斜層又ハ向斜層ヲナシ及數多ノ斷層
 ヲ見ル、便宜上本炭田ヲ北部、中部及南部ノ三區域ニ分テリ

炭層ハ三層アリ、厚サハ上部ヨリ之ヲ數フレハ北部區域ニ於テハ八寸、
 一二尺及三四尺、南部區域ニハ三尺乃至六尺、一尺乃至三尺及五寸乃至
 一尺トス、即チ北部及南部兩區域ニ於テハ炭層ノ厚サ相反スルヲ見ル、
 換言スレハ北部區域ニ於テ厚キ炭層ハ南部區域ニ於テ薄シ、中部區域
 ニ於テハ中部炭層ノ稍厚キノミニシテ上部及下部炭層ハ或ハ全ク之
 ヲ缺キ或ハ其發達甚タ不完全ナリ

炭質 石炭ハ漆黒ニシテ強キ光澤ヲ有シ容易ニ粉炭ニ破碎シ時ニ粘
 結ス、火成岩ノ接觸ノ結果石炭ハ不純ナル燧石ニ變シ北部區域ニ於テ

最モ多ク中部區域ニ於テハ尙之ヲ見ルモ南部區域ニハ之ヲ見ス、石炭
 ノ分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	比	重	發熱量	種類
二〇〇	一一・六四	七六・七一	七・四三	一九五	一・四八六	六九一五	一一四四七	半無煙炭	
								半瀝青炭	

北部區域 含炭層ハ坂瀬川ヨリ西方上津深江ニ互リ是レヨリ南々西
 ニ彎曲シ都呂々ニ達ス、北方ニハ傾斜ハ北方ニシテ其角度ハ二三十度
 ナルモ南方ニハ次第ニ急ニシテ志岐、内田ニ於テハ西北西四十度、都呂
 々ニ於テハ五六十度ニ傾斜ス、斷層ハ甚タ多ク玢岩ハ岩床若クハ岩脈
 トシテ含炭層ヲ貫通シ地質構造錯雜セリ、三炭層中上部炭層ハ薄ク厚
 サ概シテ一尺未滿ニシテ平均約八寸ナリ、中部炭層ハ厚サ一尺五寸乃
 至二尺八寸ニシテ普通二尺炭ト稱ス、下部炭層ハ厚サ三尺乃至六尺普
 通四尺ニシテ四尺炭ト稱ス、數多ノ炭坑所々ニ稼行スルモ大規模ノモ
 ノナク明治四十三年ニハ二千五百八噸、同四十四年ニハ八千三百八十

餘噸ヲ產出セリ

北方ニハ炭層ハ斷層ニ依リ屢切斷セララル、モ露頭及坑口ニ依リ約三基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得、南方ニハ炭層亦數多ノ斷層并ニ火成岩ノ爲ニ切斷セララル、モ露頭及稼行炭坑若クハ廢坑ニ依リ約六基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、中部ニハ四尺炭ハ厚サ屢五尺ニ膨大スルモ南部即チ竹迫以南ニハ上部二炭層ハ既ニ浸蝕シ去ラレタルカ如シ、火成岩ノ接觸ノ結果此區域ニ於ケル石炭ハ燧石ニ變シ其量約全炭量ノ半ハニ達スヘシ

中部區域ニ於テハ地層ハ一向斜層ヲナシ概ネ北々東ニ走リ一町田川涵域ハ恰モ向斜盆地ニ該當シ石炭ノ露頭ハ川ノ兩側ニアリ、數炭坑本區域ニ稼行シ明治四十三年ニハ五千九百九十九噸、同四十四年ニハ六千四百六十八噸ヲ產出セリ

南部殊ニ小島、岩山附近ニ於テハ地層ハ變動ヲ受クルコト甚シク斷層ノ結果同一ノ炭層數度露出シ層向傾斜ハ短距離ニ變化スルコト多シ、

炭層ノ厚サハ概シテ薄シ

旭炭坑ニ於テハ二尺炭層稼行セララル、其厚サハ一二尺ニシテ稀ニ二尺以上ニ達シ東方二十五度ニ傾斜ス、北方ニハ石炭ハ東平ニ至ルマテ之ヲ追跡スルヲ得ヘキモ厚サ次第ニ減少シ七寸ヨリ一尺以上トナレリ、南方ニハ炭層亦薄ク一般ニ一尺内外ナリ、激甚ナル變動ノ結果採掘困難ナルモ嘗テ小規模ニ稼行セラレタリ、小島炭坑ハ現ニ一炭層ヲ採掘ス、其厚サ約二尺ニシテ時ニ三尺ニ膨大スルモ北西ニハ薄條ニ分岐ス、圓壽及橋ノ海岸ニ近ク露出スル炭層ハ甚タ薄ク重要ナラス、向斜層ノ東翼ニ於テハ炭層ハ薄クシテ一般ニ一尺内外ナリ、嘗テ數箇處ニ稼行セラレタリ

南部區域ニ於テハ地層ハ北部ニ向斜層ヲナスモ南部ニハ其西翼海中ニ沒ス、斷層及火成岩ノ貫入甚タ多シ、石炭ハ浦越ノ附近ニ最モ好ク發達シ上層三尺炭ハ五尺ニ、二尺炭ハ三尺ニ膨大シ向斜層ヲナス、其傾斜角ハ三十五度乃至四十五度ナリ、平山ニ於ケル三尺炭ハ既ニ殆ント

探掘シ盡サレタルモ新山炭坑ハ現時最モ盛ニ稼行シ其產出額明治四十三年ニハ三萬三千五百四十七噸、同四十四年ニハ二萬九千四百二十一噸ニシテ本炭田ノ產出額ノ約三分ノ二ニ當レリ

向斜層ノ兩翼ハ南方斷層ニ該當セル魚貫灣ノ西ニ連續ス、斷層ノ結果炭層ハ約東西ニ彎曲シ水浦ニ於テハ南々東六十度、中鼻ニ於テハ南方三十五度ニ傾斜ス、三炭層アリテ嘗テ盛ニ稼行セラレタルモ坑内水多ク現時廢業セリ、背斜并ニ斷層ノ結果炭層ハ再ヒ浦底ニ現出ス、其西方ニハ一ノ向斜層ヲナシ西翼ハ半島ノ西海岸ニ露出ス、東翼ニ於ケル傾斜ノ角度ハ六十度ニシテ西翼ニ於テハ四十度乃至五十度ナリ、東翼ニハ上部二炭層稼行セラレタルモ西翼ニハ上部炭層ハ品位甚タ劣等ニシテ中部及下部炭層稼行セラル

東翼ニ於ケル炭層ハ新山ノ南方ノ斷層及權現山ノ玄武岩ニ依リ切斷セラレ、權現山ノ南側ニ露出スル三炭層中々部炭層ハ最モ良好ニシテ厚サ一尺三寸乃至二尺五寸ヲ有シ小規模ニ探掘セラレ、炭層ハ是ヨリ

南西ニ走リ北西四十五度ニ傾斜シ傾斜ノ方向ニハ玄武岩ニ依リ切斷セラレ、南方ニハ上部二炭層ハ薄ク品位劣等ナリ、下部炭層ハ厚サ八寸ニシテ嘗テ稼行セラレタリ、米淵ノ西方ニハ中部及下部炭層、烏帽子島ニ於テハ上部炭層嘗テ稼行セラレタリト云フ

炭量 炭層ハ稍廣域ニ互レルモ追跡シ得ヘキ延長ハ甚タ大ナラスシテ炭量隨テ大ナルヲ得ス、炭層ノ厚サハ甚タ區々ナルノミナラス地層ハ變動ヲ受ケ火成岩ノ貫通スルコト多ク探掘上不利少ナカラス、隨テ第一種ノ炭量ハ地下五百尺迄ノ炭層ヲ計算シ第二種炭量ノ計算ハ地下千尺時ニ二千尺ヲ限レリ、中部及南部區域ニハ地層ハ向斜層ヲナシ隨テ地下ノ深サハ大ナルニ至ラス、斯クシテ概算シタル炭量ハ第一種二百三十萬噸、第二種千四百七十萬噸ナリ

其他ノ炭田

越前大野附近ノ石炭 越前ノ東部ニハ中生層ハ處々ニ散在シテ古生層ヲ被覆シ花崗岩、玢岩ニ依リ貫通セラレ安山岩等ニ被ハレ頁岩、砂岩

及蠻岩ヨリ成リ數多ノ化石ヲ埋藏ス、化石ノ研究ニ依リ其珠羅紀ナルヲ知レリ、石炭ハ大野ノ東方約二十四基米ナル桂島川ノ上流ニ探掘ノ企圖アルモ交通不便ナリ、地層ハ甚シク擾亂スルモ層向ハ概シテ北西ニシテ南西ニ急斜ス、石炭處々ニ露出スルモ相互ノ關係明ナラス、五炭層アリト稱セラレ厚サ一定セサルモ五寸乃至七尺アリテ三層ハ約二基米間之ヲ追跡スルコトヲ得、炭量小ニシテ概算約五百萬噸ナリ、石炭ハ黑色ノ有煙炭ニシテ膨脹粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	發熱量	種類
一、九二	二九、六三	六二、六二	五、八三	一、三八	七、五〇八	英國熱單位	青高度瀝炭

大野ノ北西ニアル谷村附近ニハ厚サ一尺乃至一尺五寸ノ炭層北六十度東ニ走リ北々西十度乃至十五度ニ傾斜シ背テ小規模ニ稼行セラレタリ、面積狭小ニシテ安山岩ニ被ハレ炭量小ナリ、石炭ハ有煙炭ニ屬ス、丹波梅迫附近ノ石炭 梅迫ハ大阪舞鶴間鐵道沿線ノ一驛ニシテ舞鶴

ノ南方約十基米ニ位ス、石炭ハ梅迫ヨリ二基米乃至四基米ノ區域内ニアリテ明治三十年ニ探掘セラレタルモ永續セス、現時再興ノ企アリ、頁岩及砂岩ヨリ成レル中生層ハ古生層ノ小盆地上ニ成層シ高サ百米乃至三百米ノ低卑ナル丘陵ヲナス、褶曲斷層甚タ多キモ層向ハ概シテ西方ニハ東西ニシテ東方ニハ北三十度東ナリ、傾斜ハ南方ニ急ニシテ五十度乃至七十度ナリトス、三炭層頁岩中ニ介在シ中部炭層最モ厚ク厚サ四尺、稼行スヘキ部分一尺五寸アリ、上部及下部炭層ハ厚サ僅ニ一二尺ニ過キス、炭量小ニシテ概算百萬噸ヲ超エス、石炭分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種類
二、四一	一〇、四〇	七二、二五	一五、九四	〇、七四	半無煙炭	

丹後舞鶴ノ西方ニ於ケル石炭 由良川ハ丹波ヨリ來リ舞鶴ノ西方ヲ北流シ日本海ニ注ク、石炭ハ由良川ノ西岸、舞鶴ノ西方約十基米ニ産シ

便利ノ位置ニアリ、石炭ハ明治二十年ニ始メテ採掘セラシメ同二十八年ヨリ同三十二年ニ至ル間稍盛ナリシモ一日ノ産出額僅ニ十五噸乃至十八噸ニ過キス、其後休山シ近時再開ノ企圖アリ、含炭層ハ中生代ノ頁岩、砂岩及蠻岩ニシテ高サ二百米以下ノ波狀ノ臺地ヲナシ、西方ハ古生層ニ限ラレ、東方溪谷ニ向ヒ急斜ス、褶曲、斷層少ナカラス、石炭ハ頁岩中ニ介在シ露頭ハ南北約二、五基米、東西一基米ノ區域中ニアリ、層向ハ北部ニハ約東西ニシテ北方七十度ニ傾斜スルモ中部及南部ニハ南北ニシテ東方又ハ西方六七十度ニ傾斜ス、稼行スヘキ炭層三アリテ厚サ四尺乃至六尺時ニ十尺以上ニ膨大ス、石炭賦存ノ區域大ナラス隨テ炭量多カラス、概算五百萬噸ナリト云フ、石炭ノ分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
一、七〇	一四、四五	六三、九二	一九、九三	〇、四七	半	瀝	青炭

備中成羽附近ノ石炭 成羽附近ノ三疊紀層ハ頁岩及砂岩ヨリ成リ石

炭ヲ埋藏ス、既知ノ四炭層ハ薄ク厚サ約一尺ナリ、下部炭層ハ嘗テ稼行セラレタルモノニシテ夾ミト共ニ厚サ約二尺五寸アリ、層向ハ概ネ北西ニシテ南西ニ緩斜シ傾斜ノ角度ハ普通十度ナリ、石炭ハ品位劣等ニシテ分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
五、七九	四、〇三	六四、六三	二五、五五	〇、二二	無	煙	炭

津布田炭田 ハ長門ノ南海岸ニアル埴生ノ南東海岸ニアリテ、運搬甚タ便利ナリ、石炭ハ約四十年前ヨリ小規模ニ稼行セラレ主ニ四國及九州ニ於テ石灰焼成ノ燃料トシテ使用セラレタリ、産出額ハ明治四十三年ニハ二百二十三噸、同四十四年ニハ四百三十三噸ナリ、炭田ハ海岸ニ沿ヘル丘陵地ニシテ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ、レ「チツク」紀ニ屬スト云フ、層向ハ東北東ニシテ背斜層及向斜層ヲナシ、其角度ハ六十度乃至八十度ナリトス、數炭層中三層ノ厚サ六尺、七尺及四尺ナルモノ小規模

ニ稼行セラル、石英粗面岩噴出ノ結果石炭ハ燧石ニ變化スルコト多シ、
區域小ナルノミナラス地層ノ傾斜甚タ急ナルヲ以テ炭量少ナク概算
僅ニ二百萬噸ナリ、石炭ノ分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	發熱量	種類
五七八	三四〇	七五二四	一五五八	〇二七	六五四四	英國熱單位 一一七八〇	無煙炭

阿波德島附近ノ石炭 德島ノ南部ニアル白堊紀層ハ古生層ノ南方ニ
東西ニ連互シ頁岩、砂岩及燧岩ヨリ成ル、層向ハ約古生層トノ境界ニ並
行シ殆ント東西ニシテ北方ニ傾斜ス、白堊紀層ニ介在セル石炭ハ管テ
海岸及勝浦川ニ沿ヒ四箇所ニ稼行セラレタリ、二三ノ炭層厚サ區々ニ
シテ薄キハ一尺ニ充タス厚キハ三尺ニ達ス、石炭ハ有煙炭ニ屬シ概シ
テ破碎セラレテ粉炭トナリ質劣等ナリ、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種類
〇九五	三一四七	五四五三	一三〇五	〇七一	低度瀝青炭	

B 第三紀ニ於ケル石炭 一 樺太

樺太ノ中央山脈ハ約南北ニ走り白堊紀層ト思惟スヘキ中生層ヨリ成
リ其兩側ニ第三紀層之ヲ被覆ス、第三紀層ハ頁岩、砂岩及燧岩ヨリ成ル、
燧岩ハ屢最下部ニ於テ厚層ヲナシ之ニ依リ白堊紀層ニ接ス、燧岩ニ接
シテ重要ナル炭層アリ、隨テ樺太ニ於ケル主要ナル炭田ハ白堊紀層即
チ中央山脈ニ沿ヒ狹長ナル區域ヲナス、此外小炭田ハ各所ニ散在ス、第
三紀ノ上部ニアル石炭ハ能登呂半島ノ西海岸ニ近ク狹長ナル區域ヲ
占ムルモ其品質下部ニ於ケルモノヨリ劣等ナリ
石炭ハ未タ稼行セラレタルコトナク又試錐ニ依テ其賦存ノ状態ヲ檢
シタルコトナキヲ以テ厚層ノ石炭ハ地下五百尺迄ヲ第一種炭量トシ
テ概算シタリ、第二種炭量ニハ炭層ノ厚サ炭田ノ地質構造ニ依リ深サ
二千尺乃至四千尺迄ヲ計算シタリ、然レトモ樺太ノ炭田ハ未タ全ク調
査セラレサル所多ク茲ニ概算セルハ樺太ニ於ケル炭田全部ノ炭量ヲ

包括セサルナリ、而シテ概算炭量ハ中部炭田ニ於テ第一種炭量千八百萬噸、第二種炭量七億七千三百萬噸、能登呂炭田ニ於テ第二種炭量四億六千五百萬噸ナリトス

中部炭田即チ内淵炭田

中部炭田ハ樺太ノ中部ヲ占メ西海岸ノトマリオロ海岸ヨリ真岡ノ東北東ニ屹立セル留多加山ノ南麓ニ達シ北部ハトマリオロ川、中部ハ内淵川、南部ハ姉川ニ沿ヘル狭長ナル面積ヲ占メ總延長七十基米ヲ超ユ、炭田ハ河流ニ沿ヘル波狀ノ丘陵地ニシテ高サ一般ニ三百米乃至五百米ノ白堊紀山脈其東方ヲ限レリ、第三紀層ハ整合ニ白堊紀層ヲ被覆シ主ニ頁岩及砂岩ヨリ成リ緩ナル褶曲ヲナス、第三紀層ヲ分テ含炭層及上部層トナス、含炭層ハ第三紀ノ下部ヲ占メ狭長ナル區域ヲナシテ直ニ白堊紀層ヲ被覆シ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ其厚サ九百尺乃至二千尺ナリトス、層向ハ一般ニ南北又ハ北三十度西ニシテ北部及中部ニハ一ノ背斜層及向斜層ヲナシ南部ニハ西方ニ傾斜セル單斜層ヲナス、傾

斜ノ角度ハ一般ニ二十度以下ナルモ三十度ニ達スルコト少ナカラス、本層ハ中部ニ最モ好ク發達シ北部及南部ニ次第ニ薄シ、炭層ノ數及厚サハ未タ明ナラサレトモ厚サ三尺乃至十五尺ノモノ四層以上アルコトハ疑フヘカラス、數多ノ化石アルモ未タ研究セラレス、隨テ之ニヨリ其地質年代ヲ知ルヲ得サレトモ他炭田トノ比較上本層ハ蓋シ中新紀層ニ屬スルカ如シ

本炭田ハ現時ニ於テハ運搬甚タ不便ナルモ北部ニ於テハ石炭ハ海岸ヨリ四基米以内ニアリテトマリオロ川ヨリ容易ニ達スルヲ得ヘシ、最近二年間樺太廳ハ此地ニ於テ石炭ヲ試掘シタリ、中部及南部ハ更ニ不便ナルモ内淵平原ニハ稍廣キ溪谷ヲ通シ約十五基米ニシテ達スルヲ得ヘシ、炭田ハ便宜上之ヲ北部、中部及南部ノ三區ニ區別ス

石炭ハ有煙炭ニシテ一般ニ粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃種	類
五、六七	四〇、一五	四六、八六	七、三二	〇、四〇	低度瀝青炭	

第四圖
中部炭田「マトロ」區域
縮尺二萬分之一



北部即チ「トマリ」区域(第四圖參照)ニ於テ調査面積ハ延長約二十
 二基米、幅半基米乃至五基米ニシテ漸次北方ニ狹小ナリ、含炭層ハ北部
 ニ於テ殊ニ激甚ナル變動ヲ受ケタルカ如シ、數多ノ斷層アリ、中一大斷
 層ハ炭田ノ北端ヨリ中部ヲ通シ南部ニ互レリ、層向ハ約南北ナルモ傾
 斜ハ斷層ノ東西ニ於テ異ナレリ、即チ斷層東方ニ於テハ東方若クハ北
 東四十度乃至四十五度ニシテ西方ニハ西方又ハ南西六七十度ナリ、殆
 ント本斷層ニ接續シテ一ノ背斜層南部ニ連ナリ其兩翼ノ傾斜角ハ三
 十度以下ナリトス、以上ノ事實及斷層ノ東西ニ於ケル炭層ノ比較ニ依
 リ之ヲ見ルニ北部及中部ニ於テモ一ノ背斜層ナカルヘカラス、而シテ
 其位置ハ恰モ斷層ニ該當ス
 炭層ハ之ヲ三四群ニ區別ス、最上部ニアルモノ最モ重要ニシテ稍正確
 ニ之ヲ追跡スルヲ得
 北部ニ於テハ上群ハ斷層ノ東部ニ於テ好ク露出ヲナシ三炭層ヲ檢ス
 ルヲ得、其厚サハ三四尺ニシテ相互ノ距離ハ二尺乃至七尺ナリトス、露

度乃至三十五度ニ傾斜シ變動ヲ受クルコト少ナシ、西方ニハ地層ハ斷層ノ爲ニ切斷セララル、コト多ク含炭層ハ三區ニ散在ス、北部區及南部區ニハ地層殆ント中部ニ於テ背斜層ヲナシ中部區ハ東方大斷層ニ依リ切斷セララル、本區域ノ中央部ハ地層殆ント水平ナルモ北方及南方ニハ一ノ向斜層ヲナス、炭層數多アルモ其相互ノ關係未タ明ナラサルモノアリ

東部ニハ稍正確ニ七炭層ヲ追跡スルヲ得ヘク其平均厚サハ上部ヨリ之ヲ數フレハ三尺三寸、七尺五寸、二尺二寸、二尺五寸、五尺四寸、五尺八寸及二尺四寸ナリ、是等ノ炭層ハ中部ニ最モ好ク發達シ北部ニハ六層、南部ニハ四炭層アルノミ、其相互ノ距離ハ南方ニ小ニシテ漸次北方ニ大ナリ、西部ニハ炭層ハ三層乃至五層ヲ檢スルノミニシテ其他ハ土壤ニ被覆セラレテ明ナラス、北部區ニ於テハ第一、第二及第三ノ三炭層アリテ厚サ三尺乃至十尺ナリ、南部區ニハ第一、第二、第三、第五及第六ノ五炭層露出シ厚サ二尺乃至五尺ナリ、中部區ニハ一炭層ノ厚サ二尺ナルモ

ノアリ、其關係未タ明ナラス

南部即チ姉川區域 中調査セラレタルハ延長二十七基米ノ狹長ナル地域ナリ、其幅ハ概ネ四千尺内外ナルモ北方ニハ上部層ニ被覆セラレテニニ分岐ス、含炭層ハ頁岩、砂岩及疊岩ニシテ其總厚ハ千五百尺ヲ超エサルカ如シ、層向ハ一般ニ南北ニシテ北部ニ於テハ緩ナル波狀ヲ呈シ向斜層及背斜層ヲナスモ南部ニハ西方ニ傾斜ス、其角度ハ概ネ二三十度ナルモ時ニ七十度ニ急斜シ白堊紀層ヲ整合ニ被覆スルカ如シ北部ニハ炭層甚タ多ク其數未タ明ナラサレトモ三尺以上ノ炭層五層ヲ下ラサルヘク五寸以上ノモノヲ數フレハ三十層以上ニ達スヘシ、厚サハ區々ニシテ概ネ二尺乃至十尺、其總厚十五尺乃至二十五尺ナルヘシ、中部ハ最モ重要ナル部分ニシテ延長十二基米アリ、層向ハ南方ニ至ルニ隨ヒ次第ニ西方ニ轉シ北二十度乃至北六十度西ナリトス、傾斜ハ一般ニ四十五度内外ナリ、數多ノ炭層中七層乃至十層ハ重要ニシテ厚サ三尺乃至十七尺、總厚三十尺ヲ下ラサルヘク恐ラク四十尺以上ニ達

スヘシ、南部ハ延長約十二基米ニシテ南端ハ未タ調査セラレス、層向ハ南北ニシテ西三十度ニ傾斜ス、數多ノ炭層中三層乃至五層ハ重要ニシ

テ厚サ五尺乃至二十尺ノ間ニアリ、其總厚ハ二十尺ヲ下ラサルヘシ

能登呂炭田

能登呂炭田(第六圖參照)ハ能登呂半島ノ中部ニアリテ南北ノ延長約四十基米、東西約十八基米ノ區域ヲ占メ高サ百米ニ充タサル波狀ノ丘陵臺地ヨリ成リ其最高點僅ニ六百米ナリ、交通不便ニシテ現時ニ於テハ本炭田ニ入ルコト困難ナリ

第六圖 能登呂炭田 一之分萬十五尺縮



能登呂半島ニ於ケル第三紀層ハ直ニ白堊紀層ヲ被覆シ下部含炭層、下部、上部含炭層及上部ノ四層ニ區別ス、下部含炭層ハ白堊紀ニ接シ直ニ之ヲ被覆シ兩者ノ間ニ變岩アリ、岩石ハ頁岩、砂岩及泥灰岩ヨリ成リ泥灰岩中ニアル數多ノ植物化石ニ依リ其中新紀層ニ屬スルヲ知レリ、上部含炭層ハ西海岸ニ近ク狹長ナル區域ヲ占メ頁岩、砂岩ヨリ成ル、地質調査未タ全ク施行セラレスシテ本炭田ノ一部ニ於テ豫察調査ヲ了セルノミ

石炭ハ有煙炭ニシテ一般ニ粘結セス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	比	重	種
一三、四七	三四、一〇	四三、四六	八九、七	〇、七二	一三、三三	低	黑	類
						度	褐	
						瀝	青	
						炭	炭	

下部含炭層ハ下部層ニ被覆セラレテ二區域ニ分離スルモ下部ニハ相連絡シテ背斜層ヲナセルカ如シ

東部區域ハ白堊紀層ニ沿ヒ南北約四十基米ノ狹長ナル地域ヲナスモ

其北端及南端ハ未タ明ナラスシテ調査區域ハ僅ニ十二基米ニ止マレ
リ、含炭層ハ其層向南北ヨリ北三十度東ノ間ニアリテ殆ント中部ニ一
ノ背斜層ヲナシ砂岩最モ好ク發達ス、傾斜ノ角度ハ北方ニハ概ネ四十
五度、南方ニハ稍急ニシテ六十度ニ達ス、數多ノ炭層ノ露頭ハ河流及支
流ニアリテ厚サ二尺乃至十五尺ノモノ三四層以上ヲ檢セルモ其延長
ハ明ナラス、雨龍川ニ沿ヒ石炭ハ十二基米ノ間處々ニ之ヲ檢スルヲ得
ヘク背斜層ノ西翼ニ於テハ厚サ北部ニハ上部ヨリ二尺、三尺及六尺五
寸ノ三炭層、中部ニハ五尺、四尺、七尺及三尺ノ四炭層、南部ニハ三尺五寸、
十五尺、四尺及二尺五寸ノ四炭層アリ、東翼ニ於テハ炭層ニアリ、更ニ南
方濁川及「ナヤシ」川上流ニ於テハ調査甚タ不完全ナリ、「ナヤシ」川上流ニ
於テハ厚サ四尺ノ炭層、濁川ニ於テハ三炭層アリテ西方又ハ西北西三
十度乃至五十度ニ傾斜ス、本炭層ハ北部ニ於ケルト同一ノ炭層ナルヘ
キモ其相互ノ關係未タ明ナラス

ルヲ得ヘシ、調査セル地域ハ北方ノ一部ニシテ南方ニハ大ナル未調査
ノ地域アリ、含炭層ハ甚シク變動ヲ受ケ褶曲斷層多クシテ各炭層ノ層
位上ノ關係ヲ知ルコト甚タ困難ナリ、炭層ハ一般ニ東方ニハ南北ニ走
リ背斜層及向斜層ヲナス、其角度ハ一般ニ二十五度内外ナリ、西方ニハ
層向ハ甚タ區々ニシテ或ハ急ニ斷層ニ切斷セラレ、傾斜ハ急ニシテ概
ネ六十度ナリ、數多ノ炭層アリ、而シテ厚サ三尺乃至七尺ノ五炭層東方
ニ賦存ス、西方ニハ四尺乃至十七尺ノ五炭層アリト云ヒ斷層褶曲ノ結
果尙數多ノ炭層アルカ如キ觀アリ

上部含炭層　ハ狹長ナル區域ヲナシ頁岩及砂岩ヨリ成リ直ニ下部層
上ニアリ、厚サ十尺乃至二十尺ノ三炭層及四五尺ノ一炭層アリテ約南
北ニ走り西方ニ稍急斜シ中部ニ一ノ背斜層ヲナス、北部ニハ含炭層ノ
幅甚タ狭クシテ十尺以上ノ一炭層西方ニ急斜ス、南方ニハ區域次第ニ
廣ク厚サ上部ヨリ二十尺、十二尺、十尺及四尺ノ四炭層北二十度西ニ走
リ西方三十度ニ傾斜ス、「ナイボロ」川ニ於テハ厚サ上部ヨリ十二尺、三尺、

十五尺及六尺ノ良質ノ四炭層アリテ北二十度西ニ走リ七十度ニ急斜セル背斜層ヲナス、其南方ニハ約五基米ノ間炭層ノ露頭ヲ見サレトモ厚サ二尺乃至七尺ノ炭層再ヒ南方ニ露出シ更ニ南方ニ連續シテ東方六十度ニ傾斜ス、良質ノ炭層亦南部ニ露出スルモ地域漸ク狭シ、四炭層アリ、上層ヨリ之ヲ數フレハ厚サ七尺、十五尺、十五尺及十尺ニシテ北十五度西ニ走リ西方六十五度ニ傾斜ス

幌内炭田

幌内炭田ハ南北ニ走レル中央山脈ノ東側ニアリテ延長八十基米ニ互レル狭長ナル區域ヲ占メ高サ百米乃至二百米ノ丘陵地ヲナス、地層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ直ニ白堊紀層ヲ被覆ス、數多ノ炭層アルモ二三箇所ニ於テ之ヲ檢セルノミ、露國ノ國境ニ近ク五尺乃至十尺ノ五炭層アリ、中部ニ於ケル「ホイエ」川ニ露出スル一炭層ハ厚サ十尺ナリト云フ、南方「シツカ」川ニ沿ヒ厚サ十尺ノ一炭層北三十度西ニ走リ西南西五十度ニ傾斜ス、炭田ノ價值ハ調査不完全ナルヲ以テ明ナラサレトモ多

量ノ石炭ヲ埋藏スルカ如シ、石炭ハ主トシテ有煙炭ニ屬ス、其分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
一〇.八九	二五.八一	五三.二八	一一.〇二	〇.五六	〇.五三	高度	瀝青炭

東海岸ニ於ケル石炭

「ノボリボ」炭田 ハ東海岸ノ中部ニアリテ西方ハ火山岩ニ接ス、地ハ狹長ナル丘陵地ニシテ頁岩及砂岩ヨリ成ル、厚サ十五尺乃至二十尺ノ一炭層北々東ニ走リ西北西四五十度ニ傾斜シ三基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘシト云フ、石炭分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
一一.二三	二二.八七	五八.九一	七.〇九	〇.五三	〇.五三	高度	瀝青炭

「メナペツ」川ニ沿ヘル石炭 知床半島ノ「メナペツ」川ニ沿ヘル一丘陵地ハ頁岩、砂岩ヨリ成リ厚サ五尺乃至十尺ノ二炭層ヲ挾有ス、層向ハ區々

ナルモ一般ニ北十度乃至四十度東ナリトス

西海岸ニ於ケル石炭

「アモベシ」川ニ沿ヘル石炭 露國國境ニ近ク「アモベシ」川ノ谿谷ニ厚サ二尺乃至五尺ノ二炭層北二十度東ニ走リ西方十五度乃至三十度ニ傾斜ス、含炭層ハ白堊紀層ヲ覆ヒ頁岩及砂岩ヨリ成レリ

「アラコウ」川ニ沿ヘル石炭 露國國境ノ南部約十二基米「アラコウ」川ニ沿ヒ厚サ上部ヨリ二尺、四尺及二尺五寸ノ三炭層アリテ北二十五度西ニ走リ西方ニ急斜ス

「セルトナイ」炭田 ハ北部ニアリ、沿岸ノ斷崖ニハ炭層ノ好露出甚タ多ク約五基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、炭田ハ波狀ノ臺地ニシテ東方ニハ火山岩ヨリ成レル高峻ナル山嶽アリ、含炭層ハ主ニ砂岩ヨリ成リ頁岩ヲ挟メリ、地層ハ變動ヲ受クルコト甚シク褶曲斷層多クシテ各炭層露頭ノ相互ノ關係ハ未タ明ナラス、層向ハ約南北ニシテ東方ニハ西方ニ、西方ニハ東方ニ傾斜シ一ノ向斜層ヲナス、傾斜ノ角度ハ三十度乃至六十度ナリ、而シテ上部ハ所ニ依リ浸蝕作用ノ爲メ除去セラレタリ、六炭層アリ、上部ヨリ之ヲ數フレハ厚サ六尺、五尺、三尺五寸、二尺、四尺及十二尺ナリ、内第三層及第四層ハ安山岩ノ岩床ノ接觸變質作用ノ結果燧石ニ變ス、上部二層ハ嘗テ露西亞人ノ稼行セルモノニシテ廢坑海岸ニ近ク處々ニ散在ス、數多ノ斷層ノ結果炭層ノ延長ヲ知ルコト難クシテ炭田ノ價值ヲ定ムルコト能ハサレトモ相當ノ炭量ヲ埋藏セルナルヘシ、石炭ハ一般ニ有煙炭ニシテ粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
四三五	二〇、八八	六三、八三	一〇、九四	〇、九一	高度瀝青炭		

「ナヤシ」川中流ニ於ケル石炭 含炭層ハ白堊紀層ヲ被覆シ「ナヤシ」川中流ニ南北ニ長キ地域ヲ占メ中部ニ一ノ向斜層ヲナス、厚サ二尺及四尺ノ二炭層本層中ニ介在ス

「エストル」川中流ニ於ケル石炭 「エストル」川ノ中流ニ狹長ナル地域ヲ

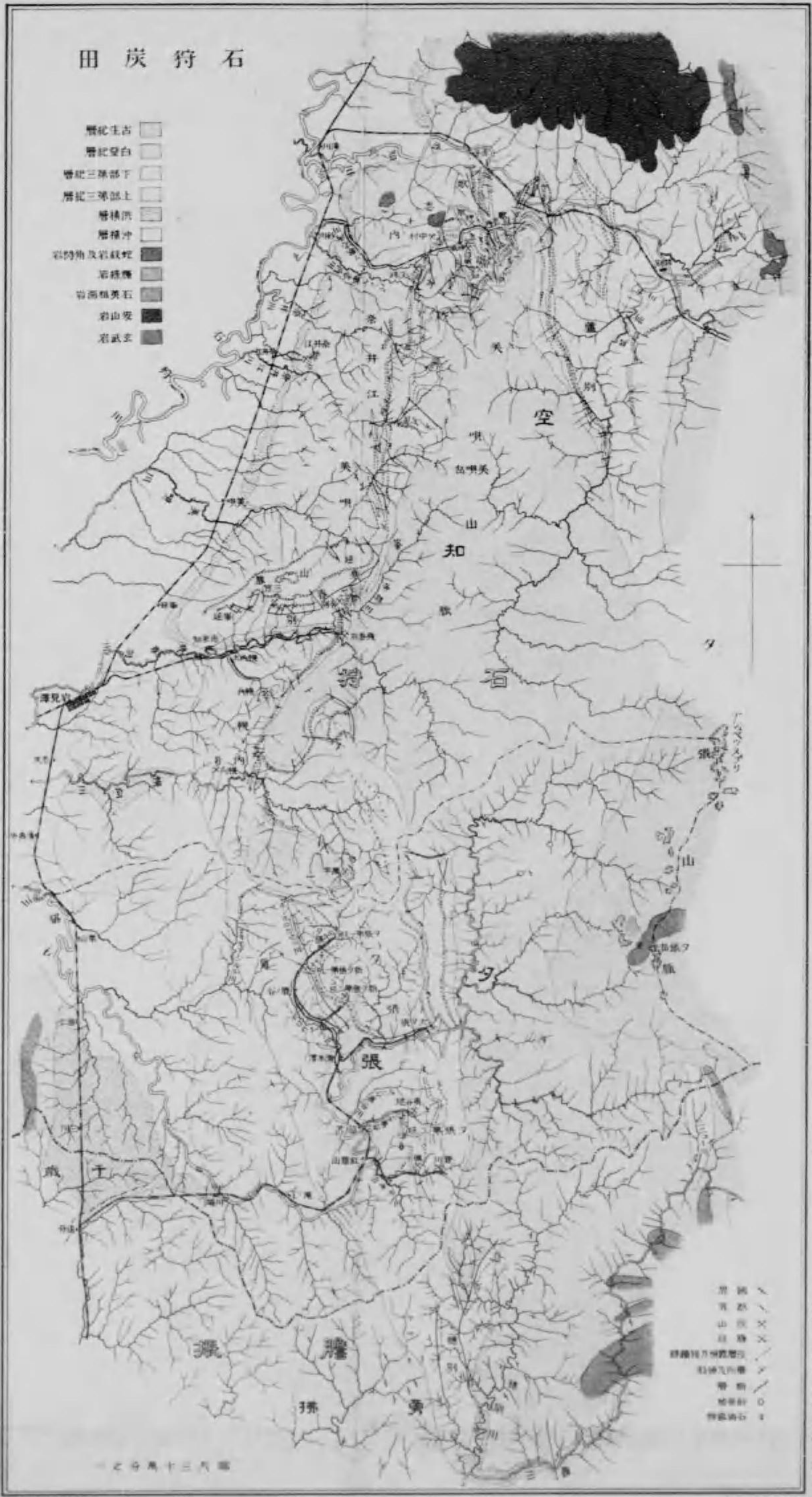
占ムル合炭層ハ頁岩及砂岩ヨリ成リ南北ニ走リ西方五十度ニ傾斜ス、厚サ十三尺ノ炭層本層中ニ介在ス

二 北海道

石狩炭田 (第二版参照)

位置及地形 石狩炭田ハ石狩川ノ東ニアル區域ヲ總稱シ石狩ノ中部ヲ南北ニ連亘セリ、穂別炭田ハ膽振國ニアルモ本炭田ノ連續セルモノニシテ便宜上之ヲ本炭田ニ包括セシメタリ、炭田ハ延長七十基米、幅十五基米乃至二十五基米ノ廣大ナル面積ヲ占メ東方ハ夕張山脈ニ限ラレ西方ハ石狩川ノ大平野ニ沈降シ、北端ハ高サ約九百米ノ「イルムケツ」火山ニ依リ切斷セラレ南方ハ未タ全ク明ナラス、夕張山脈ハ最高點ヲ「アシユベツヌプリ」トシ高サ約千九百二十餘米アリ、美唄山脈ハ是ヨリ分岐シ高サ約百米ノ美唄嶽ヲ以テ最高トシ炭田ノ北部ヲ南北ニ走リ東西ノ二區域ニ分テリ、峻峻ナル夕張山脈ノ西方ハ地形急ニ低下シテ中生代ノ山脈ニ降リ之ヨリ炭田ニ向ヒ次第ニ低下ス、炭田ハ波狀ノ

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14



占ムル含炭層ハ頁岩及砂岩ヨリ成リ南北ニ走リ西方五十度ニ傾斜ス、
厚サ十三尺ノ炭層本層中ニ介在ス

二 北海道

石狩炭田 (第二版参照)

位置及地形 石狩炭田ハ石狩川ノ東ニアル區域ヲ總稱シ石狩ノ中部
ヲ南北ニ連反セリ、種別炭田ハ膽振國ニアルモ本炭田ノ連續セルモノ
ニシテ便宜上之ヲ本炭田ニ包括セシメタリ、炭田ハ延長七十基米、幅十
五基米乃至二十五基米ノ廣大ナル面積ヲ占メ東方ハ夕張山脈ニ限ラ
レ西方ハ石狩川ノ大平野ニ沈降シ、北端ハ高サ約九百米ノイルムケツ
プ火山ニ依リ切斷セラレ南方ハ未タ全ク明ナラス、夕張山脈ハ最高點
ヲアシユベツヌブリトシ高サ約千九百二十餘米アリ、美明山脈ハ是ヨ
リ分岐シ高サ約百米ノ美明嶺ヲ以テ最高トシ炭田ノ北部ヲ南北ニ走
リ東西ノ二區域ニ分タリ、峻峻ナル夕張山脈ノ西方ハ地形急ニ低下シ
テ中生代ノ山脈ニ降リ之ヨリ炭田ニ向ヒ次第ニ低下ス、炭田ハ波状ノ

大井土質調査所地質調査部編

石狩炭田

- 層紀生古
- 層紀白
- 層紀三層部下
- 層紀三層部上
- 層積沖
- 礫層
- 砂質角礫岩
- 砂岩
- 頁岩
- 砂岩
- 頁岩

一七〇萬三千尺圖

臺地狀ヲナシ最高點八百米アリ、石狩川ノ支流ハ本炭田ヲ東ヨリ西ニ
流下シ東西ニ走レル小山脈ヲナシ地形ノ單調ヲ破レリ、イルムケツブレ
火山ハ北方ニ稍大ナル面積ヲ占メ第三紀層ヲ被覆シ炭田ノ北部ヲ限
レリ、北方ニ於ケル空知川、南方ニ於ケル夕張川ハ本炭田ニ於ケル石狩
川ノ二大支流ナリ、中部ニアル幾春別川及幌向川ハ之ニ亞キ約東方ヨ
リ西方ニ炭田ヲ横キレリ、膽振ノ鶴川ハ北々東ヨリ南々西ニ流下シテ
炭田ノ南部ヲ限レリ

沿革及產出額 北海道ノ石炭ハ殆ント全ク石狩炭田ノ產出ニ係リ其
發見ハ明治維新前ニアリト云フ、明治六年炭田ノ調査始メテ北海道廳
ニ依リ施行セラレタリ、幾春別炭田ノ幌内炭坑ヲ開發セントスル企圖
ハ明治三年ニ始マリ四年後ニ至リ探炭ニ着手シタリ、明治二十三年炭
礦鐵道會社組織セラレ鐵道ヲ敷設シテ運搬ノ方法ヲ改メ二年後主要
ナル鐵道ノ完成スルニ至リ產出額甚ク増加シ爾來交通機關次第ニ
發達シ殊ニ最近十五年間急激ニ進歩シ特ニ最近五年間ヲ然リトナス、

本炭田ノ產出額ハ次ノ如シ

年 別	產 出 額	年 別	產 出 額	年 別	產 出 額
明治二十一年	五、七三三	明治二十九年	四六〇、六八四	明治三十七年	一、〇七八、一六八
明治二十二年	一一四、一三三	明治三十年	六〇〇、八五七	明治三十八年	一、一七五、五一
明治二十三年	一八七、八五三	明治三十一年	五九六、七四一	明治三十九年	一、四五四、〇一八
明治二十四年	二六九、五一一〇	明治三十二年	六三八、三四八	明治四十年	一、三八四、三四九
明治二十五年	二二九、八九八	明治三十三年	六五九、七四二	明治四十一年	一、六〇七、三〇四
明治二十六年	三三六、五七〇	明治三十四年	八二六、八八五	明治四十二年	一、六九一、九三〇
明治二十七年	三九〇、九二一	明治三十五年	九六四、〇九六	明治四十三年	一、五九一、六九五
明治二十八年	四六〇、三九八	明治三十六年	一、〇五三、八五五	明治四十四年	一、七〇一、七四八

地質 基盤ハ古生層ニシテ綠泥石墨片岩、石墨片岩、綠泥片岩ノ如キ變成岩ト石灰岩、輝綠凝灰岩、角岩及粘板岩等ヨリ成リ概ネ南北ニ走り東方六十度乃至八十度ニ傾斜シ急峻ナル夕張山脈ヲ形成ス、不整合ニ之

ヲ被覆セル中生層ノ山地ハ地勢古生層ニ於ケルト全ク異ナレリ、其岩石ハ主ニ上部頁岩、中部頁岩及砂岩ノ互層及下部砂岩ヨリ成レリ、疊岩ハ中部及上部ノ間ニアルコト多ク其厚サハ「ペンケ」歌志内川上流ニ於ケル如ク時ニ五百尺ニ達スルコトアリ、層向ハ一般ニ約南北ナルモ地層屢褶曲ス、傾斜ノ角度ハ區々ニシテ一般ニ二十度乃至五十度ナリ、美唄山脈ノ北部ニハ地層ハ背斜層ヲナシ空知川ニ近ク第三紀層下ニ沈降ス、數多ノ化石ニ依リ本層ハ白堊紀ニ屬スルヲ知レリ
 第三紀層ハ凝灰岩、頁岩、砂岩及疊岩ヨリ成リ泥灰岩及炭層ヲ挟ミ白堊紀層ヲ被覆ス、層向及傾斜ハ白堊紀層ト相同シク兩者ノ間ニ不整合ヲ見ス、厚層ヲナセル疊岩ハ常ニ第三紀層ト白堊紀層トノ間ニアリテ地形ニ變化アリシヲ示セリ、第三紀層ハ之ヲ上下ノ二部ニ區別ス、上部層ハ凝灰岩、凝灰頁岩及疊岩ヨリ成リ、下部層ハ頁岩、砂岩及疊岩ヨリ成リ泥灰岩及炭層ヲ挟ミ兩者ノ間ニ不整合ヲ見ス、下部層ハ東部ヲ占メ直ニ白堊紀層ヲ被覆シ上部層ハ西部ニアリ、炭層ハ下部層ニ埋藏セラレ

其ノ數百五十ヲ超エ厚サハ數寸ヨリ六十尺ニ膨大シ扁豆狀ヲナセル
モノ多キカ如シ、層向ハ一般ニ南北ナルモ北部ニハ下部ノ中生層ト同
シク伸長セル半穹窿狀ヲナシ北、東、西ノ三方ニ沈降ス、地層ハ亦處々ニ
甚シク擾亂セル所アリテ背斜層又ハ向斜層ヲナシ及斷層甚タ多キ所
アリ、數多ノ化石ハ殊ニ下部層ニ發見セラル、モ標準トスヘモノナク
其地質年代ヲ定ムルコト能ハサレトモ其化石ハ白堊紀層ニ於ケルモ
ノト全ク異ニシテ本層ハ蓋シ中新紀ニ屬スルモノナルヘシト云フ、上
部層ハ凝灰質ニシテ其時代ニ於ケル火山活動ノ激甚ナリシヲ示セリ、
洪積層ハ石狩川ノ大平野ニ沿ヒ狭キ塔段ヲナシ山地ヲ繞レリ、火成岩
ハ少ナク輝綠岩及蛇紋岩ハ古生層及白堊紀層ヲ貫通シ安山岩、石英粗
面岩及玄武岩ハ白堊紀層及第三紀層ヲ貫通ス、石英粗面岩ハ第三紀層
中ニ岩脈ヲナシ空知川ノ南岸赤平ニ露出ス、安山岩ハイルムケツプ火山
ヲ構成スルノ外白堊紀層及第三紀層ニ岩脈トシテ數箇所ニ露出ス、玄
武岩ハイルムケツプ火山ノ南麓ニ露出シ及歌志内ノ西方ニ孤立ノ神威

嶽及小神威嶽ヲナス

第三紀層ハ西方ヨリ襲來セル横壓力ノ爲メ甚シク變動シ複雑ナル褶
曲及衝上斷層ヲナシ斷層ハ其數多ク悉ク舉クヘカラス、斷層ノ主要ナ
ル方向ハ南北、東西又ハ北西ニシテ、美唄山脈ノ西麓ニハ塔段斷層多シ
トス、而シテ地層ハ一般ニ美唄山脈ノ東方ニハ規則正シク之ヲ追跡ス
ルヲ得ヘク層向ハ南北又ハ北西ニシテ東方ニ傾斜ス、美唄山脈ノ西方
ニハ地層ハ擾亂セラレテ層向屢變化シ之ヲ追跡スルニ難キモ一般ニ
亦約南北ヲ指セリ

炭層 白堊紀層ニハ扁豆狀ヲナセル炭層ヲ檢スルモ厚サ二寸乃至一
尺ナリトス、主要ナル炭層ハ第三紀下部層ニアリテ現ニ盛ニ稼行セラ
ル、第三紀上部層ニアルモノハ品位甚タ劣等ナルノミナラス厚サ亦薄
クシテ五寸乃至一尺ナリ、隨テ白堊紀層及第三紀上部層ニアル炭層ハ
經濟上價值アルモノニアラス
炭層ノ數ハ甚タ多クシテ薄層ヲ數フレハ百五十ヲ超ユ、炭層ハ美唄山

脈ノ北西ニ最モ好ク發達スルモ地質構造甚タ複雑ナリ、南方ニハ總テ之ヲ追跡スルヲ得スシテ炭層數甚タ減少ス、然レトモ幾春別川ノ中流及北部ニハ炭層數再ヒ増加ス、即チ炭層ノ發達ハ區々ニシテ短距離ニ變化スルモノ、如ク隨所各炭層ヲ比較スルコト困難ナリ、炭層ノ厚サハ區々ニシテ一尺ヨリ六十尺ニ膨大ス、蓋シ厚層ノ炭層ト雖モ或ハ短距離ニ縮迫シ扁豆狀ヲナシ或ハ薄條ノ稼行ニ堪ヘサル數多ノ炭層ニ分岐ス

炭質 石炭ノ物理并ニ化學性質ハ各地方及各炭層ニ於テ異ナリ、同一炭層ニアルモノト雖モ時ニ粘結シ時ニ粘結セサルコトアリ、石炭ハ一般ニ黑色ニシテ粘結シ樹脂光澤ヲ有シ容易ニ長焰ヲ發シテ燃燒シ良好ナル有煙炭ニ屬ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

歌志内	水		揮發物	固定炭素	灰	硫黃	比重	發熱量		種類
	別	別						カロリ	英國熱單位	
三三五	三三五	三六八六	五〇〇三	九七六	〇四五	一三一八	六六〇六一	八九〇	低度瀝青炭	
三三〇	三七二二	五六〇五	四四四	〇七二	一一二八	—	—	—	同	

奈井江、美唄	幾春別	幌內	夕張	穂別
三二五	二八一	四八七	二二八	五三一
三九四九	四五二九	四〇四一	四二二〇	四二二二
四七九〇	四六四〇	四八四三	五〇四一	四〇九七
九三六	五五一	六二九	六一一	一一四〇
〇三八	〇二七	〇四三	〇四四	〇三三
一一三三五	一一三三五	一一三一四	一一二八四	一一三二二
七〇二四	—	六八一五	七三七一	—
二二六四三	—	二二六七同	二二六八同	—
同	同	同	同	同

炭量 本炭田ハ本邦ニ於ケル最モ重要ナル炭田ノ一ニシテ其炭量大ナルモノアリ、炭田ノ地質構造ハ甚タ複雑ナルヲ以テ隨テ炭量ヲ概算スルニハ精密ナル地質調査ヲ要スヘキモ該調査ハ未タ施行セラル、ニ至ラス、以下舉クルトコロノ炭量ハ炭層ノ厚サ及其賦存ノ區域ヲ局限シテ概算セルモノナルヲ以テ調査ノ進行スルニ從ヒ炭量増加スルニ至ルモノアラン、而シテ第一種炭量ニ對シテハ試錐又ハ其他ノ方法ニ依リテ其賦存ノ區域ヲ確定シ其然ラサル場合ニ於テハ安全ヲ計リ厚層ニ限リ地下五百尺迄ヲ計算シタリ、之ニ依リ得タル炭量ハ次ノ如シ

地	名		第一種 (單位百噸)	第二種 (單位百噸)
	別	別		
蘆	別	別	八六五	九六七〇
歌	志	內	五四〇	一〇九五
奈	井	美	二四三	一五一五
幾	春	別	二〇一	四九二
幌	內	張	三〇二	一五二七
夕	張	別	八六五	三四六〇
穗	別	計	三〇一六	一七九六九

(一) 蘆別炭田

蘆別炭田ハ美唄山脈ノ北東ニアリテ空知川及其支流蘆別川ニ沿ヒ南北ノ延長約二十二基米、東西幅約十六基米ナリ、炭田ノ中部ニ空知川ノ狹長ナル平野アリテ炭層ヲ二分ス、其南北ニ於ケル炭層相互ノ關係明

ナラスシテ之ヲ追跡スルヲ得サルモノアリ、數多ノ炭層ハ之ヲ上、中、下ノ三群ニ區別スルヲ得ヘシ、而シテ本炭田ニハ未タ稼行セル炭坑ナシ下部炭層群ハ北西隅ニアリテ伸長セル半穹窿狀ヲナシ白堊紀層ノ東側ニ沿ヒ南方ニ連續シ蘆別川ニ達ス、層向ハ白堊紀層及第三紀層ノ境界ニ殆ント平行ス、傾斜ハ約東方四五度ニ傾斜スルモ北部ニ於テハ地層半穹窿狀ヲナシ傾斜角亦一般ニ四五度ナリ、斷層ハ穹窿狀ノ頂部ニ殊ニ多ク南端ニハ地層甚シク擾亂シ炭質寧ロ劣等トナレリ、空知川附近ニハ炭層甚タ多ク川ノ南部ニ於テ十七炭層、北部ニ於テ八炭層ヲ檢セルモ南方ニハ悉ク之ヲ見ルヲ得スシテ其數減少シ南部ニ於テハ唯六炭層ノ重要ナルモノアルノミ、空知川ノ北方ニアル炭層ハ河流ニ依リ切斷セラレ川ノ南方ニハ之ヲ追跡スルヲ得ス、炭層ノ延長ハ平均四千五百尺乃至一萬三千尺ナリトシ、各炭層ノ平均厚サハ三尺五寸乃至十三尺ニシテ總厚ハ炭田ノ北部ニ於テ百七十尺、南部ニ於テ二十九尺ナリトス

中部炭層群ハ略南北ニ走り空知川ニ依リ切斷セラレ其兩側ニ於ケル相互ノ關係ハ未タ明ナラス、炭層ハ又屢斷層ニ依リ切斷セラル、川ノ南部ニ於テハ傾斜ハ東方ニシテ傾斜角ハ北方ニハ十度乃至二十度ナレトモ南方ニハ急ナリ、十一炭層アリテ七層ハ之ヲ追跡スルヲ得ヘキモ四層ハ唯露頭ニ於テ之ヲ檢スルノミ、厚サハ三尺乃至十二尺ニシテ總厚五十尺ナリ、川ノ北部ニ於テハ炭層ハ北五度乃至三十度西ニ走り東方五十度乃至七十五度ニ傾斜ス、其北端ハ明ナラスシテ一部ハ縮迫シ一部ハ土壤ニ依リ被覆セラレタルカ如シ、五炭層アリテ三千五百尺乃至六千尺ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘク厚サハ三尺乃至十一尺ニシテ總厚三十尺ナリ

上部炭層群ハ白堊紀層ノ東部境界線ニ殆ント并走シ北方ニハ半圓形ヲナシ南方ニハ南北ニ走レリ、川ノ北部ニ於テ北方ニハ層向東西ニシテ北方二十度乃至二十五度ニ傾斜スルモ南方ニハ次第ニ彎曲ス、然レトモ中部ニ於テハ地層甚シク擾亂シ褶曲斷層多クシテ之ヲ追跡スル

ニ難シ、南方ニハ層向西方ニ轉シ再ヒ約東西ニ走レリ、傾斜ノ角度ハ甚タ區々ナルモ概シテ三十度ナリ、數多ノ炭層アルモ七層ハ主要ナルモノニシテ北方ニハ縮迫スルカ如シ、各炭層ノ平均厚サハ五尺乃至八尺ニシテ總厚四十四尺ナリ、川ノ南部ニ於テハ層向ハ略蘆別川ニ平行シ北方ニハ北東、中部、及南部ニハ南北ニシテ傾斜ハ東方三十度乃至五十度ナリトス、數多ノ斷層中二斷層ハ炭層ヲ切斷シテ西方ニ轉位セリ、主要ナル炭層ハ六層ニシテ厚サハ五尺乃至十尺、總厚三十六尺ナリトス、以上炭層ノ外厚サ二尺五寸以上ノ炭層ノ露頭數多アレトモ其連續明ナラス、而シテ此等ノ炭層ハ前記計算中ニ之ヲ算入セス

(二) 歌志内炭田

歌志内炭田ハ美唄山脈西側ノ北部ニアリテ空知、白威、歌神、中村、文珠ノ五炭坑茲ニ稼行シ就中空知炭坑ヲ最大ナリトシ本炭田ノ總產出額ノ三分ノ二以上ヲ產出ス、即チ明治四十二年ニハ三十一萬二千三百三十噸、同四十三年ニハ二十萬四千四百五十五噸、同四十四年ニハ十五萬千

百九十三噸ヲ產出セリ

本炭田ニハ石狩川ノ二支流「ペンケ」歌志内川及「バンケ」歌志内川約東方ヨリ西方ニ流下シ其間ニ低卑ナル山嶽アリ、最高約四百米ナリトス、含炭層ハ主ニ第三紀下部層ニ屬スル砂岩、頁岩ヨリ成リ變岩及泥灰岩ヲ挾メリ、石狩炭田中本炭田ハ最モ地層ノ擾亂セラレタル部分ニシテ數多ノ褶曲及斷層アリテ構造最モ複雑シ地層ノ層位ヲ定ムルコト容易ナラス、褶曲軸ハ一般ニ南北ナルカ如ク斷層亦多ク南北ニ走レルカ如シ、炭層ハ本炭田ニ於テ最モ好ク發達シ薄キ炭層ヲ數フレハ其數二百ニ達スヘク二尺以上ノ炭層三十以上ヲ追跡スルヲ得ヘシ、炭層ノ厚サハ甚タ區々ニシテ薄キ炭層モ短距離ニ於テ直ニ厚層トナルコト屢ナリ、炭層ハ一ニ場合ヲ除ケハ多少ノ夾ミヲ有ス、炭層ノ厚サ最大ナルモノハ四十尺ニ達ス、傾斜ノ角度ハ區々ニシテ時ニ急斜シ時ニ緩斜スルモ一般ニ四五十度ナリトス

本炭田ニハ下部及中部炭層群アルノミニシテ上部炭層群ニ該當スヘ

キモノナシ、下部及中部炭層群ハ南方ニハ甚タ相接近シテ其距離僅ニ六七百尺ニ減シ兩者ヲ區別スルニ難シ、而シテ空知及白威兩炭坑ニ於テハ下部炭層群ヲ中村及文珠兩炭坑ニ於テハ中部炭層群ヲ稼行ス、下部炭層群ト思惟スヘキモノハ褶曲及斷層ノ爲メ同一ノ炭層數度現出スルモ厚サ三尺以上ノ炭層三十一層ヲ數フヘク其總厚ハ約百七十尺ニ達ス、中部炭層群ト思惟スヘキモノハ空知川沿岸ニ露出シ南方ニ連續スルモ斷層ニ切斷セラレ又ハ褶曲シ地層擾亂ス、北部ニハ炭層十一アリ、南部ニハ其數尙多キカ如ク下部及中部炭層群ノ區別甚タ明ナラス、厚サハ區々ニシテ平均二尺乃至十七尺、總厚北部ニ四十七尺、南部ニ百尺以上ナリトス

(三) 奈井江、美唄炭田

奈井江、美唄炭田ハ延長南北十七基米、東西約八基米ノ狹長ナル區域ヲ占メ奈井江川、奈井川及美唄川本區域ヲ西流シ波狀ノ臺地ヲナス、奈井江炭坑ハ本炭田中唯一ノ稼行炭山ニシテ明治四十三年ニハ一萬七千

二百五十五噸、同四十四年ニハ一萬四千五十噸ヲ產出セリ、地質ハ歌志内ニ於ケルト同シキモ地質構造ハ之ニ比シ簡單ナリ、而モ小褶曲ノ外數多ノ大斷層アリテ炭層相互ノ關係ヲ知ルコト難シ、層向ハ一般ニ南北又ハ北々西ニシテ西方ニ急斜ス、一般ニ傾斜角ハ六十度ナルモ白堊紀層ニ接近スル部分ハ北東ニ轉シ傾斜ハ寧ろ緩ニシテ北西二十五度乃至三十五度ナリトス、數多ノ炭層ハ炭田ノ東部及西部ニアリ、歌志内炭田ニ於ケル炭層ハ一部分ハ南方ニ縮迫スルカ如ク該炭田ニ於ケル炭層ノ一部分ノミ本炭田ニ於テ之ヲ追跡スルヲ得、且ツ該炭田ニ於ケル二炭層群ハ相接近シテ本炭田ニ於テハ之ヲ區別スルコト能ハス、東部ニ於テハ良質ノ石炭ヨリ成レル十七炭層、西部ニハ四炭層アリ、東部ニ於ケル各炭層ノ平均厚サハ二尺五寸乃至十八尺ニシテ總厚四十七尺ナルモ最モ厚キトキハ百尺以上ニ達シ薄キトキハ二十五尺ニ縮迫ス、奈井江炭坑ハ石狩平野ニ近ク奈井江停車場ヨリ二基米ノ地ニアリテ交通不便ナラス、本炭坑ニ於ケル炭層ハ上部ニアルモノ、如ク狹長

ナル半穹窿狀ヲナス、層向ハ一般ニ南北ニシテ傾斜ノ角度ハ六十度ナリ、炭層ノ露頭甚タ多キモ重要ナルモノハ三層ニシテ總厚十四尺ナリ、石狩平野ニ近キ北西隅ニ於テハ炭層ノ露頭數多アリ、内一層ハ十尺乃至十六尺ノ厚サヲ有シ重要ナリトス
美唄川ノ中流沿岸ニハ數多ノ炭層ノ露出アリ、内二層ハ之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、東方ニ於ケルモノハ波狀ヲ呈シ北方ニハ西方十度ニ、南方ニハ東南東二十度ニ傾斜シ一層ハ西方二十度ニ傾斜ス、平均厚サハ六尺及五尺ナリトス

(四) 幾春別炭田

幾春別炭田ハ幾春別川ノ北部ニアリテ東西約十五基米、南北八基米ノ地域ヲ占メ幾春別、奔別及三笠ノ三炭坑ヲ包括ス、幾春別及奔別兩炭坑ハ明治四十四年ニ五萬噸以上ヲ產出セリ、即チ次ノ如シ

地	名	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
奔別		六九〇一四噸	八七三〇噸	一〇六五四噸

幾春別川及美唄川間ノ山脈ハ殆ント炭田ノ中部ヲ東西ニ走り中央ニ最モ高シ、厚キ砂岩及頁岩ノ互層ハ整合ニ白堊紀層ヲ被覆ス、白堊紀層ハ北東部ニ露出シ斷層ニ依リ界セラル、其南方ニアル第三紀層ハ甚タ擾亂スルモ南方ニ開口セル半穹窿狀構造ヲナス、奔別川附近ニ數多ノ斷層アリテ炭層ハ爲メニ切斷セラレ、層向ハ北十度乃至三十度東ニシテ其東翼ハ急斜スルモ西翼ハ寧ろ緩斜セリ、峯延山脈ヲ圍繞セル炭層ハ約東北ニ長キ二箇ノ盆地狀ヲナス、層向ハ東西ヨリ北七十度東ノ間ニアリテ一般ニ三十度ノ角度ヲ以テ傾斜ス

本炭田ニ於テハ炭層ノ數再ヒ多ク厚サ亦増大セルモ歌志内炭田ニ於ケルヨリハ寡少ナリ、八炭層ハ白堊紀層ノ境界ニ殆ント并行シテ南方ニ走り西方六十度乃至七十五度ノ傾斜ヲナセリ、各炭層ノ平均厚サハ三尺乃至八尺ナルモ主ニ四五尺トシ總厚三十五尺ナリ、炭層ハ幾春別ノ南ヨリ北々東ニ走り傾斜ハ東北東ニ急ニシテ六十度時ニ直立ス

峯延山脈ニ沿ヒ二ノ盆地狀ヲナセル炭層ハ其數甚タ多キモ各二三層ヲ重要ナリトシ稼行スルヲ得ヘシ、外部ノ盆地狀ヲナセル下部炭層ハ東西ノ方向ニ甚タ長ク南翼ハ地層擾亂ス、傾斜ノ角度ハ北翼ニ緩ニシテ十五度乃至二十度ナルモ南翼ニハ之ヨリ急ニシテ二十五度ニ達ス、北翼ニハ東部ニ數多ノ斷層アリ、炭層ノ總厚ハ隨所異ニシテ十尺乃至十三尺ナリトス、南翼ニ於テハ炭層ノ總厚ハ十二尺ニシテ嘗テ峯延炭坑ニヨリ稼行セラレタリ、更ニ南方ニ重要ナル二炭層アリテ厚サ各六尺ヲ有シ約東西ニ走り南方三十五度ニ傾斜ス、本層ハ北部ニ一ノ背斜層ヲナスカ如キモ共ニ斷層ニ依リ切斷セラレ兩端亦斷層ニ依リ切斷セラレ、三笠炭坑ハ現ニ茲ニ操業ス、山脈ノ頂部ニ近キ小盆地ニハ九炭層アリ、内二層ハ約三尺ノ厚サヲ有ス、傾斜ノ角度ハ約二十五度ナリ

(五) 幌内炭田

幌内炭田ハ幾春別川ノ南部ニアリテ南北約十六基米、東西約十三基米ノ面積ヲ占メ幌内、幌向及萬字ノ三炭坑ヲ包括ス、幌内炭坑ハ一年五萬

噸以上ヲ產出セリ、即チ明治四十二年ニハ十九萬六千七百七十六噸、同四十三年ニハ十七萬四千五百八十四噸、同四十四年ニハ十五萬五千五百八十四噸ヲ產出セリ

本炭田ノ東部ニハ白堊紀ノ山脊南方ニ岬角ノ如ク突出シ之ヲ被覆シテ第三紀層アリ、東方六十度ニ傾斜ス、南部ニハ白堊紀層稍大ナル面積ヲ占ム、之ヲ圍繞セル第三紀層ハ二十度乃至三十度ノ角度ヲ以テ傾斜ス、東部白堊紀層ニ接セル數多ノ炭層ハ幾春別炭田ニ於ケル炭層ノ連續セルモノト思惟スヘキモノナリ、内八層ハ之ヲ追跡スルヲ得ヘキモ南方ニハ甚シク擾亂シ或ハ併合シ或ハ縮迫シテ其數減少ス、更ニ南方ニハ白堊紀層トノ境界ニ沿ヒ炭層ハ東方ニ彎曲シ其數再ヒ増加ス、茲ニハ地質構造甚タ複雑ニシテ一條ノ背斜層アリ、其西翼ハ尙約南北ノ方向ヲ持續シ幌向川ニ達シテ褶曲シ且ツ斷層ニ會ス、東翼ハ東方ニ彎曲セル後再ヒ白堊紀層トノ境界ニ沿ヒ北方ニ向ヒ遂ニ斷層ニ依リ切斷セラル、茲ニハ唯二ノ重要ナル炭層アルノミ、白堊紀層ノ西ニ南北ニ

走レル各炭層ノ平均厚サハ二尺乃至八尺ニシテ總厚ハ北部ニハ二十四尺、南部ニハ十二尺ナリトス

幌内炭坑ハ鐵道ニ依リ連續セラレ北海道ニ於テハ最初ニ開發セラレタル茅沼炭田ニ次テ開坑セラレタリ、炭層十四アリ、内五炭層ハ探掘セラル、モノニシテ厚サ二尺五寸以上ヲ有シ伸長セル穹窿狀構造ヲナス、其長軸ノ方向ハ北五十度東ニシテ延長四基米ナリ、傾斜ノ角度ハ北西翼ニ緩ニシテ十五度乃至四十度ナルモ南東翼ニ急ニシテ五十度乃至八十度ナリトス、而シテ南西部ハ斷層ニ依リ切斷セラレテ其以西ハ未タ明ナラス、本炭層ハ既述セル炭層ノ下部ニ位スルカ如ク炭層ノ總厚ハ二十尺ナリ

幌向川ノ南方ニハ炭層ハ白堊紀層ノ境界ニ沿ヒ露出ス、幌向川ニ沿ヒ重要ナル四炭層南方ニ走リ東方二十度ニ傾斜シ一タヒ斷層ニ切斷セラル、南方ニハ炭層ハ東南東ニ走リ北々西二十三十度ニ傾斜シ萬字炭坑ノ北ニ至リ白堊紀層ノ境界ニ沿ヒ再ヒ南方ニ彎曲ス、數多ノ炭層中西

方ニ於テハ六炭層ハ稼行スヘク總厚十七尺アルモ東方ニハ其數減シ萬字炭坑ニ於テハ厚サ三尺及五尺ノ二炭層ヲ稼行ス
 幌向炭坑ハ幌向川支流ノ北岸ニアリ、石炭ノ露頭數多アリ、内四炭層ハ之ヲ追跡スルヲ得ヘク南北ニ長キ小穹窿狀ヲナシ延長二千尺ナリ、傾斜ノ角度ハ急ナリ、四炭層ノ總厚ハ十三尺ナリトス
 白聖紀層岬角ノ北東及東方ニ於テハ三炭層群殆ント並走シ北翼ニハ南方ニ、西翼ニハ東方ニ傾斜ス、數多ノ炭層中重要ナルモノハ二層ナリトス、中部炭層群ハ既述セル西部即チ下部炭層群ノ上約千五百尺乃至二千尺、上部炭層ハ中部炭層群ノ上約二百五十尺ニアリト云フ、傾斜ノ角度ハ一般ニ五十度ナリトス、各炭層群ノ總厚ハ十一尺ナリ

(六) 夕張炭田

夕張炭田ハ幌内炭田ノ南方ニ隣接シ延長二十六基米、幅十基米ノ面積ヲ占メ鐵道ニ依リ連絡セラレ夕張川ニ依リ二分セラル、本炭田ハ北海道中最モ活潑ニ採掘セララル、所ニシテ明治四十四年五萬噸以上ノ產

出アル炭山ハ次ノ如シ

地名	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
夕張第一坑	五〇九、六〇五	四七一、三七一	五六六、一六八
夕張第二坑	一三九、七一〇	一二八、六七八	一四八、二〇三
新夕張第一坑	一三〇、三七三	一一九、〇七一	一二八、二二六
新夕張第二坑	二五、九七四	三四、八一六	六一、八〇四

夕張川ノ北部ニハ二炭層群東部及西部ニアルモ南部ニハ相接近シ一部ハ縮迫ス

夕張川北部區域 東部ニハ高サ約七百米ノ一山脈南北ニ走り炭層ハ其兩側ニ之ヲ追跡スルヲ得、地層ハ頁岩及砂岩ニシテ蠻岩ヲ挟ミ一般ニ南北ニ走り東方三十度乃至六十度ニ傾斜スルモ北部ニハ數多ノ斷層アリテ主要ナル炭層ハ之ヲ追跡スルヲ得サルニ至リ南部ニハ炭層ハ小斷層ノ外一大斷層ニ依リ東方ニ轉位シ北二十度西ニ走り東北東

四十度ニ傾斜ス、數多ノ既知炭層ハ之ヲ三群ニ區別ス、下部二炭層群ハ山脈ノ東方ニアリテ白堊紀層ニ接近シ厚サ二十尺乃至四十尺ノ蠻岩兩者ノ間ニ介在ス、炭層ノ厚サハ區々ニシテ之ヲ追跡スルコト難キモ蠻岩ニヨリ略其層位ヲ知ルヲ得ヘシ、上部炭層群ニハ三層、中部炭層群ニハ二層アリテ厚サハ最厚十三尺ニシテ總厚六尺五寸ナリ、下部炭層群ニハ二層ノ西方ニアリテ最モ重要ニシテ大夕張炭坑ノ稼行スル所タリ、之ヲ上下ノ二ニ區別ス、東方ニ於ケルモノハ西方ニ於ケルモノヨリ三四百尺ノ高所ニアリテ主ニ二炭層ヨリ成リ厚サ四尺五寸及九尺總厚十二尺ナリ、西部ニアルモノハ南部ニハ九炭層アルモ小距離ニ於テ膨大若クハ縮迫シ其最モ厚キモノハ三十尺ニ達スルモ總厚十五尺ナリトス

西部ニハ白堊紀層ハ北端ヲ限リ其外、ボンボロカベツ川ニ小區域ニ露出ス、夕張第一坑、新夕張第一坑及第二坑ハ茲ニ操業シ鐵道ニ依リ連絡ス、北部即チ白堊紀層附近ニハ層向ハ約東西ナルモ南方ニハ北西ニ彎

曲シ北東三十度ニ傾斜ス、斷層ノ爲メ炭層ハ再ヒ北東ニ轉シ南東二十五度ニ傾斜ス、斷層ハ殊ニ中部即チ新夕張第一坑附近ニ最モ多クシテ地層ハ甚シク擾亂ス、而シテ此地ヨリ一大斷層遙ニ南方ニ走リ炭層ハ再ヒ北西ニ轉シ北東三十度ニ傾斜ス、シイボロカベツ川本流附近ニハ一背斜層南方ニ走レルカ如シ、南方夕張川ニ近ク炭層ハ一大斷層ニ依リ切斷セラレ東方ニ轉位セリ

夕張第一坑ニ於ケル主要炭層ハ厚サ二十四尺ニシテ其上部百八十尺、下部二百八十尺ニ厚サ各約四尺ノ一炭層アリ、是等炭層ハ隨所變動ヲ受ケ甚タ擾亂スト雖モ南北ニ之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、西方ニアル、エキモアンル、川ニ露出スル一炭層ハ南北ニ走リ南方ニハ東方ニ彎曲シ主要炭層ニ該當スルカ如シ、茲ニハ上層及下層ヲ見ス、新夕張第一坑ニ於テハ地層甚シク擾亂スルモ厚サ六尺、八尺及十尺ノ三炭層稼行セラレ一背斜層ヲナシ一斷層本區域ノ略中部ヲ通過ス、以上炭層ハ主要炭層ニ該當スルモノ、如ク即チ主要炭層ハ南部ニハ厚キ夾ミニ依リ分

離セラレ北部ニハ夾ミ甚タ薄シ、上部及下部炭層ハ南部ニハ厚サ六尺及二尺五寸ナリ

夕張川南部區域ニハ夕張川ノ二支流真谷川、クルキ川西流シ夕張第二坑ニ屬スル真谷地、楓及登川ノ炭坑稼行シ鐵道又ハ輕便鐵道ニ依リテ連絡ス

稼行炭層ハ楓ニ於テ三層、真谷地ニ於テハ六層アリ、厚サハ三尺乃至二十五尺ニシテ時ニ六十尺ニ達ス、地層ハ頁岩、砂岩及疊岩ヨリ成リ南北ニ走レルモ西方ニハ北西ニ彎曲ス

夕張川北部區域ノ炭層ハ本區域ニ於テ互ニ相接近スルモ尙東部及西部炭層群ニ分ツヲ得ヘシ、東部炭層群ニハ主要ナル炭層六層アリテ厚サ三尺乃至十五尺アリ、然レトモ或ハ膨大シ或ハ縮小シ或ハ數多ノ薄層ニ分岐シ或ハ併合ス、其總厚ハ十九尺ヲ下ラス

中部即チ「バンク」真谷川ニ西部炭層群ニ屬スル四炭層露出シ楓ニ連續シ更ニ南方ニ連レルカ如ク一ノ向斜層ヲナス、傾斜ノ角度ハ東翼ニハ

寧ロ緩ニシテ西翼ニハ稍急ニ四十度ヨリ時ニ直立スルニ至ル、上部炭層ハ最モ厚クシテ「バンク」真谷川ニ於テハ炭層ハ炭質頁岩ノ夾ミ(厚サ十五尺)ト共ニ厚サ三十二尺アリ、真谷地炭坑ノ坑内ニ於テハ夾ミハ全ク石炭ニ變シ稼行スヘキ炭層ノ厚サ四十尺アリ、他ノ三炭層ハ上部ヨリ之ヲ數フレハ厚サ八尺、九尺及二尺ナリトシ總厚三十尺ナリト云フ

(七) 穂別炭田

穂別炭田ハ膽振ノ北部ニアル鶴川ノ一支流穂別川ノ支流ニ沿ヒ不便ノ地ニアリ、本炭田ハ北部夕張炭田ニ隣接シ數多ノ炭層アリト稱セラ

ル、モ厚キ土壤ニ被覆セラレテ明ナラス、五炭層アリテ第三紀層ノ下部ニ挾在スルモ品質及厚サニ於テ稼行ニ堪ユヘキモノハ二層ナリトス、東部ニ於ケルモノハ厚サ三尺乃至十尺平均六尺以上アリテ西方六十度乃至八十度ニ傾斜シ約三基米間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、西部ニアルモノハ厚サ平均六尺以上アリテ約南北ニ走リ西方七八十度ニ急斜シ約四基米間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、其他二尺ノ炭層アルモ其連續明

ナラス
 鵝川ニ露出セル二炭層ハ厚サ八尺アリテ北三十度東ニ走リ西北西八十度ニ急斜ス、其北西約二十基米鵝川ノ一支流ニニユ一川ニ沿ヒ厚サ二尺五寸乃至三尺ノ二炭層アルモ其延長明ナラス

茅沼炭田

茅沼炭田(第七圖參照)ハ後志茅沼ニアリテ岩内ノ北十基米海岸ヨリ約三基米ノ地ニ位シ海岸ヨリ輕便鐵道ノ布設アリ、石炭ハ安政三年ニ發見セラレ小規模ニ稼行セラレタリト云ヒ明治維新ノ戰爭ニ際シ一時採掘ヲ中止シタルモ一年後政府之ヲ再開シ明治十六年民業ニ移レリ、產出額ハ小ニシテ明治四十三年ニハ一萬五千七百七十九噸、同四十四年ニハ二萬三千三百九十一噸ナリトス、地ハ高サ二三百米ノ丘陵地ニシテ海岸ニ近キ高サ約二十米ノ階段地ニ終レリ、茅沼川ハ北東ヨリ南西ニ流下シ本炭田ヲ二分ス、含炭層ハ凝灰岩、頁岩、砂岩及凝灰燧岩ヨリ成リ玢岩及石英粗面岩之ヲ貫通ス、地層ハ擾亂セラレ斷層數多アルモ一

般ノ層向ハ約南北ニシテ西方三十五度乃至四十度ニ傾斜ス、而シテ南端ニハ地層ハ東方ニ彎曲シテ北七十度西ニ走リ南々西四十度ニ傾斜

第七圖 茅沼炭田
 縮尺五萬分之一



ス、六炭層アリテ三基米以上之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、現時岩内及藤山兩炭坑稼行ス、炭層ハ中部ニ最モ好ク發達シ兩側ニ次第ニ縮迫ス、各炭層ノ平均厚サハ上部ヨリ數フレハ四尺、七尺、六尺、六尺、四尺及五尺ニシテ良炭部二尺五寸、四尺、三尺、五尺、三尺及三尺ナリ、第三炭層及第五炭層ハ厚サ薄ク品質劣等ナルヲ以テ稼行セス、本炭田ニ於ケル水準以上ノ炭層ハ既ニ殆ント採掘シ盡サレ餘ストコロ僅ニ十七萬餘噸ニ過キス、試鑛等ノ未タ炭層ヲ檢セルモノナシ炭層賦

存ノ區域ヲ確ムルヲ得サントモ水準下千尺迄ハ之ヲ稼行スルヲ得ヘク更ニ水準下千尺ハ第二種炭量トシテ之ヲ計算セリ、即チ第一種炭量ハ七百萬噸、第二種炭量二千五百萬噸ナリ
 石炭ハ黑色ニシテ光輝ヲ有シ介殼狀ニ破碎ス、地層擾亂ノ結果石炭ノ粉碎セル所アリ、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	比	重	種	類
四、五三	三五、六九	四七、二九	一一、四九	一、三三八	低度	瀝青炭	

雨龍留萌炭田

雨龍留萌炭田(第八圖參照)ハ留萌ノ東ニアリテ石狩、天鹽兩國ノ境界ニ跨レリ、本炭田ハ波狀ノ丘陵山脈ニシテ主要山脈ハ北々東ニ走り高サ平均四五百米ナリ、炭田ノ北部ニ「オビラウシベツ」川、南部ニ「ル、モッベ」川、東部ニ「ボロニタチベツ」川アリ
 白堊紀層ハ炭田ノ北東部ヲ占メ主ニ頁岩ヨリ成リ砂岩、蠻岩ト互層ス、

第三紀層ハ上下ノ二部ニ區別ス、下部層ハ廣域ヲ占メ厚サ八千尺以上アリテ整合ニ白堊紀層ヲ被覆セルカ如キモ上部層トハ不整合ナリトス、下部層ハ更ニ之ヲ上下ノ二層ニ區別ス、下層ハ砂岩、頁岩ノ互層ニシテ蠻岩及主要炭層ヲ挟ミ其最モ好ク發達セル處ノ露頭ニ於テ之ヲ見ルニ厚サ約五千尺アリ、動植物化石アルモ其地質年代ヲ定ムルニ足ラス、蓋シ中新期ニ屬スルカ如シ、上層ハ主ニ頁岩ヨリ成リ砂岩ト互層ス、本層ニ介在セル炭層ハ皆薄クシテ重要ナラス、上部層ハ下部層ノ南北ニアリテ更ニ之ヲ上下ノ二層ニ區別ス、下層ハ北部ニアリテ頁岩及砂岩ヨリ成リ數多ノ蠻岩層ヲ挟ミ上層ハ南部ニアリ、其岩質ハ下層ト同シキモ一般ニ凝灰質ナリ、上層中ニ埋藏セラル、炭層ハ唯僅ニ留萌附近ニ稼行セラル、ノミニシテ下部層下部ニ於ケルモノニ比スレハ重要ナラス、化石ハ識別セラレタルモノ甚タ少ナキモ蓋シ鮮新期ニ屬スヘシト云フ、塔段堆積層ハ河流ニ沿ヒ狹長ナル區域ヲ占メ主ニ砂礫層ヨリ成リ砂層及粘土層ト互層ス、蛇紋岩ハ僅ニ東部ニ之ヲ見ルノミニ

サル露頭ハ其數甚タ多キモ其延長明ナラス、留萌附近ニアル炭層ハ上部層ニ埋藏セラレ一層ハ稼行ニ堪ユ、石炭ハ有煙炭ニシテ一般ニ粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	比	重	發熱		種
								カロリー	英國熱單位	
五九一	四〇三八	四六六一	七一〇	〇	四七	一	三二二	六五二三	一一七二三	低度瀝青炭

「ボロニタチベツ」川上流區域ハ石狩、天鹽ノ國境ニ跨リテ炭田ノ東部ヲ含ム、本區域ニハ未タ開墾地ナク南方二十基米ニハ留萌ニ通スル鐵道通過スト雖モ現時ハ甚タ不便ナリ、含炭第三紀層ハ北部ニ整合ニ白堊紀層ヲ被覆シ高サ四五百米ノ稍高キ高原ヲナス、一ノ背斜軸ハ區域ノ中部ヲ約南北ニ走リ其東西ニ殆ント之ニ并行シテ各一向斜層アリ、數多ノ斷層中三條ヲ大ナリトシ内西部ノ大斷層ハ背斜軸ニ該當スルカ如シ、二ノ背斜軸ニ依リ限ラレタル中部區ハ最重要ニシテ十炭層ヲ埋藏ス、内上部三炭層ノ層位上ノ關係明ナラス、傾斜ノ角度ハ向斜軸附

近ニハ四五十度ニシテ東ニアル背斜軸附近ニハ稍急ニ六七十度ナリ、炭層ノ厚サハ上部ヨリ之ヲ數フレハ平均二尺、三尺、六尺五寸、四尺五寸、五尺、六尺、七尺五寸、十四尺五寸、三尺及八尺ナリ、第六層及第九層ハ遙ニ東方ニ之ヲ追跡スルヲ得ヘク背斜軸ノ東部ニ連レリ、追跡シタル距離ハ上部ヨリ〇、三基米、〇、七基米、〇、三基米、一、五基米、二、六基米、四、七基米、二、五基米、二、六基米、三、八基米及二、五基米ナリ、向斜軸ノ直下ニ於ケル第六層ノ深サハ傾斜ニ依リ之ヲ計算スルニ海水準下約一千尺ナリ、中部區即チ背斜軸ノ東方ニハ三炭層アリ、下部炭層ハ中部ノ第五炭層ノ連續セルモノナルカ如シ、上部炭層ハ一般ニ東七十度ニ傾斜シ二基米間之ヲ追跡スルヲ得ヘク厚サハ平均二十五尺良炭部十九尺ナリ、中部炭層ハ僅ニ〇、五基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘク東方四十五度乃至七十五度ニ傾斜ス、斷層以西即チ中部區ノ西方ニハ六炭層アリテ一般ニ南々西七八十度ニ傾斜シ時ニ直立ス、炭層ノ平均厚サハ上部ヨリ三尺、十尺、七尺、八尺、三尺五寸及四尺ニシテ追跡セル延長ハ〇、二基米、一、五基米、一、

六基米、一、二基米、一、二基米及〇、九基米ナリ

「ボロニタチベツ」川中流區域ハ上流區域ノ南西ニ隣接ス、含炭層ハ一ノ背斜層及向斜層ヲナシ北々西ニ走レリ、傾斜ノ角度ハ區々ニシテ四十九度乃至七十度時ニ八十度ニ達ス、炭層ノ露頭ハ甚タ多キモ厚サ及炭質ニ於テ上流區域ニ比シ重要ナラス、十炭層中六層ハ北部ニ、四層ハ南部ニアリ、其相互ノ關係明ナラス、北部ニ於ケル炭層ノ平均厚サハ西部ヨリ之ヲ數フレハ八尺五寸、三尺五寸、三尺五寸、三尺五寸、十尺及六尺五寸ナリ、南部ニハ上部ヨリ之ヲ數フレハ四尺五寸、三尺五寸、八尺五寸及七尺ナリトス、北部ニ於テ追跡セル延長ハ三、四基米、〇、八基米、〇、八基米、〇、六基米、一、五基米及〇、五基米ニシテ南部ニアルモノハ一、八基米、一、三基米、一基米及〇、四基米ナリトス

「ル、モッベ」區域ハ中流區域ノ南西ニアリテ峠下停車場ヲ距ルコト約八基米ニシテ炭田中最モ便利ナル地域ニ位ス、地層ハ局部ニ於テ擾亂スト雖モ構造ハ寧ろ簡單ニシテ一ノ背斜軸ハ穹窿狀ヲナシ北部ヨリ南

部ニ走レリ、一斷層地層ヲ切斷シ北部ニ轉位セリ、五炭層中最下炭層ハ最モ重要ニシテ五基米間之ヲ追跡スルヲ得ヘク東方又ハ北東ニ傾斜ス、傾斜ノ角度ハ斷層ノ南部ニハ一般ニ五十度ニシテ北方ニハ之ヨリ急ナリ、厚サハ六尺乃至二十尺ニシテ平均十二尺ナリ、其他ノ四層ハ延長大ナラスシテ〇、二基米乃至〇、四基米ニ互レルノミ、厚サハ一般ニ三尺五寸ナリ

「オビラシユベツ」區域ハ炭田ノ北部ヲ占メ高サ三四百米ノ山地ヲナス、一大向斜層ハ本區域ヲ南北ニ通過シ一大斷層ハ北部ニ於テ東西ニ走レリ、四炭層ハ斷層ノ南部ニアリテ北々西ニ走レリ、炭層相互ノ關係ハ明ナラサレトモ一層ニアラサルヤノ疑アリ、向斜層ノ東方ニハ主要ナル炭層一アリ、其延長三、七基米、厚サ六尺ナリ、向斜層ノ西ニアルモノハ二三層ニ分岐シ平均厚サ十五尺ナリ、其他ノ二層ハ延長一基米及〇、六基米ニシテ厚サ三尺及六尺五寸ナリ

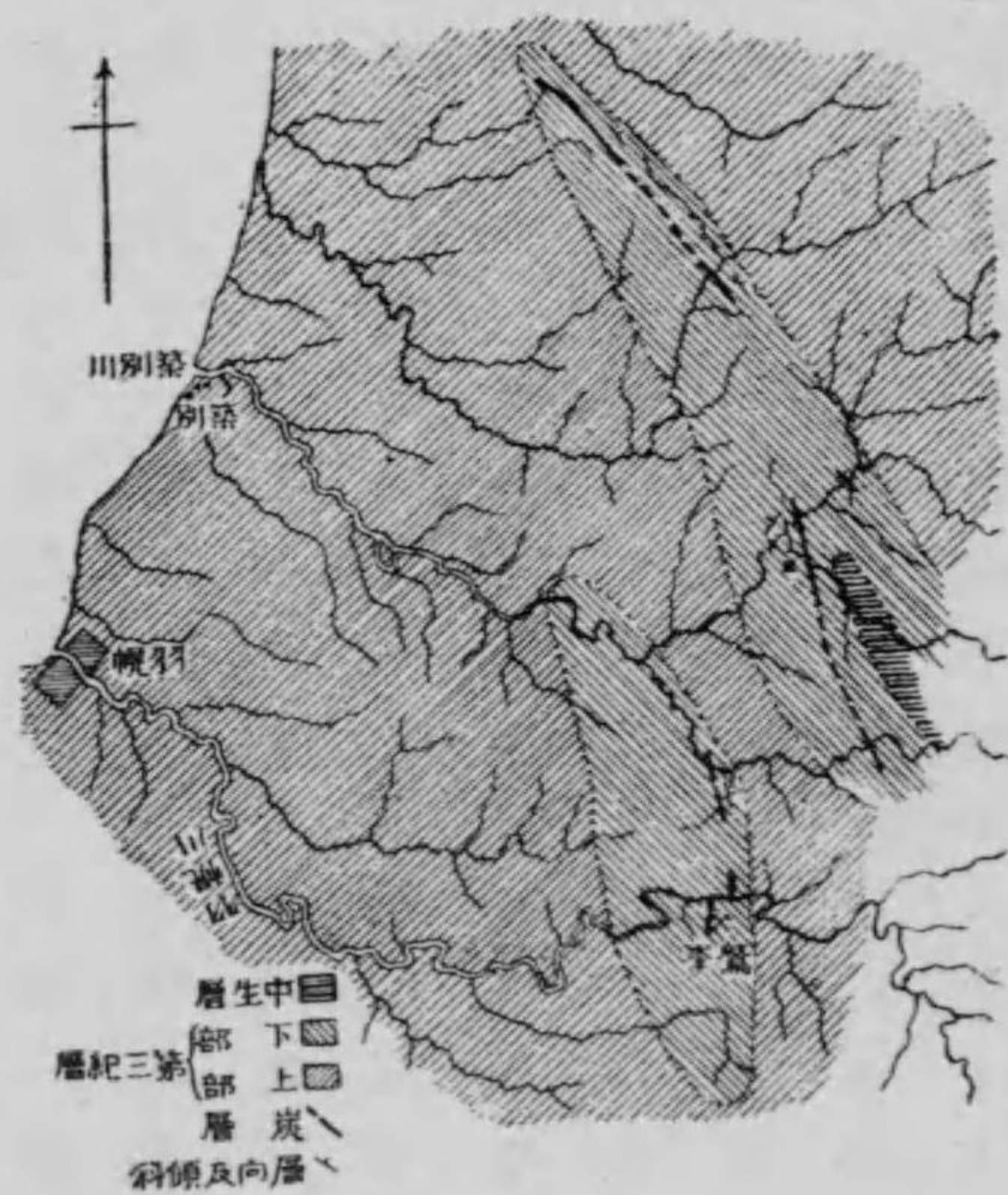
此外良好ナル石炭ノ露頭數多アルモ其延長詳ナラサルヲ以テ茲ニ之

ヲ舉ケス

留萌區域ハ留萌ノ南東四基米ノ地ニアリ、本區域ノ炭層ハ上部層ト思惟スヘキ地層中ニ介在スル唯一ノモノニシテ大和田炭坑之ヲ稼行ス、大和田炭坑ハ留萌ノ南東約六基米同名ノ停車場ノ附近ニアリテ小規模ニ稼行ス、地層ハ頁岩、砂岩ヨリ成リ疊岩ヲ挾メリ、現時稼行ノ一炭層ハ北六十度西ニ走リ北東三十度ニ傾斜シ厚サ平均五尺アリテ一基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、三斷層アリ、東方ニアルモノヲ大ナリトス、本炭田ニ於テハ試錐ニヨリ炭層ヲ檢セルコトナク留萌區域ヲ除ケハ未タ稼行セラレタルコトナキヲ以テ炭層賦存ノ區域ヲ知ルニ難シ、然レトモ炭層厚クシテ其數多ク地下五百尺迄ハ確實ニ其賦存セルモノト思惟シ之ヲ以テ第一種炭量ヲ概算セリ、但シ延長ハ追跡セルモノニ限レリ、斯クシテ概算シタル第一種炭量ハ千三百二十萬噸、第二種炭量ハ二億五千萬噸ナリトス

羽幌炭田

第九圖
羽幌炭田
縮尺三十分之一



羽幌炭田(第九圖參照)ハ天鹽ノ中部ニアリテ西海岸ニ沿ヘル羽幌、築別ノ東部ニ北々西ニ走レリ、含炭層ハ頁岩及砂岩ヨリ成リ時ニ白色ノ凝灰岩ヲ挾ミ第三紀下部層ニ屬スト云フ、地層ニハ局部ノ變動アレトモ一般ノ層向ハ北々西ニシテ二ノ背斜層ヲナシ兩翼ニ於ケル角度ハ三十度乃至六十度ナリ、東部背斜層ノ東翼ニアル炭層ハ北部ニ於テ之ヲ見ルノミニシテ南部ニハ薄シ、傾斜ハ東北東三十五度ナリトス、數炭層中三層ハ重要ニシテ厚サ一般ニ三尺ナルモ時ニ七尺ニ達シ約六基米間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、本層ハ嘗テ其北端ニ於テ稼行セラレタリ、西翼ニ於ケル炭層ハ南

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	比	重	發熱量	種類
一一、五一	三九、一九	四〇、三九	八、三一	〇、四七	一、三六一			カロリー 英國熱單位	種
								五、三七二	類
								九、六六九	黑褐炭

第三紀層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ廣域ヲ領ス、含炭層ハ主ニ砂岩及蠻岩ニシテ頁岩ヲ挾ミ第三紀下部層ニ該當ス、層向ハ約南北又ハ北々西ニシテ東又ハ西ニ傾斜シ一ノ向斜層及背斜層ヲナス、傾斜ノ角度ハ一般ニ四五十度ナルモ時ニ七八十度ニ急斜スルコトアリ、數多ノ斷層アリテ炭層ヲ切斷シ之ヲ東方又ハ西方ニ轉位ス、三大斷層東部ニアリ、西部ニハ四斷層ヲ大ナリトス

炭層ハ其數十層ヲ超エ一般ニ頁岩中ニ稀ニ砂岩中ニ介在ス、主要ナル六炭層ハ東部ニアリ、其南北ニ斷層ニ切斷セラレテヨリ僅ニ二三ノ炭層ヲ追跡スルヲ得ルノミ、厚サハ上部ヨリ之ヲ數フレハ三尺、七尺、八尺、六尺、五尺及七尺ニシテ延長ハ上部二炭層ハ一、五基米、第三炭層ハ一基米、下部三炭層ハ各半基米ナリトス、北部ニ於ケル三炭層ハ厚サ上部炭

層六尺五寸、下部二炭層ハ六尺ナリトシ、延長ハ五百尺乃至千五百尺ナリ、斷層ノ南部ニアル二炭層ハ厚サ二尺及四尺五寸ニシテ延長五六百尺ナリ、西部ニハ炭層ノ數少ナキモ東部ニ於ケルモノ、現出セルモノナルヘク中部ニ斷層ニ切斷セラル、斷層ノ北部ニハ炭層ハ約東方四五十度ニ傾斜スルモ西方ニ於ケル一炭層ハ北七十度ニ傾斜シ一向斜層ヲナセリ、是等炭層ハ北部ニ於テ再ヒ斷層ニ切斷セラル、炭層ハ別テ二群トス、東部炭層群ハ重要ナル二炭層、西部炭層群ハ三炭層ヲ有ス、東部ニ於ケル二炭層ノ厚サハ各四尺ニシテ延長一基米ヲ超ユ、西部炭層群ノ炭層ハ上部ヨリ之ヲ數フレハ厚サ四尺五寸、六尺及二尺、延長二、四基米、二、四基米及一、一基米ナリ、斷層ノ南部ニハ背斜層ノ東方ニ東北東四五十度ニ傾斜スル四炭層アリテ厚サ上部ヨリ之ヲ數フレハ三尺五寸、四尺五寸、五尺及二尺ニシテ延長四千尺乃至五千五百尺ナリ、背斜層ノ西方ニハ二炭層アリテ厚サ五尺及九尺五寸ナルモ延長僅ニ六百尺乃至千尺ナリ、之ニ依リ炭量ヲ概算セルニ一億七千五百萬噸ナリ

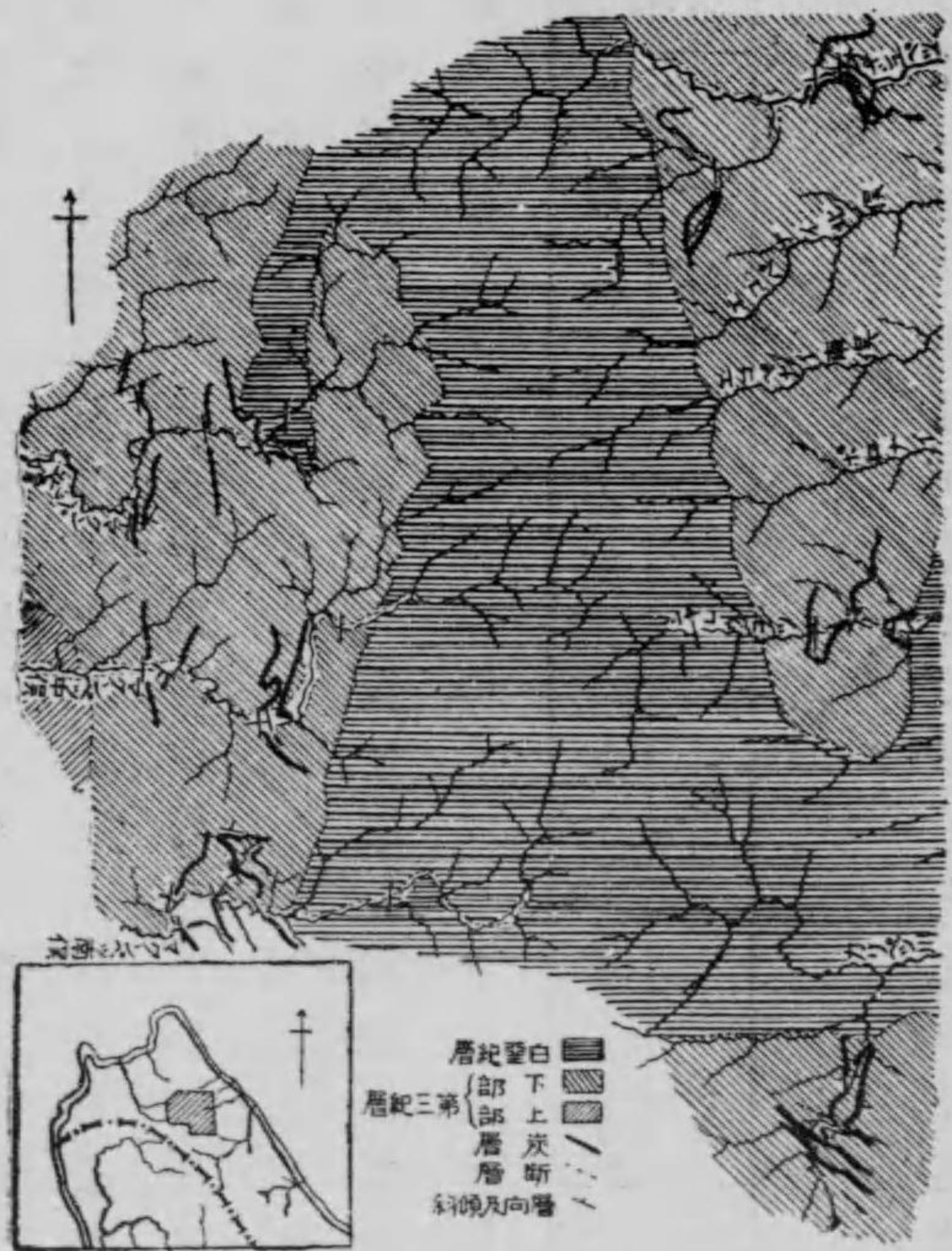
石炭ハ更ニ南方ニ石狩、天鹽ニ互レル第三紀ニ介在シ殊ニ天鹽川ノ支流及石狩雨龍川ノ上流ニ其露頭多シ、然レトモ既知炭層ハ厚サ一般ニ薄クシテ炭質劣等ナリ、又所ニ依リ十層以上ノ數多ノ炭層ヲ檢スルコトアルモ厚サ一般ニ薄シ、是等地方ノ第三紀層ハ調査未タ充分ナラス

宗谷炭田

宗谷炭田(第十一圖參照)ハ北海道ノ北ニ突出スル半島ノ中部ニアリテ天鹽、北見ノ二國ニ跨レリ、北海道ノ中央山脈ハ宗谷岬ニ低下シテ遂ニ宗谷海峽ニ没シ高サ一般ニ二三百米ノ波狀ノ臺地ヲナス、本炭田ニハ未タ開墾地ナク海岸ノ處々ニ人家アルノミニシテ交通容易ナラス、白堊紀層ハ頁岩、砂岩ヨリ成リ炭田ノ中部ニ南北ニ走レリ、第三紀層ハ白堊紀層ノ兩側ニアリテ不整合ニ之ヲ被覆シ上下ノ二部ニ區別ス、上部層ハ炭田ノ西部ニアリテ柔軟ナル砂岩、頁岩ヨリ成リ石炭ヲ埋藏セス、下部層ハ凝灰岩、頁岩、砂岩及巒岩ヨリ成リ東部ニ二炭層、西部ニ二炭層以上ヲ埋藏ス、層向ハ一般ニ南北ニシテ數條ノ背斜層及向斜層アリ、地

質上ヨリ之ヲ見ルニ本層ハ樺太及北海道ニ於ケル上部含炭層ニ該當スルカ如シ

第十圖 宗谷炭田 縮尺五十萬分一



白堊紀層ノ東部ニハ一二ノ背斜層アルモ南方ニハ一度白堊紀層ニ接シ再ヒ「カリベツ川」ニ露ハレ更ニ南方ニ連續ス、其總延長ハ二十五基米ナルモ北部及南部ハ未タ調査セラレス、白堊紀

層ノ北方ニハ二三ノ炭層アリテ約南北ニ走リ傾斜角ハ二十度乃至六十度ナリ、厚サハ甚タ區々ニシテ一般ニ上部炭層ハ四尺、下部炭層ハ七

尺ニシテ時ニ十尺以上ニ膨大ス、白堊紀層ノ南方ニハ地層ハ甚シク擾亂シ之ヲ追跡スルニ難キモ二層以上ノ炭層アリテ厚サ三尺乃至九尺ナリ、白堊紀層ノ西部ニハ炭層ハ更ニ南方ニ連續スルカ如ク既知區域ハ延長二十二基米、幅三基米ナリ、地層ハ甚シク擾亂セルモ一般ノ層向ハ南北ニシテ數條ノ背斜層及向斜層アリ、三四條ノ炭層アリテ厚サ二尺乃至五尺ナリトス

調査區域ハ其面積稍大ニシテ炭量概算約一億二千萬噸ナリト云フ、石炭ノ分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	比	重	種	類
一一.七五	四〇.四三	三六.〇〇	一〇.八二	〇.五五	一.三八	一.三八一	黑	褐	炭

釧路國

釧路ニハ釧路、舌辛及尺別ノ三炭田アリ、就中尺別炭田ハ西方日高二連レリ、地ハ高サ平均二百米以下ノ丘陵地ニシテ海岸ヨリ北方ニ次第ニ

高ク所謂釧路高原ヲナス、含炭層ハ第三紀ノ頁岩、砂岩及燧岩ヨリ成ル、其地質年代ハ未タ確定セラレサレトモ春鳥及尺別ニアル植物化石ハ中新期ヲ代表セルモノ、如ク釧路及昆布森ニ於ケル動物化石ハ鮮新时期ニ屬スルカ如シ、傾斜ハ海岸附近ニハ寧ろ緩ニシテ内地ニ進ムニ從ヒ次第ニ急ナルカ如シ、白糠ニ於ケル石炭ハ維新前ニ採掘セラレタリト云フ、明治十八年釧路炭田開發セラレタルモ炭層ノ厚サ薄ク炭質劣等ナルヲ以テ小規模ニ稼行セラル、ノミ、釧路炭田ハ明治四十三年ニハ六萬五千四百四十四噸、同四十四年ニハ六萬五千三百三十三噸ヲ産出セリ、石炭ハ一般ニ黑色ニシテ粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
七.〇六	四〇.六一	三九.七二	一一.六一	〇.三三	低	度	瀝青炭

釧路炭田 ハ釧路ノ東ニアリテ之ヲ三區域ニ分テリ
昆布森區域ハ釧路ノ東約十一基米ニアル昆布森ノ北東約十基米ニ位

ス、含炭層ハ波状ヲナス、其傾斜角ハ炭層ノ露頭ニ沿ヒ之ヲ計ルニ僅ニ四度ナリトス、炭層ノ厚サハ約三尺ナリ、既知ノ區域ハ僅ニ〇、七平方基米ニシテ之ニ依リ概算セル炭量七十萬噸ナリ、然レトモ調査ノ進行ニ從ヒ面積ハ更ニ増大スヘク炭量隨テ増加セン

別方及大阪區域ハ釧路ノ東北東約十基米ニアリテ釧路川ノ支流別方川ニ沿ヒ別方及大阪ノ二炭坑相隣接シ小規模ニ操業ス、含炭層ハ砂岩及蠻岩ニシテ薄キ頁岩ヲ挾メリ、層向ハ一般ニ北々西ニシテ西南西四五度ニ傾斜ス、數多ノ斷層アリ、就中一大斷層ハ北方ヨリ南方ニ走レリ、現時二炭層アリ、上部炭層ハ厚サ僅ニ一尺又ハ一尺以下ニシテ北西部即チ別方炭坑ニ之ヲ見ルノミ、下部炭層ハ厚サ一般ニ二尺ナルモ時ニハ三尺ニ膨大シ又ハ一尺五寸ニ縮迫シ現ニ稼行セラル、別方炭坑ニ於ケル水準以上ノ石炭ハ既ニ採掘シ盡サレ南東部即チ大阪炭坑ニ於テハ水準上僅ニ〇、九平方基米ヲ餘スノミ、炭層ハ坑内ニハ縮迫スルカ如ク又數多ノ斷層ニ切斷セラル、ヲ以テ水準下千尺ヲ限リ炭量ヲ概算

シタリ、其概算炭量ハ第一種三百萬噸、第二種五百萬噸ナリ

春鳥區域ハ釧路ノ東約三基米ニアリテ春鳥炭坑稼行ス、本區域ハ北方春鳥湖ニ沿ヒ其沿岸ヨリ輕便鐵道アリテ釧路ト連絡ス、地ハ丘陵ヲナシ三十米乃至五十米ノ高サヲ以テ徐々ニ海岸ニ低下シ最高九十米ヲ超エス、含炭層ハ頁岩及砂岩ヨリ成リ一般ニ西南西四五度ニ傾斜スルモ數多ノ斷層アリテ地層ヲ切斷若クハ擾亂ス、既知三炭層中上層ハ薄ク稼行ニ堪ヘス、中層ハ厚サ四尺、良炭部二尺、下層ハ五尺、良炭部三尺ナリ、而シテ下部二炭層ノ上下ノ距離ハ二十二尺ナリトス、炭層ノ延長ハ三基米以上ニシテ炭量計算ニハ水準下千尺ヲ限レルモ海底下ヲ包括ス、斯クシテ概算シタル炭量ハ第一種四百五十萬噸、第二種八百五十萬噸ナリトス

舌辛炭田 ハ舌辛ノ北西約三基米ニアリテ釧路驛ノ次驛大樂毛停車場ノ北約二十基米ニ位ス、含炭層ハ頁岩、砂岩ナルモ砂岩厚ク北東ニ走リ北西三四度ニ傾斜ス、二炭層中上層ハ厚サ二尺五寸ニシテ品位劣等

ナリ、下層ハ上層ノ下約六十尺ニアリテ薄キ夾ミヲ有シ厚サ三尺時ニ五六尺ニ膨大スト云ヒ釧路炭坑現ニ之ヲ稼行ス、明治四十三年ノ産出額ハ三千五百三十八噸、同四十四年ハ三千五百八十噸ナリ、本區域ハ未タ調査セサル所多ク既知區域ハ僅ニ二平方基米ニシテ炭量ノ概算三百五十萬噸ナリ、而シテ調査進ムニ從ヒ其面積ハ増加シ隨テ炭量増大スヘシ

尺別炭田 ハ海岸ニアリテ尺別ノ北約十四基米ニ位ス、二炭層厚サ各三尺アリテ北二十度東ニ走リ一般ニ東南東三十度ニ傾斜ス、既知區域ハ僅ニ二、五平方基米ニシテ炭量ノ概算五百萬噸ナリ、本炭田ハ西方十勝ニ連リ大面積ヲ占有スト稱セラレ炭量隨テ大ナルヘシ

地質調査未タ施行セラレサルヲ以テ釧路ニ於ケル各炭田ノ廣袤ヲ知ルコト能ハサルノミナラス各炭田ヲ比較スルコト難シ、炭層ノ露頭ハ甚タ多ク以上諸炭田間處々ニ散在ス、其他釧路ニ廣域ヲ占ムル第三紀層殊ニ南半ノ區域ニハ炭層ノ露頭多ク調査ヲ要ス

十勝國

浦幌炭田 十勝川ノ一支流浦幌川ハ十勝十勝郡ノ中部ヲ流下ス、石炭ハ本郡ノ南半ニアリテ東ヨリ流下スル浦幌川ノ支流ニ之ヲ檢スヘシ、炭田ハ浦幌停車場ノ北約十四基米ニアル「ルシン」、「トコムオロ」區域ヲ除ケハ未タ調査セラレタルコトナシ、而シテ「ルシン」區域ハ「トコムオロ」區域ノ西ニ隣接ス、本炭田ハ高サ約二三百米ノ丘陵臺地ニシテ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ頁岩ハ殊ニ下部ニ厚シ、「ルシン」區域ニ於テハ層向ハ北六十五度西ニシテ南部ニハ北東十度乃至三十度ニ、北部ニハ南西二十度ニ傾斜シ一ノ向斜層ヲナス、「トコムオロ」區域ニ於テハ層向ハ一般ニ北四十五度東ニシテ傾斜ハ南東ナリ、傾斜角ハ北方ニ次第ニ急ナリ、即チ南西ニ於テハ三十度乃至三十五度、中部ニ於テハ四十五度、北東部ニ於テハ七十度ナリトス、「ルシン」、「トコムオロ」兩區域間ニハ一條ノ大斷層北東ニ走レルカ如シ、七八層ノ炭層アリテ其厚サハ上部ヨリ之ヲ數フレハ一尺四寸、一尺二寸、五寸、十尺、一尺二寸、一尺、二尺、三尺以上及五尺ナ

リトス、内第四炭層、第八炭層及第九炭層ハ重要ナリトス、第四炭層ハト
 コムオロ「區域」ニ發達シ薄キ夾ミヲ有スルモ厚サ十尺以上アリテ層向
 ニ沿ヒ約三、七基米間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、本區域ハ西方「ルシン」區域
 トハ一大斷層ニ依リ切斷セララル、ヲ以テ該炭層ノ「ルシン」區域ニ連續
 スルヤ否ヤ明ナラス、蓋シ「ルシン」區域ノ北部ニアル炭層ハ該炭層ト同
 ナナルカ如キモ向斜盆地ニ近キヲ以テ炭量多カラサルヘシ、第八炭層
 ハ唯「ルシン」區域ニ之ヲ見ルノミニシテ厚サハ三尺ヲ超ユルカ如シ、層
 向ハ北四十五度乃至五十五度西ニシテ北東三十度ニ傾斜シ延長約六
 千尺ナリ、第九炭層ハ最南ニアリテ「ルシン」區域ニ之ヲ檢スルノミ、厚サ
 ハ薄キ夾ミト共ニ五尺アリ、層向ハ北六十度乃至七十五度西ニシテ北
 東三十度ニ傾斜ス、炭層ノ延長約六千尺ナリト云フ、地下二千尺迄ヲ限
 リ炭量ヲ概算セルニ二千萬噸ヲ得タリ、石炭ハ有煙炭ニシテ常磐炭田
 ノ良質炭ニ類似ス
 石炭ハ十勝郡ノ南半ニ廣大ナル面積ヲ占ムル第三紀層ニ介在ス、未タ

調査セラレタルコトナケレトモ後來多量ノ石炭ヲ供給スヘシト思惟
 セラル

日高國

日高ニハ石炭ハ南西ニ廣域ヲ領スル第三紀層ニ介在ス、幕別炭田ハ中
 部ニアリテ海岸ヲ距ルコト約十基米ノ地ニアリ、本炭田ハ明治三年ニ
 開發セラレタルモ交通不便ノ故ヲ以テ一年後廢棄セラレタリ、第三紀
 ノ層向ハ北四十五度西ニシテ四十五度ノ角度ヲ以テ傾斜ス、二炭層ア
 リ、上層ハ厚サ三尺、下層ハ厚サ四尺ナリトス、炭量概算ハ千五百萬噸ナ
 リト云フ、石炭ハ質比較的良好ナリ、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
一三、七四	三九、二〇	三九、〇六	八、〇〇	一、二八〇	黑	褐	炭

幕別炭田ニ殆ント隣接セル地域ニハ厚サ種々ナル數多ノ炭層アルモ
 未タ踏査セラレスシテ茲ニ記述スルノ材料ナシ

荷負、ボロカハエ、毛馬内、新冠、静内ニハ石炭ヲ産スト云フ

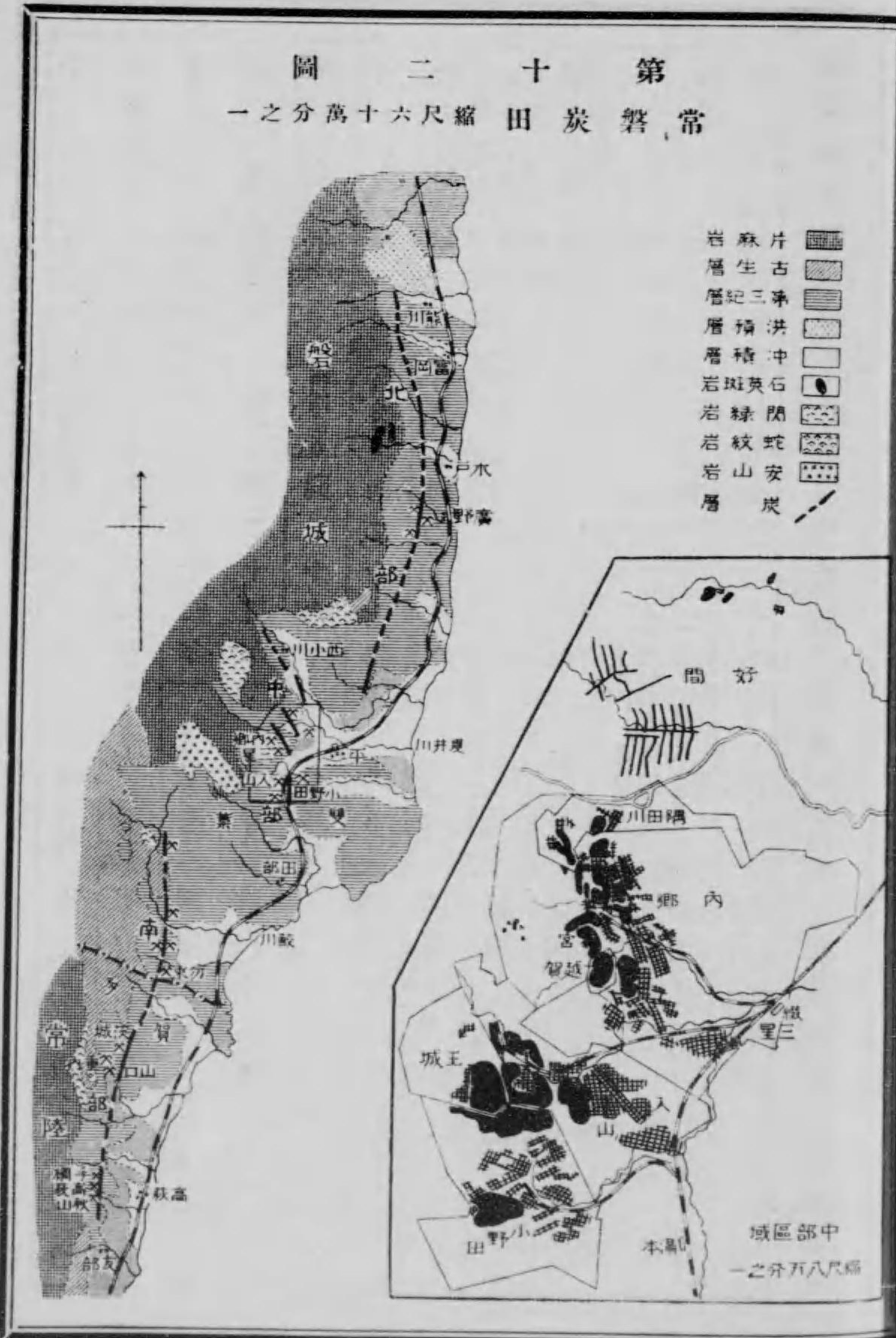
三 本 州

常磐炭田 (第十二圖參照)

位置及沿革 常磐炭田ハ阿武隈高原ノ東側ニアリテ太平洋岸ニ沿ヒ南北ニ連互シ延長約八十基米ニ達シ東京、仙臺間鐵道海岸ヲ通過ス、而シテ大炭坑ハ支線ヲ布設シテ之ニ連絡シ運搬便ナリ

本炭田ノ沿革ニ關シテハ記録ナケレトモ石炭ハ已ニ數百年前ヨリ採掘セラレタリト云ヒ嘉永年間初メテ多賀郡ニ於テ採掘セラレ數年後白水炭坑開發セラレタリ、明治元年ニハ石炭ハ小規模ニ各所ニ採掘セラレ十年後ニ至リ交通ハ次第ニ發達シ産出額隨テ増加シ茲ニ資本家ノ注視スルトコロトナリ明治十七年始メテ現ニ大炭坑ノ一ナル小野田炭坑歐洲式ノ最新採掘法ニヨリ採掘ヲ開始シタリ、爾來工業并ニ交通ノ發達ニ依リ産出額ハ急激ニ増加シ殊ニ明治二十九年及同三十三年ニ於テ著シトス、産出額ハ次ノ如シ

第二十圖 常磐炭田縮尺六十分之一



年	別	產	出	額	年	別	產	出	額	年	別	產	出	額
明治十二年				一、一〇八	明治二十三年				三六、五五七	明治三十四年				五六、五七九
同十三年				—	同二十四年				四五、六六六	同三十五年				六八、三二六
同十四年				三四、四八	同二十五年				三一、〇八二	同三十六年				六一、九四二
同十五年				四、四三五	同二十六年				三四、四二一	同三十七年				七二、五六二
同十六年				三、九六七	同二十七年				五〇、五〇五	同三十八年				九二、七〇七
同十七年				五、七一二	同二十八年				六〇、八〇九	同三十九年				一一、二五、五二七
同十八年				一三、五一九	同二十九年				八一、八〇七	同四十年				一一、二四、五九一
同十九年				六、一九一	同三十年				一六八、三二〇	同四十一年				一一、二八、六五八
同二十年				九、六八八	同三十一年				三五五、九一二	同四十二年				一、四二、六四〇
同二十一年				—	同三十二年				三六三、一九四	同四十三年				一、四六、八七三
同二十二年				三三、七七〇	同三十三年				四九三、〇一一	同四十四年				一、六三、三〇八

地形及地質 地形ハ丘陵性波狀ノ臺地ニシテ一般ニ海岸ニ低下シ河

流ハ主ニ東流シテ本地域ヲ横斷ス、基盤ハ主ニ片麻岩及其他ノ變成岩ニシテ其他閃綠岩、花崗岩等アリ、第三紀層ハ以上ノ諸岩層ヲ不整合ニ被覆シ中部ニ最モ好ク發達ス、便宜上之ヲ上、中、下ノ三部ニ區別ス、下部層ハ頁岩、砂岩及巒岩ヨリ成リ上部ハ凝灰質ナルコト多ク其最モ能ク發達シタルトキニハ厚サ約千五百尺アリ、中部層ハ主ニ頁岩及砂岩ヨリ成リ上部層ハ主ニ各種ノ凝灰岩ナリトス、層向ハ約南北ニシテ殆ント西方ノ山脈又ハ海岸線ニ平行ス、傾斜ハ東方二十度乃至二十五度ナリトス、隨テ下部層ハ炭田ノ西部ヲ領シ直ニ古岩層ヲ被覆シテ上部層ハ東方即チ海岸附近ニアリ、褶曲斷層甚タ多シ、斷層ノ方向ハ傾斜ニ一致セルコト多ク東西ナルコト多キモ南北ニ走レルモノ亦少ナカラス、而シテ傾斜角ハ一般ニ六十度乃至八十度ナリ、地層ノ喰違ハ大ナルトキハ約千五百尺ナルモ普通ハ之ヨリ甚タ小ナリ、主要ナル炭層ハ下部層中ニアリ、植物化石ノ研究ニ依リ本層ハ中新紀ニ屬スルカ如シ、然レトモ介殼化石ノ下部層ノ上部ニアルコトアリテ之ニ依レハ鮮新时期ニ

屬スルカ如シ、蓋シ中部層及上部層ハ鮮新期ニ屬スルモノアラシ
 炭層 炭層ハ其數甚タ多ク中部層ニアルモノハ主要ナラス、地層ハ中
 部ニ最モ好ク發達シ炭層亦最モ厚ク質良好ニシテ採掘盛ナリ、然レト
 モ炭層皆發達セルニアラスシテ或ハ薄ク稼行ニ堪ヘサルモノアリ、一
 般ニ厚サ三四尺ノ二炭層アリテ之ヲ追跡スルヲ得ヘキモ其發達ハ所
 ニ依リ差異アリ、本炭田ハ便宜上之ヲ北部、中部及南部ノ三ニ區別ス
 炭質 石炭ハ一般ニ黑色ニシテ粘結セス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	比	重	發熱量	種類
一〇.八三	四一.七六	三五.九八	一一.四三	一.五八	一.三四九	五.四七六	九.八五七	英國熱單位	黑褐炭

炭量 小區域ヲ除ケハ石炭ハ實測ニ依リ其賦存ノ區域ヲ確定シタル
 コトナシ、湯本附近ニハ二千尺以下ニ試錐セラレタル所アリト雖モ所
 ニヨリ未タ主要炭層ニ會セサルモノアリ、茲ニ概算セル第一種炭量四
 千三百萬噸、第二種炭量二億七千萬噸ナリ

北部區域 ハ本炭田ノ北端ヨリ南方平ノ平原ニ終ハレル地域ヲ包括
 ス、炭層ハ北端ニ於テハ甚タ薄キモ主要炭層ハ南方ニ次第二厚ク平均
 二尺アリ、中部ニハ主要炭層ヲ採掘ス、茲ニハ該炭層ハ厚サ三尺五寸ニ
 膨大シ東方十五度乃至十八度ニ傾斜ス、主要炭層ノ上五百五十尺乃至二
 百尺ニ厚サ平均約三尺ノ一炭層アルモ品位劣等ナルヲ以テ未タ稼行
 セラレス、明治四十三年ニ於ケル產出額ハ三萬三千百十噸、同四十四年
 ニハ六萬七千八噸ナリ、石炭ハ更ニ南方ニ之ヲ追跡スルヲ得ルモ品位
 劣レリ、傾斜ハ東方五度乃至十度ナリトス、地層ハ平ノ平野ニ沒シテ中
 部區域ノ炭層ハ遙ニ西方ニ露出ス
 中部區域 ノ石炭ハ最モ盛ニ稼行セラル、炭層ノ北端ハ甚タ薄キモ直
 ニ數尺ニ膨大シ夾ミヲ加ヘ約六尺アリテ南々東ニ走り稼行スヘキ石
 炭ノ厚サ一般ニ二尺五寸、夾ミヲ加ヘ四尺乃至七尺アリ、傾斜ハ東南東
 ニシテ其角度ハ一般ニ十度ナリ、西小川ニ於テハ主要炭層ハ夾ミヲ加
 ヘ厚サ八尺アリ、此外二三尺ノ三炭層及九寸ノ一炭層溪谷ニアルモ品

位一般ニ劣等ナリ、石炭ハ一タヒ花崗岩ニ接シ又ハ第三紀層ハ西小川ノ南ニ於テ浸蝕作用ノ爲メ除去セラレテ切斷ス
 西小川ノ南部平ノ西方ハ炭層ノ最モ發達セル所ニシテ五大炭坑茲ニ稼行シ本炭田ノ產出額ノ四分ノ三ヲ產出ス、五大炭坑ノ產出額ハ次ノ如シ

	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
入山	二三八、九三〇	二五一、七三六	二七〇、七五九
内郷	二三一、五一九	二五八、九二一	三一七、九二七
小野田	一五九、八八七	一六九、六七八	一八九、八〇四
好間	一五六、六五九	一五八、一五〇	一八〇、九一四
三星	四、三〇六	五四、一五三	一二五、二六九
其他ノ炭坑	三二六、〇四七	一九一、五〇六	一四一、一九七
合計	一、一七、三四八	一、〇八四、一四四	一、二二五、八七〇

地質構造ハ甚タ複雑ニシテ背斜層及向斜層ヲナシ斷層多キモ層向ハ一般ニ北々東ニシテ東南東ニ緩斜ス、傾斜角ハ十度以下ナリ、石炭ハ基岩ニ近ク又ハ直ニ基岩ニ接ス、六炭層アリ、上部ヨリ之ヲ數フレハ厚サ一般ニ二尺、三尺、五尺、二尺五寸、一尺及二尺五寸ニシテ第三炭層ヲ主要ナリトス、然レトモ隨所厚サ異ニシテ九尺以上ニ膨大スルコトアリ、北部即チ好間炭坑ノ稼行セル區域ニ於テハ主要炭層ハ品質寧ロ劣等ニシテ厚サ七尺アルモ四條ノ薄キ夾ミヲ有シ稼行スヘキ石炭ノ厚サハ五尺ナリ、上部即チ第二炭層ハ厚ク且ツ良質ニ、厚サ九尺五寸アリテ四條ノ夾ミヲ有シ稼行スヘキ石炭ハ厚サ八尺ナリ
 南部ニハ内郷、三星、入山、小野田等ノ諸炭坑相隣接シテ最モ盛ニ稼行セラル、北方内郷、三星等ノ炭坑ニハ三炭層アリ、主要炭層即チ第三炭層ハ厚サ七尺五寸、上部炭層即チ第二炭層ハ六尺、下部炭層即チ第四炭層ハ厚サ二尺ニシテ共ニ薄キ夾ミヲ有ス、傾斜ハ一般ニ東十二度ナリ、綴停車場附近ノ三星炭坑ニハ主要炭層ハ八尺以上ニ膨大シ之ヲ稼行ス、内

郷炭坑ノ南方ニ接セル宮炭坑ニハ主要炭層ノ外厚サ各一尺ノ下部ノ二炭層ヲ探掘ス、而シテ稼行炭層ノ總厚ハ十三尺ナリ、南方入山、小野田等ノ有名ナル炭坑ニモ亦主要ナル三炭層アリテ四尺、六尺乃至八尺及二三尺ノ厚サヲ有シ中部炭層即チ主要炭層即チ第三炭層最モ良好ナリトス、而シテ炭層ハ屢薄キ夾ミヲ有ス、層向ハ一般ニ南北ニシテ東方十二度ニ傾斜ス、南方ニハ炭層ハ薄條トナリ又ハ大斷層ニ依リ切斷セラレ南部區域トノ連絡ハ未タ明ナラス

南部區域ニ於テハ五六層ノ炭層アリ、其中部區域トノ關係ハ明ナラス、北方鮫川及其支流ニ沿ヒ小規模ニ稼行セラル、炭層アリ、産出額ハ明治四十三年ニハ九萬千二百二十九噸、同四十四年ニハ七萬八千四百七十三噸ナリ、主要炭層ハ厚サ一般ニ三四尺ナルモ品位寧ろ劣等ナリ、第一炭層ハ所ニ依リ發達シテ三尺五寸ノ厚サヲ有シ南方勿來炭坑ニ於テ稼行セラル

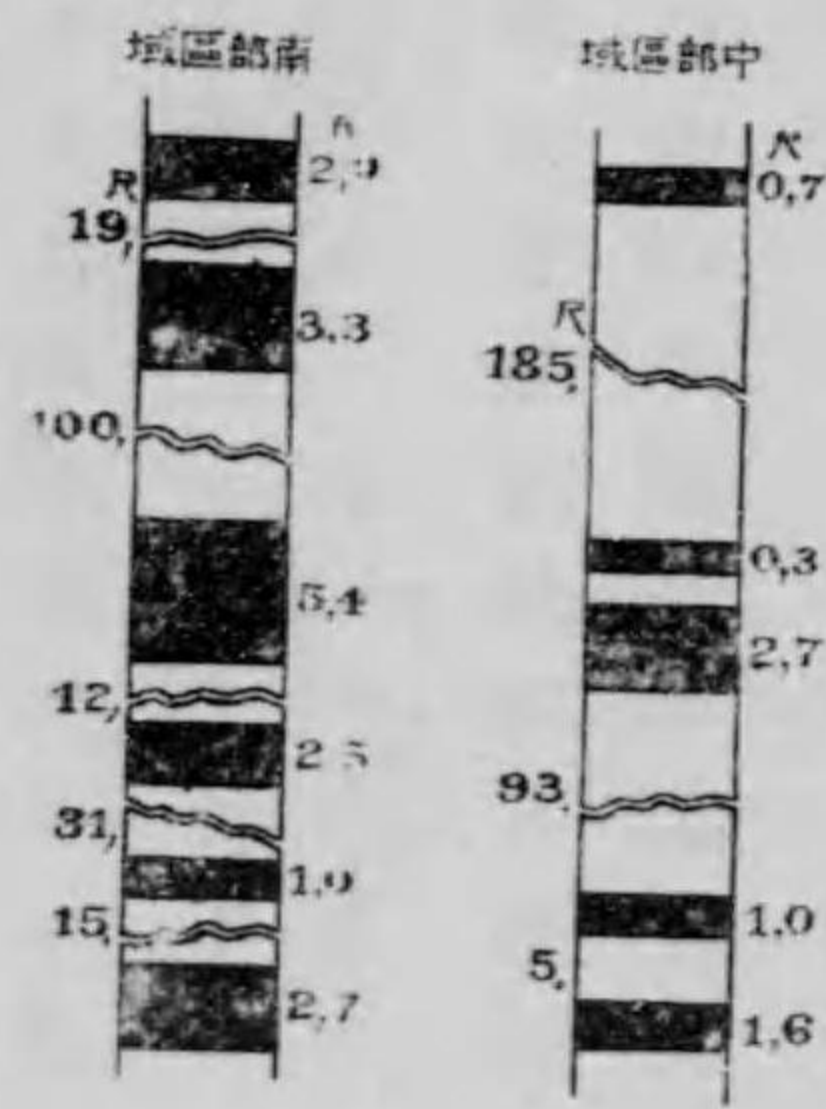
中部ニハ茨城無煙炭、重内、山口無煙炭ノ三炭坑アリテ明治四十四年ニ

ハ五萬噸以上ヲ産出セリ、即チ次ノ如シ

重	内	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
茨城	無煙炭	七七、八四四	八〇、五四二	七四、五三二
山口	無煙炭	六五、九六四	六六、二一九	六八、三三二
			四二、三一一	五二、二〇一

五炭層中二層ハ一般ニ稼行セラレ下層ハ質良好ニシテ厚サ二尺五寸乃至五尺、上層ハ寧ろ劣等ニシテ厚サ一尺乃至二尺五寸ナリ、地層ハ變動ヲ受クルモ一般ノ層向ハ南北ニシテ東方十五度ニ傾斜ス

圖三十第
圖面斷狀柱田炭磐常
一之分百二尺縮



同四十四年ニハ五萬千五百六十六噸ヲ産出セリ、一主要炭層稼行セラ

南方ニハ高萩、秋山等ノ炭坑アリ、明治四十三年ニハ四萬七千九百五十八噸、

等ナリ、此外二炭層下部炭層ノ下部ニ存在スト稱セララル、モ重要ナラ
ス、層向ハ北部ニハ北四十度東ナルモ南方ニハ次第ニ南北ニ轉シ傾斜
ノ角度ハ平均三十度ナリ、地層ハ東方即チ山ノ頂上ニ於テ一ノ背斜層
ヲナス、其東翼ニ於テハ第三紀層ノ上部ハ浸蝕作用ニ依リ除去セラレ
タルヲ以テ此部分ニ於ケル炭量ハ甚タ小ナルヘシ、西翼ニハ數多ノ斷
層アルモ主ニ稼行セラル、所タリ、一般ニ炭層ハ東方ニ縮迫スルカ如
ク將來稼行スヘキ區域ハ南部及西部ニシテ水準以下ナリトス、東方ヨ
リ油戸ニ流下スル河流ノ北方ニハ石炭ノ露頭ナシ、是レ或ハ一斷層ノ
此溪谷ニ沿ヒ走レルモノアリテ石炭ハ地下ニ沈降シタルモノナルヘ
ク更ニ精査ヲ要ス、調査未タ完成セサルヲ以テ炭量概算ノ區域ハ甚タ
小ニシテ二、八平方基米ナリ、之ニ依リ概算スルニ第一種炭量五十萬噸、
第二種炭量五百萬噸ナリ

坑ニハ厚サ一般ニ二尺内外時ニ四尺ニ膨大スル二三ノ炭層アリ、熱海
附近ノ炭坑ニハ厚サ一尺乃至三尺ノ炭層管テ稼行セラレタリ、大岩川
附近ニハ厚サ一尺五寸乃至二尺ノ二炭層海岸ニ露出シ西北西二十五
度ニ走レリ、是等炭層相互ノ關係及油戸ニ於ケルモノトノ關係ハ未タ
明ナラサルモ炭量大ナラサルヘク其總量或ハ油戸ニ於ケルモノヲ超
エサルヘク即チ五百萬噸内外ナラン

濃尾炭田

濃尾炭田(第十五圖參照)ハ濃尾平原ノ東ニアル廣大ナル丘陵地及知多
半島ヲ包括シ木曾川其北部ヲ流下ス、炭田ノ北方及東方ハ古生層及花
崗岩ノ產地ニ圍繞セラレ知多半島ハ南方ニ突出シ高サ僅ニ百米内外
ノ波狀ノ丘阜地ヲナシ主ニ砂層、礫層及粘土層ヨリ成リ凝灰岩又ハ火
山灰ヲ挾ミ石炭ヲ埋藏ス、含炭層ハ古生層又ハ花崗岩ヲ不整合ニ被覆
シ殆ント水平層ヲナシ若クハ僅ニ波狀ヲ呈ス、傾斜ノ角度ハ甚タ緩ニ
シテ稀ニ十五度ニ達スルコトアリ、北部ハ古生層及花崗岩ニヨリ隔テ

第五十圖
濃尾炭田
縮尺百萬分之一



加シ主ニ製絲場其他ノ小工場ニ使用セラレ又ハ薪炭代用ニ供セラル、
產出額ハ次ノ如シ

年別	產出額	年別	產出額	年別	產出額
明治十二年	三〇二	明治二十三年	一〇六一	明治三十四年	一六三七
同十三年	四七九	同二十四年	一四六七	同三十五年	四〇二四〇
同十四年	四六二	同二十五年	一三六二	同三十六年	三七五八四
同十五年	二〇六五	同二十六年	一六三八	同三十七年	三八六六七

ラレ便宜上之ヲ三
區域ニ區別ス
石炭ハ其發見ノ時
代古ク約三百年前
ヨリ稼行セラレタ
リト云フ、明治維新
後產出額次第ニ増

同十六年	—	同二十七年	二、三九一	同三十八年	四一、九二五
同十七年	二六二	同二十八年	四、一二九	同三十九年	五九、四三二
同十八年	二四〇三	同二十九年	五、七四四	同四十年	五八、五四七
同十九年	七、九一七	同三十年	七、六九五	同四十一年	六八、三三三
同二十年	九、五七四	同三十一年	五、七七七	同四十二年	八一、四三三
同二十一年	—	同三十二年	五、八二六	同四十三年	八三、一八九
同二十二年	一〇、五一一	同三十三年	五、三九八	同四十四年	七八、三八二

石炭ハ品位甚タ劣等ノ褐炭ナリ、粘結セス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
一七、六二	三八、二四	三〇、九七	一三、一七	〇、三九	褐	炭	

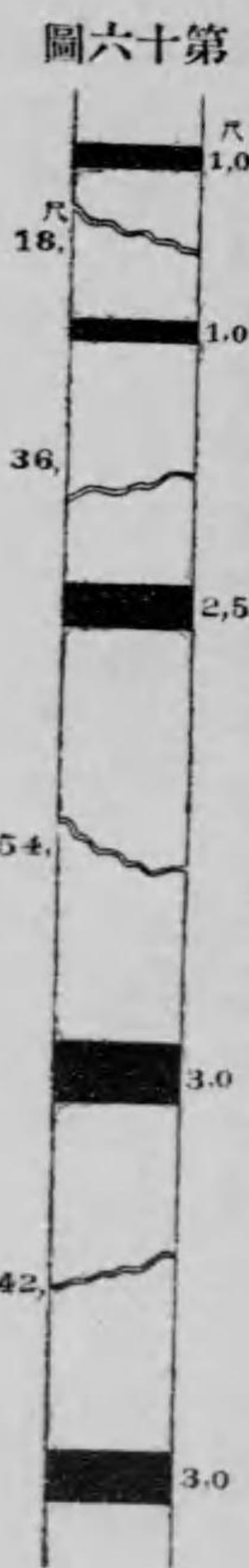
土岐區域ハ高山ノ東部ニアリテ炭田ノ北東部ヲ占ム、土岐川ハ殆ン
ト本區域ノ中部ヲ東方ヨリ西方ニ走レリ、含炭層ハ花崗岩ノ盆地ヲ不
整合ニ被覆シ盆地ノ中央ニ向ヒ傾斜ス、傾斜ノ角度ハ五度乃至十度ナ

ルモ數箇所ニ二十五度ノ角度ヲナストコロアリ、稼行スヘキ炭層ハ一層ニシテ平均厚サ二尺五寸乃至三尺ナリ、炭量ハ第一種二百萬噸、第二種五百萬噸ナリト云フ

御嵩區域ハ炭田ノ北部ニアリテ御嵩及木曾川支流可兒川ニ沿ヒ石炭ハ御嵩、伏見間ノ街道ノ北ニ主ニ稼行セラレ、含炭層ハ北方ニハ古生層ヲ不整合ニ被覆シ一般ニ南方五度ニ傾斜ス、主要ナル炭層ハ一層ニシテ厚サ東方ニハ四尺五寸乃至八尺ナルモ西方ニハ縮迫シテ三尺五寸乃至五尺五寸平均四尺トナレリ、川ノ南方ニハ炭層ハ更ニ薄ク一炭坑ノ稼行スルノミニシテ厚サ二尺五寸ナリ、炭量ハ第一種百五十萬噸、第二種二百萬噸ナリ

春日井區域ハ最も重要ニシテ炭田ノ中部ヲ占メ尾張平野ノ東ニ位シ南北ノ延長約二十基米アリ、含炭層ハ北方ニハ古生層ヲ、東方ニハ花崗岩ヲ被覆シ殆ント水平層ヲナシ若クハ波狀ヲ呈ス、三炭層アルモ最下炭層ハ稼行セラレ、モノニシテ知多半島ノ上部炭層ニ該當スルモ

東春日井郡飯田井柱狀斷面圖 縮尺二百分之一



ノ、如シ、厚サハ五尺五寸ナルモ良好ナル部分ハ一尺五寸乃至五尺ナ

リ、然レトモ二炭層其下約五十尺ニ存在スルコト確實ニシテ厚サハ各三尺ナリト云フ、南方ニハ炭層ハ縮迫シ品位又劣等トナレリ、炭量ハ第一種九百五十萬噸、第二種二千百萬噸ナリ

知多半島 石炭ハ知多半島ノ南半ニアリ、含炭層ノ走向ハ殆ント海岸ニ平行シ一般ニ東方ニ傾斜ス、傾斜ノ角度ハ四五度ナルモ稀ニ十五度ニ達スルコトアリ、四炭層アルモ概ネ薄ク厚サ一尺未滿ナリ、下部三炭層ハ相接近シテ二十尺ノ間ニアルコト多ク最下炭層ハ一般ニ稼行セラレ厚サ一二尺ニシテ時ニ三尺ニ膨大ス、炭量ハ小ニシテ僅ニ百五十萬噸ナリト云フ

熊野炭田

熊野炭田(第十七圖參照)ハ紀伊ノ南東部ニアリテ熊野川沿岸ニ位ス、重

第七十圖 熊野炭田 縮尺五萬分之一



要ナル區域ハ比較的小ニシテ南北約五基米、東西約三基米ナリ、地形ハ高峻ニシテ高サ六七百米ニ達シ溪谷ニ傾斜シ河岸ニ平地少ナク坑口ハ高サ時ニ四百米ノ山側ニアリ、運搬ハ熊野川ニ依リ太平洋沿岸ノ小港新宮ニ達ス、

新宮ハ本炭田ノ南東約二十五基米ニアリテ此地ヨリ石炭ヲ輸出ス、石炭ハ明治維新前ニ發見セラレタルモ其開發ハ明治二年ニアリ、然レトモ交通不便ニシテ需要少ナキ爲メ同十二年ニ廢棄セラレタリ、同十八年再開セラレ同三十一年最モ盛ニシテ七萬二千噸ヲ產出シ同三十年及同三十二年ニハ五萬四千噸ニ減少セリ、明治三十一年以來產額更ニ減シテ一年平均三萬六千噸トナレリ、其開發以來ノ總產出額ハ約九十九萬噸ナリト云フ、產出額ハ次ノ如シ

年別	產出額	年別	產出額	年別	產出額
明治十二年	二〇二五 <small>噸</small>	明治十七年	六六 <small>噸</small>	明治二十二年	一五九六六 <small>噸</small>
同十三年	—	同十八年	二八八八	同二十三年	三〇三一二
同十四年	三四一二	同十九年	三、二六五	同二十四年	二六、九八三
同十五年	二、八四九	同二十年	一、二八九	同二十五年	三〇、三六七
同十六年	—	同二十一年	—	同二十六年	三五七一四

第十圖
小野田炭田縮尺十二萬分之一



井兩炭坑ニ於テハ厚サハ夾ミト共ニ四尺、稼行スヘキ部分三尺乃至三尺五寸ナリ、是等炭坑ノ南北ニハ夾ミハ次第ニ膨大シ炭層ノ厚サ減少シ炭竈炭坑ニ於テハ中部ニ厚サ七尺ノ夾ミヲ有シ上下炭層ノ厚サ各

八寸ナリ、要スルニ炭層ハ南北ニ縮迫シ稼行炭層賦存ノ區域廣カラサルカ如ク且ツ容易ニ稼行シ得ヘキ炭層ノ大部分ハ既ニ探掘シ盡サレ將來餘ストコロ大ナラサルヘク炭量概算五百萬噸ナリ、石炭ハ漆黑色ニシテ半金屬光澤ヲ有ス、分析ノ結果次ノ如シ
(百分中)

含炭層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ化石ヲ埋藏ス、本炭田ハ嘗テ天草炭田ノ如ク白堊紀層ニ屬スルモノト思惟セラレタルモ化石ノ研究ニ依リ中新期ニ屬スルコトヲ知レリ、層向ハ區々ナルモ一般ニ北三十度乃至六十度東ニ走リ南東十度乃至十八度ニ傾斜ス、斷層數多アリテ多クハ層向又ハ傾斜層ナリトス、三炭層頁岩中ニ介在シ炭田ノ北部及西部ニ露出ス、就中々部炭層最モ重要ニシテ上部炭層及下部炭層ハ薄ク品位劣等ナリ、中部炭層ノ厚サハ種々ナルモ平均二尺五寸ナリ、音川及宮

同二十七年	四二、三〇三	同三十三年	三八、三一三	同三十九年	五一、九四四
同二十八年	三五、四二九	同三十四年	三七、六八三	同四十年	四〇、九九二
同二十九年	四一、七五八	同三十五年	三七、二九一	同四十一年	四一、一四三
同三十年	四〇、一五〇	同三十六年	四〇、四一八	同四十二年	三〇、九七九
同三十一年	五五、九〇七	同三十七年	三二、一八四	同四十三年	三五、一九八
同三十二年	三九、七一五	同三十八年	三二、七二五	同四十四年	四五、三一五

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
六六七	五、一五	七八、五七	九六一	二〇三	無	煙	炭

小野田炭田 (第十八圖參照)

位置及沿革 小野田炭田ハ長門ノ南部海岸ニアリテ低卑ナル丘陵地ヨリ成リ厚東川及有帆川南流シ交通至便ノ地ニアリ、南ハ海岸ニ接シ鐵道ハ殆ント中部ヲ横斷ス、石炭ハ明治維新前ニ發見セラレ明治八年ニハ既ニ主ニ地方人民ノ稼行スル所タリ、同二十三年以來、鑛業ハ次第ニ發達セリ、產出額ハ次ノ如シ

年 別	產 出 額	年 別	產 出 額	年 別	產 出 額
明治十二年	六六、三九〇 <small>噸</small>	明治二十三年	一三六、六六八 <small>噸</small>	明治三十四年	一一二、四八七 <small>噸</small>
同十三年	—	同二十四年	一三八、六八三	同三十五年	一二四、三一八
同十四年	四〇、三八九	同二十五年	一四三、〇六二	同三十六年	一三四、一四八
同十五年	四三、六一一	同二十六年	一三六、四八九	同三十七年	一三一、七九八

同十六年	五九、〇〇一	同二十七年	一八八、〇三九	同三十八年	二〇三、四一四
同十七年	四八、四七三	同二十八年	二〇二、六九七	同三十九年	二一一、三四五
同十八年	四三、〇四八	同二十九年	一九四、九〇七	同四十年	二九三、三三五
同十九年	三六、五六二	同三十年	一九八、六七〇	同四十一年	三一、三二一
同二十年	三〇、三九三	同三十一年	一七三、〇一八	同四十二年	二九三、一一八
同二十一年	—	同三十二年	一八四、六四六	同四十三年	三九二、六九八
同二十二年	七一、三五九	同三十三年	一二二、〇七三	同四十四年	三九八、七五七

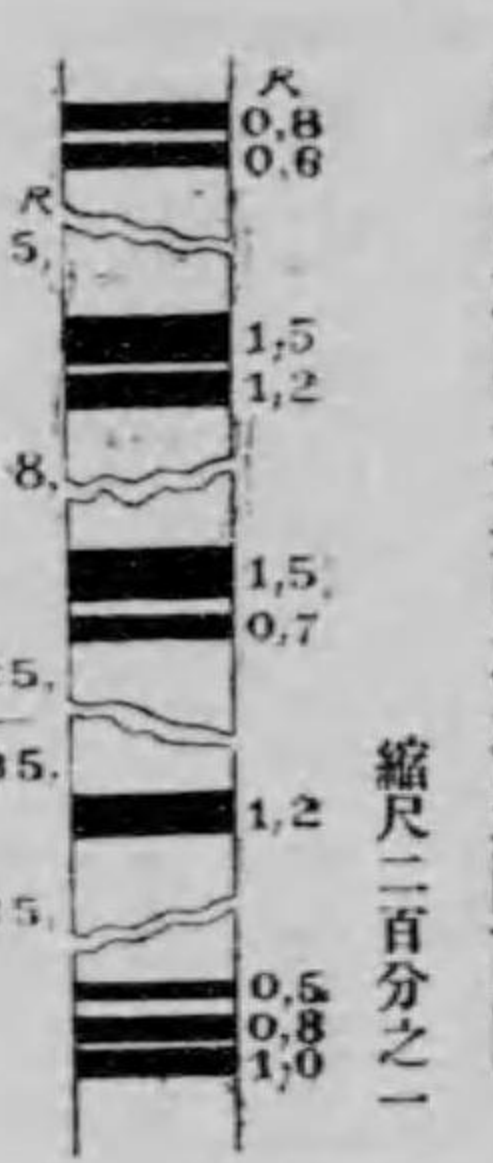
地質 含炭第三紀層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ古生層、中生層及花崗岩ヲ不整合ニ被覆シ南方ハ海中ニ沈降シ現ニ石炭ハ海底ニ於テモ亦稼行セラル、一般ニ地層ハ緩慢ナル波狀ヲナス、傾斜角ハ十度以下普通五六度ニシテ直ニ基盤ニ接スル處ハ稍急ナリ、炭田ハ便宜上分テ三區域トナス

炭質 石炭ハ褐炭ニ屬ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃比	重	種	類
八、三三	四二、六四	三六、五六	一一、五七	一、三九	一、三八〇	黑褐炭		

炭量 宇部區域ニテハ水準以上ノ石炭ハ殆ント採掘シ盡サレ將來ノ採炭區域ハ現ニ稼行スル海底下ニアリトス、其他ノ區域ニ於テハ良好ニシテ容易ニ稼行シ得ヘキ石炭ハ採掘シ盡サレ將來ノ鑛業ハ困難ナルコト少ナカラス、炭量第一種九百萬噸、第二種七千八百萬噸ナリ

舟木區域 ハ舟木附近及有帆川西部ノ地域ヲ包括ス、含炭層ハ北方ニハ中生層ヲ被覆シ、花崗岩、石灰岩及中生層ハ又中部ニ露出ス、含炭層ノ基盤ニ接スル所ハ傾斜稍高クシテ約十度ナルモ次第ニ減少シテ五六



度ニ變シ緩慢ナル波狀ヲナス、五炭層アリ、(第九圖甲)下部四炭層ハ稼行スルヲ得ヘシ、厚サハ一尺二寸ヨリ三尺五寸ノ間ニアリ、炭坑ノ多數ハ現時一炭層ヲ稼行スルノミニシテ厚サハ西部ニ於テハ一尺五寸乃至二尺、東部ニ

於テハ二尺乃至三尺ナリ

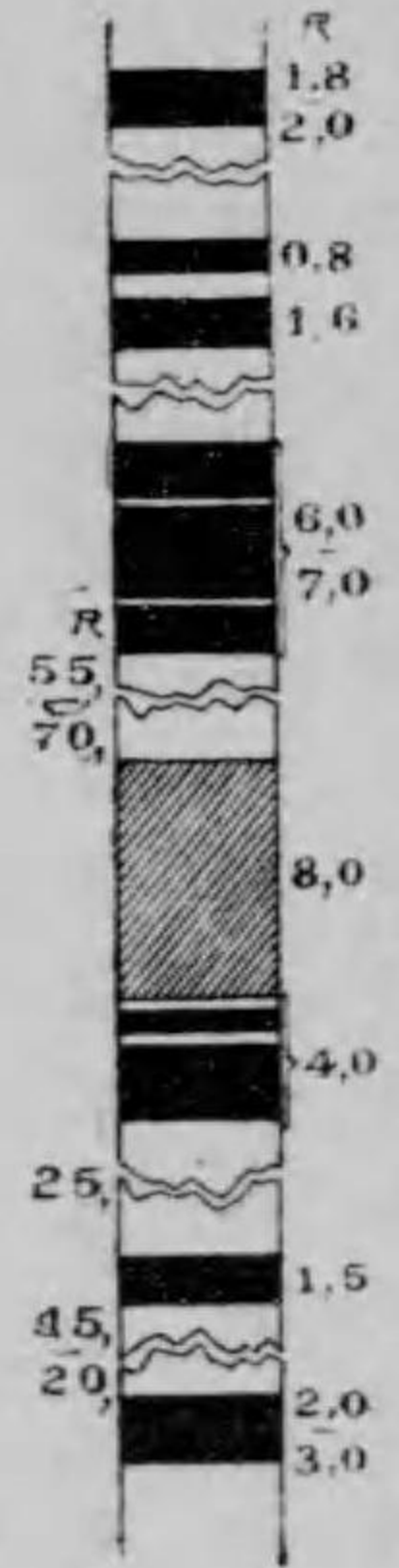
小野田區域 ハ小野田海岸及厚東川間ノ地域ヲ包括ス、含炭層ハ南北ニ走り兩側ハ洪積層及沖積層ニ被覆セララル、五炭層アリ、上部炭層ハ舟木區域ノ第二炭層ニ該當ス、平地ニ於テハ上部炭層ハ既ニ除去セラレタリ、炭層ノ厚サハ甚タ區々ナルモ一尺五寸ヨリ五尺五寸ノ間ニアリ、第一炭層ハ厚サ一尺八寸、第二炭層ハ二尺二寸ニシテ嘗テ稼行セラレタリ、第三炭層ハ厚サ五尺五寸ニシテ炭質頁岩ヨリ成レルモ宇部區域ニ於テハ良質炭ニ變ス、第四炭層ハ最良ナルモノニシテ茲ニ稼行セララル、唯一ノ炭層ナリ、厚サハ二尺乃至三尺五寸、平均二尺五寸ナリ

宇部區域 ハ炭田ノ南東部ニアリテ厚東川ノ東沿岸區域ヲ包括シ含炭第三紀層ヲ被覆スル洪積臺地ヨリ成ル、沖積平野ハ厚東川ノ南西海岸ニ分布ス、本區域ハ小野田炭田中最モ重要ナルモノニシテ明治四十四年ニ五萬噸以上ヲ產出セル神原及沖ノ山ノ兩炭坑アリ、其產出額次

神	原	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
沖	山	四六、二七四	八二、七一二	一一二、四〇五
		四九、二八六	九六、一二三	一二五、八九二

第十九圖 (乙)

小野田炭田宇部區域柱狀斷面圖 縮尺二百分之一



六炭層中上部五層ハ小野田區域ノ炭層ニ該當ス、主要ナル炭層ハ第三炭層及第四炭層ニシテ厚サ前者ハ五尺、後者ハ四尺ナルモ時ニ七八尺ニ膨大ス、其他ノ炭層ハ薄クシテ品位劣等ニ其特ニ發達セルトキハ稼行セラル

本州東北部ニ於ケル石炭

(一) 陸奥國

猿ヶ森附近ノ石炭 陸奥ノ北東半島ヲ形成スル丘陵地ハ主ニ第三紀頁岩ヨリ成リ砂岩、燧岩ヲ挾ミ中新期ニ屬スヘシト云フ、石炭ハ太平洋

沿岸猿ヶ森ヲ距ル遠カラサル丘陵地ニ露出シ約四十五年前ヨリ時ニ小規模ニ採掘セラレタルモ明治二十九年全ク廢棄セラレ其開發以來ノ總產出額ハ僅ニ四百噸内外ナリト云フ、層向傾斜ハ區々ナルモ一般ニ層向ハ北西又ハ約東西ニシテ北東又ハ南西十度乃至二十度ニ傾斜シ一向斜層ヲナス、炭層ハ一層ニシテ厚サ三四尺アルモ夾ミ甚タ多ク採掘シ得ヘキ部分ハ僅ニ一尺五寸ニ過キス、炭層賦存ノ區域小ニシテ炭量小ナルヘシ、石炭ハ品位劣等ノ有煙炭ニシテ粘結セス、或ハ黑褐炭ニ屬スルモノナラン

岩崎附近ノ石炭 日本海沿岸岩崎附近ノ第三紀層ハ頁岩、砂岩及凝灰岩ヨリ成リ炭層ヲ埋藏ス、層向ハ區々ナリ、二炭層アルモ共ニ薄ク厚サ概ネ一尺五寸乃至二尺ナリ、石炭ハ品位劣等ナルモ火山岩ノ爲メ無煙炭ニ變スルトコロアリ、炭量小ナリ

弘前ノ南部ニアル石炭 弘前ノ南約四基米ニ當リ五炭層第三紀ノ頁岩及砂岩ニ介在セラレ北方三十度ニ傾斜ス、炭層ハ厚サ皆薄ク皆テ採